## 地域資料叢書18

# 続・土佐の地名を歩く

一高知県地域史研究論集 I —



奥四万十山の暮らし調査団編

## 巻頭言

本書、『続土佐の地名を歩く』は地域資料叢書18として刊行される。その巻頭のことばを執筆させていただけることは、まことに光栄である。

本書は土佐の地名をはじめとした文化遺産の発掘・保護・顕彰につとめておられるグループで、ホームページ『四万十町地名辞典』を主宰する「奥四万十山の暮らし調査団」による2冊目の報告書である。前巻『地域資料叢書17 土佐の地名を歩く』に続く本書は「第1章 旅行記を歩く」「第2章 古地図を歩く」「第3章 峠を歩く」の3章構成で、計5本の論考が収録される。

第1章は、江戸中期の旅行記『土佐一覧記』をもとに旅を追体験し、平成の『土佐一覧記』を体感しようとするものである。キーワードには、旦過・布施屋・善根宿、算所やしき、頭陀、物乞い、鷹ノ巣、塩の道、 馬借など歴史学、社会史からの観点でも極めて興味深い単語が並ぶ。そのいくつかは明らかに今日の景観に連続している。すこぶる魅力がある。

第2章では、『弘岡井筋絵図』に記された小田の井流(ユル)、木材を落とす装置である「新川の落とし」、 西分の切抜・唐音の切抜などの遺構を現地で確認していく論考が収録されている。コンクリート化で詳細 が不明になりつつある用水施設に関する追跡調査で、水の不足に苦しんだ先人たちの労苦をしのぶ追体験 である。「新川の落とし」については模型を復元作成し、古老からの聞き取り調査を徹底し、実際に木落が 行われていた昭和20年代の運用が再現される。聞き取りの機会としては最後に近かったのであろう。戦 前の合併前の旧町村役場跡の現地比定も、古地図と文献、聞き取りを組み合わせ足でかせいだ労作である。

第3章には、「上山郷給人目録」を基礎史料に、『長宗我部地検帳』(以下『地検帳』)や神社棟札も併用しながら、近世初期の上山紙の在地支配を村単位で明らかにし、経済基盤である山林の経営を担う山間領主層の存在を浮かび上がらせている。『地検帳』記載のホノギや住人の性格から、上山氏傘下の森野氏が、鍛冶、番匠、筏乗を管理して木材の切り出しと材木を四万十川河口部へ流す流通を掌握していた様子を巧みに復元している。

また、佐賀越の古道の民俗誌も記録されている。慶長 2 (1597) 年の『地検帳』には「宇津井川村」とある「打井川村」の調査。現在残る屋号は、『地検帳』記載の屋号とは一致しないとのことである。この山間の村にも「潮水」取りや、「塩の宿」「塩迎え」「さか迎え」という言葉があり、海・海岸との交流があった。「さか迎え」などは古語のように思われる。田辺湛増伝説、権現の休み石、「熊乃屋」、熊野浦 (地名)など、はるかな熊野信仰が定着していた地域でもあった。著者は峠道を介して山村―農村―海村―都市がつながる「海山経済圏」を想定し、過去の繁栄を見る。木炭も硝煙(煙硝)もその生産は明らかに都市との交易目的である。硝煙はどのようにして、どの程度生産ができたのだろうか。調査団には、熊野神社大祭で行われた潮汲みを再現する計画があるという。再現を通じて失われた歴史も復活再生することであろう。

なお前巻『土佐の地名を歩く』でも書かせていただいたが、地域資料叢書はわたしが九州大学に勤務していた時に、院生たちの研究成果発表の場所が必要であると考えて始めたものである。とりわけ現地調査の結果を報告するうえで必要ではあるが、印刷経費がかかりすぎるために掲載されにくい地図などが十分に収録できる報告書を考えた。その叢書が、わたしが九州大学を定年で去った後にも、大学 OB となった楠瀬さんらに受け継がれている。まことにありがたいことである。

くまもと歴史・文学館館長 服部 英雄

## 目次

巻頭言・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ $1$
序言・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
第1章 旅行記を歩く
武内文治「平成の土佐一覧記―与惣太が歩いた江戸期の土佐の山村と比較して」・・・・3
第2章 古地図を歩く
横山有弐「『弘岡井筋絵図』に見る春野の歴史景観」・・・・・・・・・・・56
清水謙次郎「高知市へ編入された戦前の17町村役場跡地の現地比定」・・・・・・68
第3章 山村・峠を歩く
目良裕昭「山の領主・土佐上山氏の支配領域とその構造」・・・・・・・・・82
楠瀬慶太「佐賀越の民俗誌―四万十町奥打井川〜黒潮町佐賀間の古道を歩く」・・・・92
編集後記・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・103
執筆者プロフィール・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・104

## 序言

古地図や旅行記、検地帳などの歴史史料には、多くの地名が現れます。この地名を通して歴史史料を空間的に捉え、史料に書かれた現地を歩くことで、その解釈は大きく広がります。本書『続土佐の地名を歩く』は、こうした地名を使った在野の歴史愛好者による地道な現地調査(フィールドワーク)の成果報告5本を掲載した研究論集です。

「第1章 旅行記を歩く」では、江戸中期の18世紀後半に高知県内を歩き旅行記を記した川村与惣太の足跡をたどる。「第2章 古地図を歩く」には、近世と近代の古地図を使った現地調査の成果2本を載せた。地図の読み込みや文献調査、聞き取り調査などを複合的に用いて、過去の史跡を現地比定した研究で、近世・近代の歴史景観を復原する方法論を提示している。「第3章 山村・峠を歩く」には、歴史民俗分野の論考2本を掲載。県西部の山村や海村の生業や歴史を、文献や古老へ聞き取り調査によって明らかにしている。高知県における現地調査による地域研究の方法論として参考にしていただきたい。

「奥四万十山の暮らし調査団」では、2018年3月に調査報告書『土佐の地名を歩く』を刊行。続く今回

の『続土佐の地名を歩く』は、地誌的な性格を持つ調査報告 書とは異なる実証的な調査報告と論文を収録し、研究論集 の形式を取った。同調査団では、今後も定期的に調査報告書 と研究論集の2本柱で、地域の歴史愛好者によるフィール ドワークの成果を随時公表していきたいと考えている。

地名の調査や研究、現地調査に関心のある方はホームペ ージ 『四万十町地名辞典』 (https://www.shimanto-chimei.com/) にアクセスください。



奥四万十山の暮らし調査団の現地調査風景 (四万十町打井川)

## 第1章 旅行記を歩く

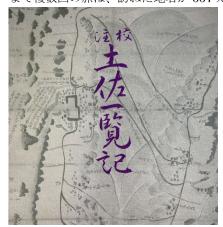
江戸期には五街道・脇街道など交通路が全国で整備され、平安・鎌倉期の熊野詣、室町期の伊勢参り、四国八十八カ所巡りなど中世に盛んになった参拝の旅に加えて、物見遊山の旅も行われ、数々の旅行記が記された。土佐における江戸中期の旅行記『土佐一覧記』は原本が不明な「幻の書」とされていたが、県内外に残る写本をもとに 1986 年に室戸市の郷土史家・山本武雄氏が『校注 土佐一覧記』を刊行し、存在が広く知られるようになった。本章では、『土佐一覧記』を史料に、旅行記を使った歴史踏査から、地域交通の歴史を現代との対比で紐解く方法論を提示する。

#### 「平成の土佐一覧記―与惣太が歩いた江戸期の土佐の山村と比較して」

武内 文治

#### 1、はじめに

『土佐一覧記(土佐道記)』 1は、東は甲浦より西は宿毛の松尾坂まで土佐一国をくまなく見聞し、江戸中期の土地の地名や故事とともに自らの歌を寄せた行脚の記録である。著者は安芸(室戸市元)の歌人・川村与惣太貞佳。彼は西寺(金剛頂寺)の別当職を52歳で辞し、明和9年(1772)から安永4年(1775)まで複数回の旅は、訪ねた地名が557カ所、詠んだ歌は569首となる。その多くは城跡、神社仏閣、滝な



ど当時の名所旧跡であるが、訪ねた日時や道順の記録は示しておらず推測の域をでない。また、詞書も簡潔で当時の暮らしをつぶさに記録しているわけではない。

与惣太は享保5年(1720)生まれであることから、もうすぐ生誕 300年となる。本稿では、与惣太の『土佐一覧記』を広く世に知らしめた山本武雄氏の著書『校注 土佐一覧記』<sup>2</sup>に掲載された557項の地名の中から七郡の一つである香美郡の名所旧跡や地名の道程をなぞりながら、土地に刻んだ地名をもとに300年の変遷を考察してみたい。

## 2、『土佐一覧記』に見る土佐国の景観 - 辺界の地への旅人-

『今昔物語』に「今は昔、仏の道を行ひける僧三人ともなひて、四国の辺地と云ふは伊予、讃岐、阿波、 土佐の海辺の廻りなり」とある。当時の辺地修行者は海や山を巡り各所の霊験所を参って厳しい修行の旅 を重ね、「日暮れにければ、人の家に借り宿りむ」と寺院(旦過・布施屋)や善根宿等の一定の援助を期待 していた。一方で仏教本来の教えとして「乞食の中にこそ、古も今も仏菩薩の化身は在す」と乞食修行を する高僧もいた。

この四国の旅人として西行、真稔、伊能忠敬、松浦武四郎などが旅の記録をとどめている。諸国をめぐる漂泊の旅とともに多くの和歌を残した西行(1118-1190)。中四国を旅したのは仁安3年(1168)で弘法大師の遺跡巡礼も兼ねていたといわれる。貞享4年(1687)に出版された『四國編禮道指南(しこくへんろみちしるべ)』は最古の遍路ガイドブックといわれるベストセラー、その作者が真稔である。伊能忠敬(1745-1818)はセカンドライフとして日本を歩き尽くして日本地図を完成させた。17年間で3万5千キ

ロ、4千万歩である。四国を調査したのが第六次測量(文化5年/1808)で、土佐藩はその年の4月19日(新暦5月14日/甲浦)から6月26日(新暦7月19日/宿毛・深浦)となっている。その愚直な旅人の生き方は松浦武四郎(1818-1888)に引き継がれているようだ。日本を歩いて記録した市井の巨人・松浦³は19歳(1836)のとき四国を巡礼している。その記録は『四国遍路道中雑記』4としてまとめられているが、知りたい思いが旅となり全てを野帳にメモして膨大な著作となった。彼もまた『四国徧禮道指南』を携えて旅したことであろう。今年(2018)は伊能忠敬の没後200年、松浦武四郎の生誕200年となる。

旅は日常と非日常の境界にある。巡礼は「聖地」への一時回帰であり、時に日常から解き放された快楽性もともなうこととなる。この聖地巡礼は「定着」から自由となる免罪符でもあり、とりわけ大切な「修行」の一つにもなる。メッカ巡礼、スペインのサンティアゴ・デ・コンポステラ、伊勢参り、チベットのラサへむかう五体投地など多様な巡礼が世界各地にある。世界の巡礼はそれを可能とする宿泊・道路・治安など周辺の社会資本の充実が図られ、巡礼者が文化や情報の伝道師の役割を担うことになる。高知県四万十町の香り米の品種に「遍路選り(ヘンドヨリ)」がある。遍路道でいい匂いの米をひとつかみ、それが九州各地、中国地方にも広まったという5。この四国遍路は今でこそ納経所へのスタンプラリー化したところもあるが、昔は歩く巡礼(ヘンロ)であった。

これら辺地巡礼行為である「ヘンロ」の意味をあらわす表記には辺地、辺路、編禮があり高知県などではヘンド(辺土)とも呼ばれる。世界遺産「熊野参詣道」に小辺路(高野山〜熊野三山)、中辺路(田辺〜熊野三山)、大辺路(田辺〜串本〜熊野三山)がある。「辺」は物のはし、この世とあの世の境を意味し、「地・路」はその極楽浄土に見立てた苦難と悦楽の修行の場であり、「辺地・辺土」は巡礼の道に修験の重みをおいた言葉であろう。真稔はあえて「徧禮」の字をあてているが「徧禮」の意図について稲田道彦は『全訳注四國徧禮道指南』で「"徧"は広くゆきわたるとか、あまねくという意味で、遍と同じ意味である。"禮"は、たんなる道ではなく、人として生きる道という意味を含んでいる。路が人の通行する道を示すのに対して、禮の字を使ったとい



江戸時代の四国へんろの旅の様子 (『四国徧礼道指南増補大成』より)

うことは "へんろ" という行為に人の道を求める修行者という意味を込めたかったのであろう」と述べている。『土佐一覧記』の文脈から与惣太の旅の姿を復原してみたい。

#### 3、土佐一覧記の不思議

## (1) 寺院と神社 -僧侶の与惣太が神社を巡るのはどうしてか-

川村与惣太は土佐の辺地紀行をどのような意味合いで行ったのか。西寺(金剛頂寺)の別当職を辞して土佐一国を旅したのが52歳。理由は記されていないが隠居の身として土佐一国を吟遊したいというのが本来の願いと考える。僧籍の身である与惣太が、土佐国の札所16のうち記録に残しているのは室戸崎(最御崎寺/24番)、三角山(金剛頂寺/26番)、惣社(国分寺/30番)、五台山(竹林寺/31番)、峰寺(禅師峰寺/32番)、天甫寺(雪渓寺/33番)、清滝寺(清瀧寺/35番)、竜御山(青竜寺/36番)、仁井田五社(岩本寺/37番)、蹉跎山(金剛福寺/38番)の10カ寺である。西寺の両隣の津照寺も神峯寺も詳しい記述はない。津照寺は

『今昔物語』に「津寺(津照寺)」と語られる古刹である。室戸三山でも興隆を誇ったと京都・東寺の百合 文書の『土佐国室生戸金剛頂寺別当三綱等解案』に書かれている。金剛頂寺の別当としていわずもがなと いうことか。

土佐 10 カ寺であるのに比べ、神社は 43 社も記述されている。神仏習合の時代背景はあるにしても当時の四国巡礼の信仰・習俗の背景はどうであったか。

真稔が当時の巡礼の作法である紙札の奉納について「其札所本尊大師 太神宮 鎮守惣して日本大小神 祇 天子 将軍 ・・」と『四國徧禮道指南』で示している。札所の本尊、弘法大師の次に伊勢神宮、その 次に鎮守の神様や数々の神様との記載順である。また宿に納めるもの、接待を受けたものにお渡しする納め札も準備しなさいとある。また、真稔が定めた 88 カ所の札所に神仏習合の寺社や修験道の札所が、12 カ 所あると稲田道彦は『全訳注四國徧禮道指南』で示している。

『四国編礼霊場記』では、与惣太が別当を務めた金剛頂寺について「本堂の右に建つ社は若一王子で当山の地主神、左は十八所宮でこれは王城の上社十八神を勧請したもの。山上には清泉があり、それに合わせて弁才天の祠がある(現代語訳)」と記され、堂宇の俯瞰図である「西寺図(右絵図。ゴシック字は筆者加筆)」にも鎮守十八所、若一、弁才天と記してある。一ノ宮百々山神宮寺について「この宮は高加茂大明





神。神宮寺の本尊は阿弥陀如来」と述べ、その「一宮図(俯瞰図)」は本社を中央に記して境内外のはずれ に神宮寺や長福寺が記されている。また仁井田五社について「当社は国の大守によって建立。前に大河が あって仁井田川と呼ぶ。当社の別当は岩本寺という。社から十町余り離れた久保川の町にその寺がある」 (現代語訳)」と記され、「五社図」には五つの鳥居と本殿が並びその前に仁井田川と書いてある。

『土佐一覧記』には『延喜式』神名帳の編さん当時(927年)の郡域によれば、安芸郡が式内 3座 6を含む 6 社、香美郡が式内 4座 7を含む 10 社、長岡郡が式内 5座 8を含む 7 社、土佐郡が式内 5座 9を含む 9 社、吾川郡が式内 1座 10を含む 2 社、高岡郡が 6 社、幡多郡が式内 3座 11の 3 社である。香美郡は土佐の奥山である物部・槙山の小松神社を含む式内社は全て記録している。

与惣太の土佐行脚の約 100 年前を記録した『四國徧禮道指南』にある神社の記述は「かんの浦(略)町中にやしろ有(熊野神社)かた原町みなとよし」「白はま町 明神の社(五社神社)ゆきて川」「のねうら入口宮立入(野根八幡)」「入木村八まんの宮(佐喜浜八幡宮)」「東寺迄卅町餘の中に見所おほし(中略。"大あな"御厨人窟の説明中)大守石をうがち五社建立あり(五所神社) 東に太神宮御社有(神明宮)」「たの浦よき町なり 此間八幡宮(田野八幡宮)大師堂寺も有過安田川」「やわた村 此間小坂 山上に八まん宮(豊岡別宮八幡宮)」「一宮(土佐神社/30番札所善楽寺)」「あぞうの村国の守の氏神有(掛川神社)」「鳴無大明神(鳴無神社)とて国守造営の宮朱門彩瓦景もよし」「五社(37番札所) 別当岩本寺くぼ川町に居す」「くぼつ宮有(一王子宮)」の12社がある。幡多郡の式内社3座である賀茂神社・伊豆田神社・高知坐神社はヘンロ道沿いであるにもかかわらず真稔はその案内をしていない。

空海が 42 歳の厄年 (815) に現在の四国霊場ハ十八カ所を開創したというのは史実ではない。空海入定

後に弘法大師信仰が高まり、空海誕生地(讃岐)、四国で修行し悟りを開いた(室戸岬)といったことから信仰の中で「四国」が注目された。加えて「四国辺地」を修行する聖(ひじり)、修験の山伏など複層的な要素が数百年の歴史の中で四国遍路の祖型がつくられたという。「文明3年(1471)の高知県本川村越裏門地蔵堂の鰐口銘には、"村所八十八ケ所"と刻まれている。これが四国八十八カ所のミニチュアならば、八十八カ所という霊場群の起源は、15世紀にまでさかのぼることができる(『日経マスターズ』2005年4月号「江戸時代に大衆化した四国八十八カ所巡り」)とあることから、88という札所の数は一般化していったものの札所の位置が特定されていたわけではないようだ。今でも本家元祖の争いはある。

1000 年以上続いた神仏習合の歴史が日本人の宗教観の寛容さを育むとともに、陰陽師や山伏修験道、物部槙山のいざなぎ流民間信仰など多彩な宗教観を生むことになった。『長宗我部地検帳』(『地検帳』)の野市町の立山神社、赤岡町須留田周辺にホノギ、職名、居住関係を探せば「算所やしき 算所神兵衛給 主ゐやしき」など算所の名前が 5 人ほど出てくるし「二ノミコ佾給」など佾 12 (巫女の別称) も 2 人の給地がある。「山崎やしき」は土佐国博士頭として土佐国中の算所の取り締まりをおこなった芦田主馬太夫の屋敷地である。文化 12 年 (1815) 物部・槙山郷にはその系統といえるいざなぎ流の陰陽師・神子が 49 軒あったと『柀山風土記』 13 は記している。

その 1000 年以上の神仏習合の歴史も明治新政府の布告(神仏分離令他)により大きく変化することとなった。



高知歴史民俗資料館・展示解説図録

#### (2) 旅文化 - 与惣太はどこで泊ったか-

今風の旅は、宿と食が楽しみである。この『土佐一覧記』には食の記述がない。

「タビといふ日本語は或はタマワルと語源が一つで、人の給與をあてにしてあるく点が、物乞いなどと一つであったのではないか」と柳田国男 <sup>14</sup>は述べている。真稔も「頭陀」と自称し修行としての物乞い巡礼を数十回行っている。お遍路さんが肩にかける布製の袋で同行二人の文字が刻まれているのが頭陀袋である。頭陀は捨てる・落とすを意味する梵語で、衣食住に関する欲望を払い、修行する意味を持つ。

『土佐一覧記』の和歌には多くの詞書があり作歌の書きとめているが、そのなかに宿の事情が多く記されている。遠城寺(芸西村和食/p104) $^{15}$ では「和食郷遠城寺に冬の夜宿りける」、蚊居田(南国市里改田/p160)では「観音に宿りし時窓前雪と云う題を探りて」とあり、寺院の援助がうかがえる。窪川(四万十町窪川/p293)では「此所の市中にある人隠居し侍るを尋ねて」、芳奈(宿毛市山奈町芳奈/p327)では「此里なるある人のもとに宿り別れに望みて」とあるように知人縁者に宿を求めたようでもある。木塚(高知市春野町西分/p242)では「此里にて宿を乞ひける時夕雀の群あるを見て」とあるように民家の軒先を所望しつつ、多くは野宿であったようだ。和歌の中に「磯枕ねざめ寒けき」「露の契りのかり枕」「今宵なほ枕に霞む月も見ん」「うち山陰のあまの苫やに」とあるが苫屋や草枕で「よなよなの露の宿り」となったことだろう。

小松村(四万十町東川角/p291)で詠まれた和歌に「ふせ屋」とある。古代からの官道には駅家を付設し

官用交通を支えたものの辺地の庶民の行旅への宿の成立には至っていない。調・庸の運搬夫や旅行者の一時救護所的に仏教寺院を中心に設けられた簡易宿泊所が「布施屋」である。布施屋の設置記録はないが善根宿として提供してくれた感謝をこめて与惣太が「ふせ屋」と詠んだのではないか。中世の鎌倉中期ごろから、禅宗寺院を中心に各地に接待所が現れ、土佐・五台山の接待庵など7カ所におよぶとある 16。江戸期に入り定着政策の下で唯一往来が許されたのが富士講や伊勢講など信仰を目的とした行旅である。江戸後期の文政のおかげ参りの頃、日本の人口が3千万人といわれた当時に、1年間で500万人のお伊勢参りがあったという。松浦武四郎の『四国遍路道中雑記』にも「門前に茶店並びに商戸有。止宿するに、よろし」とあることから江戸期後半ともなると門前の商家が形成され有料の宿も設けられたといえる。

『土佐一覧記』には草枕、旅寝、磯枕など野宿の歌が 14 首ある。与惣太にとって「頭陀の行脚」として野宿を主としたものだろう。四国遍路が大衆化された江戸初期に一番問題となったのが宿泊の問題で、有料宿の形成は未発達で寺院や個人の家(善根宿)に期待するしかなかった。特に「土佐は鬼国宿がない」と俚謡にあるように深刻だったようだ。真稔の『四國徧禮道指南』にも善根宿の紹介がされているのも宿事情がうかがえる。いまでこそ「お接待の四国遍路」とキャッチコピーされているものの善意で宿を施行するのは敷居が高いと思える。

服部英雄氏は『地名のたのしみ』「7で四国遍路道沿いに多い「旦過(たんが)」地名について述べている。 旦過は仏教用語で修行僧が一夜の宿泊をすること、またその宿泊所を意味する。氏は旦過の共通性として 「①港・渡し場など交通の要衝にある。②著名な禅僧と結びつく。③温泉又は温泉の跡がある」を指摘し ている。大豊町川口に「ヘンロユハヤ」の字がある。現地確認したわけではないが漢字を当てれば遍路湯 場屋である。また高知県内で「タンガ」関連の字を調べたら、タンガン(香美市土佐山田町植)、丹官(南 国市世枝)、壇願(梼原町梼原)、タンクワン(宿毛市小筑紫町田ノ浦)があり、古文書では『手結浦日抄』 に「往古旦過寺有シ号ナリ」と香美郡夜須郷に旦過寺があったと書いてある。風呂地名については中世の

山城と風呂地名の関連を述べた筒井功氏の『風呂と日本人』18 を服部氏の『地名のたのしみ』とともに読んでいただければ風呂が宗教的な作法のように思える。沐浴、潮垢離など清めの儀式は産湯(俗界)から湯灌(法界)まで人生の所作であることがわかる。旦過寺は宿泊と温泉とおくりびとの三点セットかもしれない。「風呂の谷」は高知県下各地に分布するので旦過地名の関連を含め今後の調査を待ちたい。

与惣太の歌碑は県内に5カ所 <sup>19</sup>あるが、その一つが四万十町 江師にある。この地の対岸が小石であるが、ふるさとへの"恋 し"思いをかけて旅寝の寂しさを詠んだのだろう。



## 胡井志(四万十町小石/p 368)

「今宵しも夢にも見つる故郷を こひしの里に草枕して」

## (3) 土佐の山々 - 与惣太は土佐で最初の登山家か-

日本の歴史は山と太陽から始まるといわれる。縄文以前から人々が畏敬して大きな力を感じる存在とし

て山があり、多くの実りをもたらしてきた。ときに信仰の対象として神々の森となり、ときに狩猟など往 来にはラウンドマークともなり、山の名前を付してきた。

山の名称について松尾俊郎は「山の名称は、地名のうちでも、いろいろな地名学分野においてたいへん 重要な意義をもっている。山に因むさまざまな名称は、人間生活の広い領域にわたってかかわりあいをも つからである。山谷からきた名や祀られた神仏の名からきたもの、そこの地域名との関連、水源地として の役割、境界的性格を示すもの、また山そのものをさす名称の多様性、山名の分布から見た地域的差異、 交通路に関するもの、動植物の関係、気象現象とのかかわり、あるいは語源的に外来語との関係を考える 上にも、山名は特異の対象ともなり、その地名的性格は複雑である」と述べる(『地名の探求』<sup>20</sup>)。

『土佐一覧記』には 40 座を超える山の名が記されている。 寺院の山号である場合や奥山の郷全体を総称して○○山と呼ぶ例もあるが峠を含め与惣太の行脚の軌跡として注目することができる。詞書には結構詳しく山の記述もがあり、土佐と伊予との国境の奥山にも訪れている。

野根山街道(右の写真)の記述も詳しい。奈良時代に整備された官道の一つで、東洋町野根から北川村と室戸市の境となる稜線を尾根伝いに奈半利町まで結ぶ延長30kmをこえる山



街道である。参勤交代の道としての記録をとどめる地名や遺構とともに松の美林、杉の大木など山の暮ら しもうかがえる。与惣太も野根山街道を歩き押野川(東洋町野根)・野根山・千本杉・岩佐の関・岩佐水・ 一里深山・装束が峰・米が岡・奈半泊と書きとめ土御門院の遷幸談も載せている。

当時の旅行は四国巡礼が主で海岸沿いの道である。与惣太はこの野根山街道を歩くことで土佐の奥山を 行脚する決意となったのではないか。馬路や物部の奥山、物部の槙山・上韮生、嶺北の深山峰々、四万十川 の源流域から河口まで、土佐山間の頭陀の修行でもある。

嶺北地域では、下川峰が登岐山(ときやま/別称天狗山/1446m)か大己屋山(おーごややま/1262m)か 比定できないが「此山には弥生過卯月の頃まで雪消ずありける。本山下川村の奥なり。此山里には氷室の 跡などあり」と記述されている。『土佐一覧記』には下川峰付近の汗見・売生野・桑川(本山町)も掲載さ れていることから汗見川の上流域の桑ノ川から望んだものであろう。

#### 下川峰(土佐町下川/p178)

## 「春きても霞ながらへ消えのこる 雪こそ見ゆれ下川の峰」

大川村の鬼城山と稲村山にも登っている。鬼城山(西門山/1496m/p216)の詞書は詳しく「山中芍薬多し。鷹を取所なり。山の形四方切立ちたるごとくにて、実も巌もて築たる城なり。峻しき事いふ斗りなし。 人馬とも通ふべき山にしもあらず。されど葛をかけて滝をつたい梯をもふけて谷を渡り(中略)西北の隅に追手の門とおぼしき切通しあり。里人鬼すみたりと言ひ伝へしもさこそと思ひやられ侍る」とある。稲村山(稲叢山/1506m/p217)には「此山鬼城山の峰つづきなり。頂に池あり(中略)南戸中の方より登る入口ありて門のごとし」とあり書き方は登山ガイドブックのようである。

#### 鬼城山(大川村上小南川/p 216)

「岩たたむ山の奥さへ浮世ぞと 住鬼すらもわびて出でけん」

また、土佐の名峰「手箱山(1806m/p218)」「矢筈山(筒上山/1860m/p218)」や「野根山(983m/p 32)」「烏帽子森(1320m/p99)」「白髪山(本山町/1469m/p221)」「別府山(横倉山/774m/p268)」「鳥形 山 (1459m/p 288)」「矢立森(西峰山/719m/p 366」「笹山(篠山/1065m/p 368)」も紹介している。筒上 山については「此峰は安居の山の頂なり(中略)路もなき笹原をよぢ登り夜の明わたるころ、四方を眺れ ば言の葉にたえたり。備前路九州なども見へわたり侍る。されども日出にいたれば山上雲おふいていづち とも見へわかたず」と深田久弥の日本百名山に似た筆致である。

与惣太が白髪山から下川峰、鬼城山、稲村山、手箱山、筒上 山は土佐の山間を往来する往還沿いである。今でこそ登山ブー ムではあるが、当時、奥山は御留山で入山禁止でもあり、神々 の住む森として畏敬の念から近寄らなかったであろう。それで は、与惣太は何故筒上山に登ったのか。詞書にはないが「山に 伏す」修行(右の写真は吉野・大峰山の入峰修行)と考えたい。



あるようだ。「鬼が城山」のオニは奇岩突兀の地形で鬼面の近寄りがたいイメージをもち、稲村山は稲や萱 を積み上げたイナムラの丸みの形をイメージする。「鷹を取るところ」と与惣太は書いているが鷹ノ巣山・ 高取山・鷹取山、日航機墜落事故の御巣鷹山も同系で各地に分布する。鷹狩りの狩場にあてられた山々と 『民俗地名語彙辞典』は書いているが、それ以前の太古の時代には矢羽根にする鷹の羽が重要な交易品で あったというから縄文人も使った山名かもしれない。

#### (4)土佐の道筋 -与惣太はどの道を歩いたか-

『南路志』21には道程の「大道筋」について「岸本より高智(高知)迄五里(20 k m) 此内川六」とし て「赤岡川(香宗川)、物部川(野市町深渕)、金丸川(舟入川)、布師田橋(国分川)、比嶋橋(久万川)」 の6河川(橋)を示している。金丸川は現在の『高知県河川調書』には見当たらないが南国市大埇の字に 「古金丸」があり、『土佐州郡志』には大埇郷の山川として「古金丸川 出山田、至片山村」とある。野中 兼山の開拓以前が古金丸川(下田川)で舟入川開削後は"新"金丸川(舟入川)となったものと推定した。

また、「山道・小道」として「小籠(こごめ)より槙山之内別府拾四里 此内川六」として「山田渡(土 佐山田町神母ノ木)、韮生川(西川川)、大土地(大栃の葛橋)、一宇渡(市宇・宮ノ瀬)、枝川渡(別府・ハ ヤバシリ)、別府渡(別府・落合)」、「小籠より中谷川迄牛馬通ル、中谷川より別府迄牛馬不通、難所也」と ある。山田から物部川左岸(神母ノ木)に渡り、明戸峠を越えて韮生野の西川川を渡り大栃の葛橋を渡っ て大栃から根木屋、岡ノ内、別役と物部川右岸の中腹を歩き、いったん市宇の宮ノ瀬へ左岸に渡り、別府 字ハヤバシリ付近で右岸に渡り柿ノホテの中腹を抜け、再び左岸の落合に渡り別府の中心となる奈路・土 居へと至る、こう推理してみた。

また、赤岡から槙山に向けての「山道」について「赤岡より槙山之内中谷川迄五里」とある。香北と物部 の境となる物部町中谷川とすれば丁度 20km (5里)となる。また上韮生については「小籠より韮生之内 窪村迄拾壱里山道」とあり「小籠より窪村まで牛馬通ル、夫より不通」とある。小籠より窪村(物部町久保 堂ノ岡)の道は山田から新改川を遡上し大平へ越して物部川右岸を遡上し猪野々から物部の楮佐古へ越え

神池、黒代、笹へと中腹の山道を進みいったん上韮生川左岸の五王堂へ渡り、再び右岸の久保高井へ渡って上久保・堂ノ岡へと至る、と物部川右岸ルートを推理する。

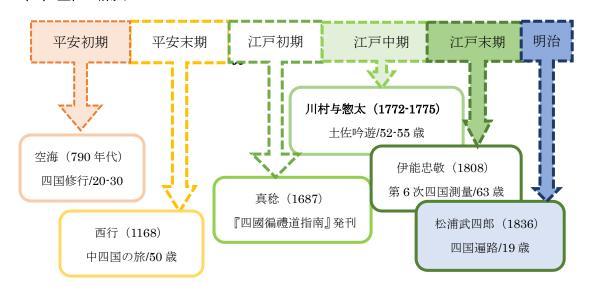
「従高智東西大道筋人馬賃銀定」の項では「従江ノ口布師田迄一里 従布師田中嶋迄一里 従中嶋物部 迄二里 従物部岸本迄一里但物部川有之ニ付弐割増 従岸本和食迄二里但手結山有之ニ付四割増・・」と ある。「一里塚」の設置場所について「野市村馬袋中須取合にあり」「岸本村松原にあり 但野市村一里塚 より此所迄長千七百八十弐間半 (3.2 k m) 有」「手結山郡境にあり」とある。また明治の元標が郷村の中心 地に設えてあると記録に残る。概ね与惣太の歩いた街道の道筋と同じと言えよう。大正昭和にかけて石製 に改められたものが各地に残る。

香美郡の物部への道は赤岡から香宗川を上り稜線に沿って大忍庄槙山へ向かう「塩の道」<sup>22</sup>ルート、野市から佐古を通り明戸峠から韮生郷へ向かう「物部川左岸」ルート、山田郷から新改川を上り佐岡に越え韮生郷に向かう「物部川右岸」ルートの三本ルートにより探訪地を組み合わせたと考える。京から土佐の国府に向かう道を「南海道」<sup>23</sup>といい、当初、阿波、讃岐、伊予を経て土佐に通ずる道が開設(幡多廻り海路)され、その後、阿波から直接土佐に入る道(養老 2 年/718)が開かれ、その後伊予から土佐に入る新道(延暦 15 年/796)が開かれた。

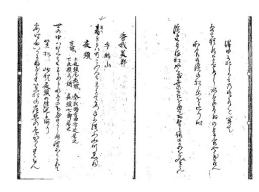
それでは、阿波から土佐に入る道はどこか。武内亮氏の『はぐれ馬借』<sup>24</sup>を読んで感じるのだが、馬借や木地師や山伏らは、官道と違う別のルート(民が必要な道)を開いていったのではないか。個人的には地形(阿賀野川と物部川ライン。いわゆる地球の皺)の容易さ、沿道の建造物(小松神社・大日寺・神通寺・大川上美良布神社・天忍穂別神社・深渕神社)の歴史的位置づけなど香美を歩いて実感するのがこの生業の道である。

与惣太は、赴くままに吟遊していたのだろうか。行脚の事前準備として『土州名勝記』<sup>25</sup>を読み、訪問地の傾向、記録の手法など参考にしたのではないかと思われる。

#### (5) 土佐の旅人



## 4、香我美のみちしるべ



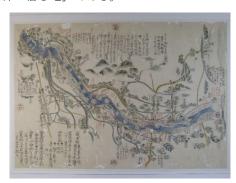
与惣太が土佐国内を訪ね『土佐一覧記』に記録した地名は 557 カ所。紙面の都合上、今回は香美郡の 57 カ所を紹介することにする(左の写真は写本・香美郡の段)。

香美郡は高知工科大学が所在する地であり、同大学がフィールドサイエンスとして香美市土佐山田町佐岡地区の里山再生プロジェクトを展開するなど地域連携の進んだところである。2016年12月システム工学群・高木方隆教授の協力を得て多業種間での地理空間情報を利活用する

「高知歴史環境GIS研究会」(事務局長楠瀬慶太) <sup>26</sup>を設立。博物館学芸員、埋蔵文化財研究員、行政コンサル会社専門員、システム開発エンジニア、公務員など多様な職種による集合知の有用性を高めた佐岡地区のフィールドワークに参加している。その縁での「香美郡」である。与惣太も香美郡内の多くの神社を訪ね、古城を紹介している。あれから 300 年の歴史が刻まれた「今」の香美郡の遍路道を歩き、塩の道を歩き、野中兼山の遺構を歩くことにした。香美郡は「神の宿る地」である。



土佐国絵図並地高書付 (安芸市立歴史民俗資料館所蔵)



寬政元年(1789)「物部川絵図」 (安芸市立歴史民俗資料館所蔵)

## (1) 香南市夜須町

与惣太が香美郡で最初に詠んだのが「手結山」である。ここは安芸郡との境界でもあり住吉の番所から手結越えをめざしたことだろう。手結で詠んだのは夏(暑き日)、次の夜須・笠松で詠んだのは秋(露時雨)であるから幾度となくこの街道を往来したことが伺える。

旧夜須町は、夜須庄と大忍庄(おおさとのしょう) の夜須川流域から成り立つ。夜須庄は有名な石清水八 幡宮寺(宝塔院領)の荘園であった。『土佐一覧記』に は夜須川上流域や羽尾、長谷寺の記述はない。ただ、 安芸の畑山や尾川を訪ねていることから大忍の往還も 一度は歩いたかもしれない。大忍は土佐の代表的な荘



園で香我美の海岸部から物部・槙山の阿波国境までの「大きな里」<sup>27</sup>である。ただし、古来より二つの庄の境は厳格であり、明治以降の配置分合にも喉に刺さった骨のような関係は続いた。

#### • **手結山**(香南市夜須町手結山/33. 525556, 133. 764532)

山内一豊が甲浦から浦戸城へと入国した土佐第一の大道。東西に長く平坦地が海岸線沿いしかない土佐にとって経済上も軍事上も重要な幹線道であり、手結山には藩主参勤交代の休息所が設けられた。大道幅三間(約 6m)は馬車牛荷の往来のため勾配はそれなりに緩く路面には伏石が設えていたという。茶屋があれば団子か饅頭であるが、ここ手結には有名な「手結の餅(右の写真)」がある。ニッキの風味が



懐かしくつい引き寄せられる。創業は天保8年(1837)と歴史があり参勤交代のお殿様も佐賀の乱で捕縛された江藤新平も逃避行の途中に食したという高知の名物である。ここを汗かき上った与惣太であるが、当時は手結の餅もなくダイハツのCMで有名になった手結港の可動橋も眼下には見えない。

手結の地名由来について徳弘勝氏は「出っぱっている所"出居"を清音で呼んだものらしい」と述べている。確かに夜須の東側、芸西村境となるシイ山山系のすそ野が太平洋に突き出る地形となっている。いっぽう、桂井和雄氏は「イイとかテマガエなどのことばでいう労働交換を意味するもの。古い昔この浜で行われた地引網などの漁労に、たがいに労働を交換しあった、いわゆるイイの歴史を物語るもの」<sup>28</sup>と紹介している。田作業での労働交換からきた田結が転訛した地名が土佐町田井である。徳弘氏は「労働交換のユイ説など考えすぎ」としている。

#### 手結山(手結村/p 109)

#### 「暑き日は行かふ人も立寄りて 先手に結ぶ山川の水」

高知城下から東へ向かう道は、五台山の南に流れる下田川沿いの「下田道」、海岸に沿う「浜街道」、「ヘンロ道」とあるが赤岡を越えて手結山越えにさしかかると道は一本となる。高知県東部の数少ない難所道である。今は国道55号と高知東部自動車道の開通により静かな脇道となっている。

汗をかきつつ登る手結山越え。大峰山からの霊水を「手で結ぶ」盃で一気に飲む。夜須小学校の校歌にも「大峰山の上高く 日はさわやかにさし昇る」と歌われる大峰山を源とする手結の水。吉野の大峰山に「お助け水」がある。土佐山田町影山にも大峰山(223.5m)がある。これら大峰山は、日本古来の山岳信仰の対象であり山伏の修験の山である。

手結山から香美郡に入る。この大峰山や高坂山、石立山などの「修験の山」、大川上美良布神社などの「式内社四座」、物部槙山には民間信仰「いざなぎ流」がある。在家の太夫が脈々と伝承するいざなぎ流は、陰陽道、修験道、仏教、神道などが混淆した極めて古い要素を含むもので、山の暮らしの独特の文化を体現している。香美を歩けば祈りの村であることを実感する。

## 笠松(香南市夜須町坪井/33.535531,133.754414)

与惣太は「此松は夜須村にあり」と書き和歌一つを詠んでいる。山内豊房公は笠松を「来て見れば旅のつかれも忘られて しばし心はやすの笠松」と詠むほど立派な偃蓋松であったという。土佐の博物誌であ

る『土陽淵岳誌』(1746) には宝永 4年 (1707) 10月 4日に発生した宝永地震の津波で流失とある。津波は「ほとなく海より弐拾余町 (3km) 浪入り来る (大地震の大変)」とあるから上夜須の備後 (夜須川河口から上流 3km) まで到達したことになる。宝永地震の惨禍を記録した『谷陵記』には「下夜須半ば亡所、横浜・知切の家は悉く流る。潮は大宮 (西山八幡宮)の庭まで、此の浜の笠松流る。屈枝蟠根無双の名木也」とある。

#### 笠松(夜須村横浜新町/p 110)

#### 「露時雨いかに降るとも笠松の 常盤の色は変らざらん」

有名な笠松もいまはお目にかかれないが、跡に植えられた幼松も露がかかり常盤の緑となっているから、いつかは常世の笠松となるだろう (勝手読)。与惣太が露の降りた笠松を訪ねたのが明和9年 (1772) 頃であることから、有名な笠松はない。偲んで詠ったことだろう。二世三世を探したが見つからなかった。

## ·七板橋(香南市夜須町坪井/33.537710,133.756099)

与惣太は七板橋の詞書に「三河の国なる八橋をおもひいたりて」と書き、『土佐國白湾往来』<sup>29</sup>も『土佐一覧記』の七板橋の段を引用している。川を渡るとき流され亡くなった二人の子ども。母親は悲しみ出家して師孝尼(しこうに)となり、再び命を落とすことがないよう八カ所の板橋を架けたという、愛知県三河(逢妻川)の昔ばなしである。増水時に流失しないよう岸側の板端をロープで結ぶ設えの板橋は、昭和初期まで利用された。大栃の葛橋もそうだが人身御供は古来より続き、今日では大事故・天変地異がその役割を担っている。

『夜須町史』には「子持楠神」の昔ばなしとして「藩主命令で、宝田のお宮の楠を伐ったとき倒れた楠の枝先が七板橋(現役場庁舎の北にある)まで届いた」とあるので確かに江戸期にはあった橋である。七板橋の所在を「夜須町役場前の県道に架かる橋であろう」と『校注土佐一覧記』は解説する。訪ねてみれば確かに香南市夜須庁舎支所前にある川幅3m程度の小川には橋名板もないコンクリート橋が架かっている。地元の数人に聞いたものの誰も知らない忘れられた橋である。

## 七板橋 (夜須村/p 111)

#### 「爰はまたくもでにたらで行く水の 名に流れたる七板のはし」



ヤシ-パークのトワイライト

## (2) 香南市香我美町



旧香我美町の地形は、北東(旧物部村境)の山地から南西の低地(太平洋側)にむけ二つの山系の造山運動と別役一羽尾付近の隆起の軸により分水界となり、北東に向け逆川となる舞川と南西に流れる香宗川の両水系に広がる細長い町域である。

旧香我美町は、昭和30年(1955) 4月1日、岸本町・徳王子村・山北村・東川村の一部・西川村の一部が合併して発足。ただその前に昭和16年に徳王子村・山南村・富家村・香宗村

の4カ村(山北村は断念)が合併し「大忍村」が誕生したものの山南地区から分村運動がおこり「川村知事も大衆運動の意向をいれ分村を認可した。昭和23年(1948)4月1日であった」と『香我美町史』は記している。その後の香南地域の合併に影響を与えることとなった。

この町名の「香我美」は、平安時代の和名類聚抄に『香美』のふりがなで「加々美」と書かれていた古名によるものか。元は『鏡』であったのを「郡郷の名は佳名二字に」とのお触れで『香美(かがみ)』となったもの。平安時代は香美郡(かがみのごうり)と使っていたが鎌倉時代や江戸時代には香我美郡も多く使われた。また、中世まで物部川は鏡川と呼ばれていたが山内5代目藩主・山内豊房が鏡川と名づけたため鏡川は物部川と、須崎の鏡川は新荘川に改められたという。いずれにしても鏡は神聖なものであり、美しい田園風景や物部川の煌めきを美称として命名したものであろうと香美史談会の会報に書いてある。

現在の公称地名となる微細地名は、明治9年の地租改正でこれまでの「ホノギ」を廃して新たに集約して代表的なホノギを「字」としたのが一般的であった。この一般的な命名法と違ったのが徳王子の字である <sup>30</sup>。この土地台帳作成時に徳王子村では『源氏物語』の全 52 帖のうち「桐壺」「空蝉」「澪標」「夕霧」など 32 帖を字名称とした <sup>31</sup>。また岸本の字も特徴があり「イノ丸」「ロノ丸」「ハノ丸」と「スノ丸」まで続き「油子ノ丸」「丑ノ丸」と「柳北酉ノ丸」までと、いろは 48 文字と十二支のうち戌と亥を除く 10 文字

を使った命名である。

どれも面白い地名の命名ではあるが、消えた地名は刻まれた過去を語ることがなく、その罪は重い。

## · 月見山(香南市香我美町岸本/33.540630,133.745477)

承久の乱 (1221) で土佐に配流となった土御門上皇が月見山で名月を眺め「鏡野やたが偽りの名のみして恋ふる都の影もうつらず」と香美の里を鏡野と詠んだとされるが記録があるわけではない。

土御門上皇の詠んだ「鏡野」はどこをさすのか、この点について河野通信氏は『土佐史談』通巻 124 号 (p69)で関連のある史実と地名をもとに「六百町歩に及ぶ未開の野市台地」と推定している。月見山から西側の香長平野を見渡すと北西以北は三宝山系で土佐山田方面は遮られるが、当時の開発状況はどうであったか。

古代の条里制について「物部川以西を中心にした高知県最大 の香長条理と、野市台地の非条理地域を挟んで、その東方の香 宗・山北・山南・徳王子・兎田にわたる香美郡東部の条理に連



なる」と『南国市史』はその規模と位置を示している。条里制にかかる地名に「坪」がある。香我美町徳王子の「中ノ坪」「井ノ坪」、赤岡町の「一ノ坪」、野市町深渕の「大坪」、野市町富家の「市ノ坪」「富家坪」「中ノ坪」「井/坪」、吉川町古川の「中ノ坪」などに「〇〇坪」の地名がみられる。条里は6町(654.54m)四方の「里(こざと)」を大区分として、横列を「条」、縦列を「里(り)」とし、〇条 $\triangle$ 里と表す。縦列の里を1町四方に六等分した区画を設けたのが「坪」であり、1坪=10 反=1町歩=1 ha で、ほぼ今の単位となる。この坪地名の分布から逆に読み解けば、野市の東野・西野・下井が未開の地であったことがうかがえる。土御門上皇はここを鏡野と見立てたのではないか。

鏡野の「野」はなにを意味するのか。裾野とすれば山麓の緩傾斜地であるが、ムラの生活空間と奥山との緩衝地帯が「野」で、あの世に旅立つ野辺送りはまさに境界である。『民俗地名語彙辞典』はノの項で「地(土地、大地)のことは二ともナともいい、相当面積の広い地面をヌといい、ノという。これはナの変体。椎名・浜名・山名など土すなわち場所をいうナと解する。ハラ(原)はヒロ・ヒラという地形的要素より、ハル(開墾)に関係するのか。和名抄では野の付く地名9に対して原は1つだ(抄略)」と解説している。

#### 月見山(大忍庄岸本村・夜須村/p 112)

「影うつす波は麓の海かけて 月見の山の名こそしるける」

## 「月見山麓をかけて白波の 花も霞めるかげの長閑さ」

与惣太は、波音とともに月明かりの波が岸浦に打ち寄せると海側に視点をおき、土御門上皇は恋しい都もこの鏡野には映らないと視点は山側にありつつ心は都に向いている。

月見山系が太平洋の間際まで突き出した縁にあたる月見山。ここからの満月と田に湛える水面や海の煌めきはさぞや美しかったことであろう。

現在、月見山は「高知県立月見山こどもの森」としてキャンプや樹木観察会・木エクラフトなど野外体験活動を積極的に展開して人気が高い。ミニハ十八カ所もある。



月見山から野市方面を望む。右上の山が三宝山

#### ・岸浦(香南市香我美町岸本/33.540326,133.740231)

人口統計(岸本): 1743年/1,235☆1960年/1,812☆2018年/1,067

与惣太も詞書で「岸本と言ふ」と書く。地名の由来は、月見山の麓にある岸本神社(岑本)神社。社殿が海岸のそばに置かれたことから"岸本"の社名が生まれ、やがてそれが集落の呼び名に転じたという。ただし"きし"は水際だけでなく切り立った崖も意味する。月見山の崖に鎮座する岑本神社は"岸の上"ではなく"きし(崖)のもと"だったのではと片岡雅文氏は高知新聞連載コラム『土佐地名往来』32で推理する。境内には相撲の友綱貞太郎(四股名・海山太郎)出生之地の碑や香我美出身の詩人岡本弥太の詩碑『白牡丹図』がある。

白牡丹圖(詩集「瀧」所収。昭和6年6月発表)

白い牡丹の花を

捧げるもの

剣を差して急ぐもの

日の光青くはてなく

このみちを

たれもかへらぬ

岡本彌太

光太郎書

与惣太は土御門上皇が休憩した常楽寺(現・宝幢院)を紹介しているが、そこから西に街道を進めると すぐ左側に岡本彌太の生家があり、誕生地の石碑には「雲」の詩を刻んでいる。

「雲」(詩集「瀧」所収)

とほくの峠から

あいさつした母のようになつかしい瑠璃雲である

あのこと

あの人たちとの間

虹さへ帯びて美しくたゝえてゐる

岸本は、『地検帳』のホノギ「市ノ北」とするものが9筆あり「これは姫倉山の山の根の南部分が市町(いちまち)であったことを示している。この地には57浜に及ぶ塩田があり、塩を主体とする諸物産の市が立っていたと考えられ(中略)姫倉城(別名岸本城)を中心とする多数給人層屋敷の配置等からしても、当

時岸本村地区は一城下街的様相を呈していた。各種職人 (番匠・土器・鍛冶・ヒショウ)の存在を示す痕跡が認め られる。また岡ノ芝踊場・五良丸ヲトリ堂など庶民の娯楽 施設と思われる」と『香我美町史』は『地検帳』から当時 の岸本村の繁栄を読み解いている。この街道には道路元標 が岸本小学校(2019年廃校予定)南門にあり、赤岡へと商 家の街並みが続く。

## 岸浦(岸本村/p112)

「聞くからに音ぞ涼しき松風の 響あはする岸の浦波」



岸本町道路元標 (香美市岸本小学校南門)

#### ・宇多松原(香南市香我美町岸本/33.538399,133.734727)

酒王・土佐鶴のCMに「天平の香ゆかしき夢の酒 土佐 じゃ土佐鶴朝日に向いて 宇多の松原鶴が舞う」の歌があ る。『土佐日記』に書かれた「宇多の松原」はどこなのか。

『土佐日記』には「九日のつとめて、大湊より奈半の泊を追はむとて漕ぎ出でけり(中略)かくて、宇多の松原をゆぎすぐ。その松のかずいくそばく、幾千年経たりとも知らず。もとごとに波うちよせ、枝ごとに鶴ぞ飛びかよう【承平5年(935)1月9日】」とある。大湊と奈半の泊の間に宇多の松原があるという。



佐藤省三氏は『「土佐日記」を推理する』33で①鹿持雅澄「土佐日記地理弁」で述べた「兎田説(野市町 兎田を昔はウダと呼びそこにあったのが宇多の松原という)」②アイヌ語で砂浜のことをウタリと呼ぶ。そ れが語源になった「アイヌ語説」③宇多天皇の名を冠した「宇多天皇説(土佐日記では地名は仮名書きな のに宇多だけは漢字)」の3つの説を紹介し自身は「宇多天皇説」を支持する。「宇多の松原は岸本」が定説 のようであるが、佐藤氏は当時の船の航海法から「宇多の松原をゆぎすぐ」場所を吉川から赤岡あたりと 推論する。

#### 宇多松原(不明/p 113)

「幾千年よはひに契る言の葉は かくとも尽じ歌の松原」「かきつもる言の葉数を枝折にて 猶尋ねばや歌の松原」「拾はばや名を珍らしみ吉野浜 波に桜の花の色貝」

与惣太は詞書に「此松原は月見山の麓より赤岡浦までの松原を言とぞ。(中略) 今も老木の松原なり」と 記してある。ここでは「歌の松原」として二首詠んでいる。この宇多松原の段に「吉野浜」とあり岸本地区 の字一覧を調べてみると「イノ丸」「ロノ丸」と語尾に丸の付く字名のみで地名が記号化している。

#### ・王子宮(香南市香我美町徳王子/33.556966,133.734684)

岸本から北に一本道を進むと王子宮がある。鎮座地となる徳王子は、徳善村と王子村の合成地名だ。

若一王子宮に「岸本を結ぶ八丁道は長宗我部元親が寄進した」との説明板がある。8丁(町)は900m弱となり岸本までとどかないがどういったことか。岸本から明神橋を渡る手前を北進する道が若一宮への御神幸の道。途中この道の上を高知東部自動車道が横断する。

若一王子宮の鎮座地の字名は澪標(みおつくし)。先に述べたように『源氏物語』の帖名からとった澪標と若一王子宮の鎮座地とは何ら由来はなく従前の字名は「柳ノ内」と『香我美町史』付録徳王子地区全図に記してある。大阪市の市章が澪標で、浅瀬に座礁しないよう航行可能な場所である澪との境界に設置される航路標識である。海図のない世界で途方に暮れた人が王子宮を澪標とするのか。

『若一王子宮由来書』には、永源上人が紀州熊野から十一面観音像を背負うて土佐入りしたとき、今の若一王子宮前で旅の疲れをいやすため眺めのよい場所の大きな石の上に観音像を納めた笈(御厨子)を据えて休み、しばらくして立ち上がろうとすると石にありついて笈が動かない。観音様に問うと「私はここが気に入った」とのこと。この地に社を建てることになったが出来上がるまでの仮の宿を定めたところがいまの刈谷だという。

「仮谷のあたりは現在、源氏物語地名の『関屋』『蓬生』になっていますが、このあたりの旧ホノギ名に 刈谷大将軍・刈谷土居東・仮谷バナ横添・刈谷ハナなどがあります」と山本幸男氏は『香我美の地名考』で 若一王子宮の由来を書いている。

『南路志』に「○行宮(カリマチ)社 俗にかりやの宮という。里民今かりやと云へる所にいにしへ有て、上代宮社御造営の度毎に此社へ外宮遷宮なし奉りけるとそ。今ハ礎石たに残らすなりぬ」の記述がある。伊勢神宮のような式年遷宮はないが、災害による遷宮は過去に多くの事例がある。

四万十町宮内の南側に「仮谷」の字がある。五社の鎮守地であるこの辺りは大字・仕出原と境が入り組んでいるところで、明治 23 年の大洪水によりこのようになったと云われている。『地検帳』「仁井田郷地検帳」にも「カリヤ」があり、検地の流れからも字「仮谷」に比定できる。『南路志』の記述のとおり遷宮時の「かりやのみや(仮屋の宮)」が転訛し仮谷の漢字をあてがったのだろう。近くには谷もなく地形地名でないことは明らかである。周辺は家屋が立ち並んでいるが、この字仮谷の区域は建物が何もなく、遷宮のときを待っているようである。

仮屋・借屋・刈家の地名は各地にある。仮屋の宮であるかは、周辺の地形や隣接するホノギ・字名から検証する必要がある。

#### 王子宫(大忍庄王子村/p 114)

## 「神のます森の老木を見ても猶 むかし忍ぶの草ぞ茂れる」

与惣太の詞書に「池田親王」の行があり、王子村が配流地の旧跡と書いている。本殿の左側に池田親王の歌としてこの歌を石碑に刻んでいる。『香我美町史』(上巻、p113)も『高知県神社明細帳』の王子宮の項を引用し池田親王の歌としている。『土佐一覧記』では

若一王子宫

与惣太が古歌を引用する場合は段を下げて詠み人を書き歌をそえているので、池田親王の歌とするのは勘 違いか、王子村に暮らし薨去した説も口承である。

若一王子宮は、熊野十二所権現の一つ若一王子を神仏習合の神としたもので本地仏は十一面観音である。 熊野社は高知県下に79社あり「中世に入って武家社会の進出に伴い、御師(おし/参拝世話人)との関係は 深まり、その間に立って仲介したのが先達である」と廣江清氏はいう 34。熊野山で修行した山伏が先達の称号を得て土佐の各地に熊野信仰の宣伝をした結果が 79 社となったことだろう。大忍庄が鎌倉末期には熊野権現社領であったが、南北朝時代の初期には、熊野新宮の造営料所となり、これらの縁由で熊野から勧請されたのが下ノ王子宮 (現若一王子宮/香我美町徳王子)で、古来大忍八ヶ村の総鎮守であった 35。

与惣太の詠む「むかし忍ぶの草」とは大忍庄を比喩したものか。香我美は大忍庄の領域である。

#### ・天忍穂別神社(あめのほしほわけじんじゃ/香南市香我美町山川/33.586944.133.781548)

王子宮から香宗川を下分、福万と上りつめ中山川につけば、ここからは山を登ることになる。中腹まで辿りつけばそこからは 185 段の石段をまた登る。森にひそむ神社である。

天忍穂別神社(あめのおしほわけじんじゃ)は、物部氏が祖神を 祭った神社と云われ、石舟神社の名で知られる。『延喜式』巻9·10 神名帳 南海道神 土佐国 香美郡「天忍穂別神社」に比定される式内 社(小社)で近代社格では県社となっている。伝承によれば、天孫



の饒速日命が、石舟に乗り、大空を駆け、山川のスミガサコの山の峰に到着したという。饒速日命が土佐へ初めて降りたのは、物部川下流の上岡山(野市)で、それから富家村に入り、西川村・長谷の小村・峠の船戸・末延の水船・山川の舟谷を経て、当地に至った。

舞川の地石は、饒速日命が休んだ際、舞楽をした跡とされ、長谷の小村には烏帽子をかけたという烏帽子岩がある。当社の南の谷は冠を取った所でカットリ、饒速日命が矛を置いた場所の杖谷、首飾を置いた首珠が佐古にあるなど饒速日命伝説による地名が多い。そう境内の案内板に書いてある。

#### 天忍穂別神社(大忍庄山川村/p 120)

## 「水かみを仰ぐも高し神代より 名にながれたる天の磐舟」

与惣太は詞書に「此社は大忍里庄山川村石船明神と両座併せ鎮るとぞ」と記している。

#### ・山北村金水寺(香南市香我美町山北/33.580750,133.737023)

金水寺地蔵堂は山北の里・ミカン園にある。

『地検帳』(天正 15 年/1587) には金水寺、『南路志』(文化 10 年/1813) には日和山宝珠院金水寺とあるが、『香我美町史』には詳細な記述はない。

#### 山北村金水寺(大忍庄山北村/p117)

#### 「秋来ても雲もまよはぬ空にまづ心にかけて月ぞ待たるる」

与惣太は多分ここで宿をとったのではないか。澄み切った秋 の夕空。野宿にも疲れたが今日は久しぶりの寺の宿。ゆっくり 月の出るのを待っている。



金水寺地蔵堂

高知ではブランドミカンの地位に立つ山北ミカンやイングリッシュガーデンのバラ園も有名。「ミセスジャパン 2018」の世界大会に出場する高橋さんは山北ミカン農家。「女性の目線で農業の魅力を伝えたい」

と尾﨑正直知事に抱負を述べていた。ミカンも人もよく育つ山北の里なのだろう。



香我美町の広い田園から月見山山系を望む

## (3) 香南市野市町



野市の地名は野中兼山の鏡野の開発の歴史でもある。兼山は開発地に三つの「市町」を作っているが後免(南国市)より8年、山田(香美市土佐山田町)より14年前の正保元年(1644)に「鏡野」を「野市」と命名した。東町・中町・西町として最初の市町の創設となったのである36。野市の歴史に詳しい河野通信氏は「市町は開拓地に物資の集散地を創設する意図があり、後免の市町の設置に当たり"諸売買野市なみに役儀有之間敷事"と野市の先例を踏まえ売買について免税とすることをなどの記録がある」と述べている。三つの野地開発の最初であったため「野一」となりそれが転訛して「野市」となったという説もある。

寛保3年(1743)に編纂された『御国七郡郷村牒』には「野市新田5,669 石、戸数588、人口2,636、牛165、馬331」とあり市町として繁栄し、牛馬の多さは商都物流拠点となったのだろう。

『和名抄』は香美郡域に安湏・大忍・宗我・深渕・山田・石村・物部・田村の八郷が記されている。「宗 我郷(曽加)」は富家村・香宗村・赤岡村・吉川村古川村分の領域で、「深渕郷(布加不知)」は佐古村・立 田村(現南国市)を中心とする地域。「物部郷(毛乃倍)」は物部川下流域の三島村を中心とする地域で物部 川右岸域が南国市物部地区である。左岸域が三島村から野市村に編入され上岡地区となっている。これら 三つの郷の一部を野市町域とする。ただし、古代の物部川は長岡・香美両郡の境界付近である田村・前浜 方面を流下していたと『野市町史』に書いている。

野市町域の条里遺構については『高知県史』、『南国市史』、『野市町史』が詳しく書いている。古くからの 田園地帯であったが、近年高知市のベットタウンとして市街地化が進んでいる。兼山開設の道路は今も健 在ではあるが狭く当時の屋号の商家が今も残り昔ながらの街並みとなっている。

#### ・宗我神社(野市町中ノ村/33.567100,133.726342)

香宗中ノ村の枝村として曽我ノ村がある。もとは山北の境近い「曽我(右の写真が旧鎮座地)」にあったが大正2年(1913)に「カヤ原」に移転し、跡地には碑が立っている。

蘇我郷は香美郡八郷の一つで、「曽我」を中心に旧富家・香宗・赤岡・吉川村古川の地域をいう。この香美においては有力な部曲(かきべ)として物部氏と蘇我氏がある。物部氏は全国に広げ各地に祖神の饒速日命を祀り、天忍穂別神社(石船神社/香我美町山川鎮座)はその一つである。蘇我氏は宗我郷のほ



かに長岡郡宗部郷も蘇我氏の部民から郷名が起こったものと『香我美町史』(上巻 p 81) は述べている。

『天保七年支配中諸指出』(野市図書館所蔵)には西野・東野・下井に分けてそれぞれの地名の由緒が記されているが、曽我の地名については中ノ村の北部、往古蘇我部部曲の設けられた跡とある。

#### 宗我神社(宗我郷香宗村/p 123)

「手向とも神はみそなへ瑞がきの 榊にかかる霜のしらゆふ」「祈れなほゆふしめ縄をくり返し 引手に神もなびかざらめや」

与惣太は、波川の宗我神社にも寄り、宗我部城や安芸の蘇我赤兄、高岡郡の浦ノ内の蘇我乙麻呂の歌、 幡多郡伊与木郷佐賀の宗我神社を紹介している。

## 富家(香南市野市町本村/33.572544,133.721294)

人口統計(富家): 1743年/486☆1960年/1,018☆2018年/1,260

野市町本村の字に条里制の名残りのある「富家ノ坪」がある。富家は三宝山の東南の麓に広がる通称地名で、昭和の合併までは富家村(本村・東田・中山田・新宮)と呼ばれていた。『地検帳』にも書かれる中世以前の地名。『校注土佐一覧記』では富家の所在地を野市町本山としているが野市消防団富家分団屯所は野市町東田(うさいだ)にある。富家の範囲は本山に東田の一部を加えた地域といえる。



『民俗地名語彙辞典』では「富家」の意味を「湿地」とし、フケ

は一般にフカダ(深田)ないしは沼沢地を意味し、「深い」ことに基づく地名と説明する。同様の地名が全国に分布するなかで当てた漢字が「婦家」「浮気」「福家」などあり、住んでいる方に戸惑いがあるのではと心配してしまう。

#### 富家 (宗我郷富家村/p 122)

#### 「五月やみ色こそ見えぬ風吹けば 匂ひにしるき軒のたち花」

どこかの家の軒先から橘の匂いが吹く風にのり春をはこんでくる。文化勲章のスッキリとした意匠が橘で、白をイメージする。「たち花」の香りはやはり山北ミカンの匂いが漂ってきたのだろう。

## ・香宗村(香南市野市町土居・野市町中ノ村/33.558598,133.722754)

人口統計(香宗): 1743年/1,114☆1960年/1,466☆2018年/1,445

ここらあたりは塩の道の街道筋でヘンロ石、休石、灯明台などがある古い町並みが赤岡へと通じる。

平安期、香美郡に宗我郷、長岡郡にも宗我郷がある。中世になり郡名の香をつかって香宗我部「香宗」となった。香宗我部氏は室町期の土佐七雄の一人でもある。明治の合併で中ノ村と土居村が「香宗村」となった。



『高知県百科事典』の「香宗我部氏」の項に「建久4年(1193)、中原

秋家は香美郡宗我・深淵郷の地頭に任ぜられたが、地頭職は秋家が後見した主家の一条忠頼の子中原秋通に移った」とある。秋通は甲斐源氏の後裔・武田信義の子孫に当たる人物で、香宗我部氏の初代になる。 「以前、香南市野市町香宗にある香宗我部氏関係の遺跡から、「武田菱」の紋様入りの瓦が出土したことを

「以前、香南市野市町香宗にある香宗技部氏関係の遺跡から、「武田菱」の叙様入りの瓦か出土したことを聞いている」と『高知市歴史散歩 (272 武田家と土佐)』37で広谷喜十郎氏は述べる。その香宗我部氏歴代の居城が「香宗城」で「香宗土居城」ともいう。

### ·立山神社(野市町土居/33.555129,133.719031)

広くすっきりとした神社である。天保年間の手水の石舟があり、そこで出会った婦人は毎日お参りに来るという。

天正期ごろまでは香宗郷の総鎮守であったが、のち富家・鬼田・新宮・赤岡・古川の五カ村で別の鎮守社を設けたため、土居村・中ノ村下ノ段・野市村東分・赤岡浦西浜等の産土神となった。立山神社の御旅所は赤岡にある。赤岡の豪商の援助は厚く棒踊りも披露し祝儀を頂いたとか。棒踊りは香宗我部の遺臣達が山内土佐藩による武器の取り上げ等に反対し、農具である



鍬の柄をとって武器とし、武芸を磨くために行っていたもの。立山神社の神祭で獅子舞とともに奉納されている。香宗我部氏がこの地に居城したときは神領2町4反と手厚く保護された。御神体は阿弥陀仏木像というから神仏混淆の名残りである。

#### 立山神社(土居村/p 125)

「さかゆかん御代のしるしに立山の 神や植けん瑞がきの松」

## 深渕神社(野市町深渕/33.569161,133.689301)

人口統計(佐古村): 1743年/1,543☆1960年/1,736☆2018年/3,983

この神社も式内社の一つで社格は旧県社。与惣太の詞書に「此社は今野市村にあり。深渕之水夜礼花神(ふかぶちのみずやればなのかみ)を祀るかとの考なり。大己貴命(おおなむちのみこと)と異名同神也とぞ。旧祠深渕村にあり。二十一座の一社なり」とある。

深渕之水夜礼花神は『古事記』にしか登場しない神でスサノオのひ孫、大国主の曽祖父となる。父は布波能母遅久 奴須奴神 (フハノモヂクヌスヌ) で、母は日河比売 (ヒカハヒメ)。天之都度閇知泥神 (アメノツドヘチネ神) と結婚



して、淤美豆奴神(オミヅヌ神)を設けている。与惣太は大己貴命(大国主)と異名同神というが、どう理解したらいいのか。

史跡の案内板に「水神として元原部島にあり十善寺を経て明治 25 年現在地に遷宮」とある。最初の社殿 は原部島(竹ノ鼻)にあったという。

遷宮と言っても物部川の氾濫によって移転を繰り返したもので「水神さま」もなすがままということか。 母の「日河」は、スサノオが天より降って出雲の國の簸(ひ)の川上に至ったとあるから出雲の斐伊川のこと か、父の「布波」は中村の不破八幡宮を想起する。いずれにしても水に関係する神様一族のようだ。

深渕は今では香南市野市町の一つの字だが、古代郷制においては香美郡七郷の一つ深渕郷であった。旧 佐古村と立田(現南国市)を中心とする地域である。

#### 深渕神社(深渕郷深渕村/p124)

#### 「浅ましき事な祈りそ深渕の 名に流れます神の社に」

## 野宮(野市町西野/33.572312,133.697745)

野々宮神社の案内板に、鎮座地・野市町西野 449 番地、祭神・野槌神とある。由緒書きには「中世 の野市の町は野々宮の森よりはじまる。寛永年中 (1624·1644)、野市村の開墾竣工し、初めて村落 となるや総鎮守とした(略)」とある。

それまでの野市の姿は『地検帳』の検地の対象 になっていないことから「鏡野」といわれる原野 であったことがわかる。この未開の地は西野、東 野、下井などである。

野市の開発は、野中兼山の通水によるもの。山



田堰、三又で十善寺溝、町溝、東野溝に分水され野市の田園を今でも潤す。野中兼山と野市開発については河野通信氏が『土佐史談』168号に「野市の野開き、父養寺井について、物部川の改修、烏川の改修、東西要路の新設、有用植物の保護奨励、郷士制度の確立、市町の創設」の8項目について寄稿している。

「水を制する者は、国を制す」である。

物部川の名づけの由来について浜田春水氏は「鏡川が本来の呼称であったが、兼山物部川改修に物部地区を縦断する川堀の大工事となった。それが物部川の呼称を固定づけた始まり」と述べている。鏡川の名を第5代藩主山内豊房(1700-1706)に奪われ、代わりに付けられたのが物部川。失脚した兼山への報復は過酷で、名誉回復されたのは死の40年後という。この時代になり遺徳を顕彰したということか。

#### 野宮 (深渕郷/p 126)

#### 「そのままのぬさともなれや咲かけて 千種の花の匂ふ野々宮」

与惣太が野々宮を歩いたのは 1770 年代であることから野市は開発後の豊かな大地である。疎水と田に張った水が煌めき、遠くには物部川が流れる景観だったろう。与惣太の詠んだ歌は「千種の花の匂ふ野々宮」であり、野市の町の原点となる地を愛でているようだ。

## ·大谷神社(野市町大谷/33.573224,133.705400)

大谷神社より名が知られているのが「のいち動物公園」。全国動物園ランキングで旭山動物園(3位)を 抜いての堂々の2位となりスタッフも驚いている。和歌山白浜のアドベンチャーワールドは納得する1位。 白浜・ビックオーシャンのイルカショーは若いエネルギーをいっぱいいただけるが、海外の動物愛護団体 はイルカの動物芸を虐待として「反サーカス団・反動物芸」運動を強烈に展開している。「不快」との声は 人間を中心に捉えた驕りではないか。ビックオーシャンのイルカと少年少女たちのパフォーマンスは両者 の親和性から生まれてくる共生の姿だと思うのだが。ともあれ「のいち動物公園」で自分が社会の囚われ の身であることを自覚した後、大谷神社に参拝して大谷選手の二刀流大願成就を祈念していただきたい。

金剛山(三宝山)の西南麓の大谷に鎮座し、近くに四国霊場 28 番大日寺がある。

『三代実録』(870年) に「授土左国(中略)従五位下大谷神従五位上」と記載される古社である。祭神は天岩戸別神(あまのいわとわけのかみ/別名櫛石窓神/くしいわまどのかみ)。門守の神として、各神社の参道の脇や、神門などに祀られている場合が多いという。また、古来より石には神霊が宿ると考え、石神信仰や巨石信仰にも関係し天岩戸別神を祭神とする場合もある。

#### 大谷神社(深渕郷大谷村/p 125)

#### 「みしめ縄なほくり返し祈らばや 恵みも深き大谷の神」

注連縄はわら縄を綯い紙垂をつける祭祀具。神社の鳥居から拝殿、狛犬、境内社にも張り巡らす。「しめ」はこの世とあの世の結界を「示す」意味や神聖な場所を「占める」という意味で、これ終わりという大酔い後のラーメンではない。縄を綯うことは年寄りの仕事と思っていたら私もそんな年になっていた。

#### 島森(野市町西佐古/33.598553,133.712454)

物部川左岸の加茂と町田の集落の岡側、標高 192mの山頂に烏ヶ森城がある。『野市町史』は烏ヶ森城について、山腹の傾斜は 45 度にも及ぶ天然の山城で山頂は東西最大幅 12m、南北の最大長 40mの平坦地で、西辺には高さ 2 mほどの自然の岩盤が土塁のごとく壁状になっている。城主は山田氏の重臣西内氏と書いてある。ここを源とする川が「烏川」で、東佐古、大谷から香南市役所横を流れ吉川町古川を通って赤岡町で香宗川に合流し太平洋に流れる 8 k m程度の小河川である。

鳥(からす)地名は県内各地に分布する。日本サッカー代表のエンブレムで有名になった「八咫烏」は、

神武天皇を熊野から橿原まで道案内した三本足の鳥である。熊野のシンボルでもあり、熊野神社の御師が 全国を廻って授ける牛王宝印にはカラスが描かれている。水先案内としての鳥のチカラを信仰したものだ ろう。

鳥地名について『地名辞典』には①カラ(涸)・ス(洲)で干しあがった洲。小石の土地②鳥類カラス科の鳥にちなむか、とだけ書かれているだけである。『大言海』はカラスの項で「かハ鳴ク声、らハ添ヘタル語、すハ鳥ニ添フル一種ノ語」とある。ウグイス、ホトトギス、カケスの語尾につく「ス」のこと。鳥は八咫烏として崇めるものではあるが、黒のもつイメージや悪さをする意味から好きでない鳥としてぞんざいに扱われている。

『地検帳』にも「カラス」はみられるので古名であることは確かである。県内の小字を拾ってみると、鳥が森(安田町東島)、カラスナロ(香美市香北町西川)、カラスガモリ(香美市香北町韮生野)、カラスノトマリ(香美市物部町黒代)、カラスドマリ(香美市物部町楮佐古)、カラスヲ(大豊町庵谷)、鳥田(いの町枝川)、鳥出(仁淀川町別枝)、カラスイシ(仁淀川町橘谷)、カラスノトマリ(仁淀川町土居・北浦・岩丸・岩柄・大渡・大西)、カラス峠(越知町山室)、鳥ヶ森(日高村下分)、鴉ガ泊り(土佐市永野)、鴉ガ芝(土佐市積善寺)、鳥森(津野町新土居)、鳥出川(津野町の大字)、鴉巣越(梼原町飯母)、鳥手(四万十町の大字)、鳥田谷(四万十町金上野)、鳥松(四万十町希ノ川)、鳥田(四万十町大井川)、カラスデ(四万十町古城)、カラストマリ(四万十市小西ノ川)、鳥坂本(四万十市西土佐津野川)、カラスノト山(四万十市西土佐半家)、虎杖カラス(宿毛市和田)、カラスデン(宿毛市橋上)、カラス谷(三原村広野)、カラス丸山(土佐清水市下ノ加江)と多く、『地検帳』にも比定できるものがある。

特徴的なのは「カラスデン」である。鳥田、鳥出、カラスデン、カラスデと転訛しているが、カラス・タ (田) の音節で数多い神田 (神社の経費に充てられる免租田) の一つのように思える。また、「カラスタ」は辛耒 (からすき/牛に曳かせて田を深く耕す道具) が転訛したのとも考える。福島県では種蒔きの日に水戸口に牛王の札 (牛王宝印) とともに鳥幣を立てるという。八咫烏の牛王宝印は熊野神社の御札であり、県下に 79 社の熊野神社 (三所・十二所・若一など含む) が勧請されていることから、鳥地名と熊野神社との関連性を今後進めてみたい。

城主・西内氏の本姓は三河細川庄に発する源氏の名流細川氏である。『土佐の古城』では加茂烏森城と記録しているが、西内氏の城の所在についてはあいまいとして「南路志では、加茂村の古城を西内常陸とし "烏森古城"を"細川常陸"としている。ところが高知県史では"佐古烏森城"は富家刑部の城としている」と双方について書いてある。烏ヶ森城の北東の麓に「加茂土居」のホノギがある。この一帯が城主の土居屋敷であろうと考えるのが至当だろう。

#### 烏森 (深渕郷佐古村/p124)

「朝まだき声もまぎれて郭公 からすの森の梢にぞ鳴く」



昭和30年(1948)国土地理院・空中写真(香南市の南部海岸側)

## (4) 香南市赤岡町



旧赤岡町は日本で一番面積の小さい自治体(1.64 km。2005 年-2006 年)と云われ、室戸や安芸に向けて車を走らせるとアッという間に通り過ぎてしまう。秋葉山山系を源とする香宗川も香我美町岸本の「大曲」で直角に西流し半円を描くようにして土佐湾に注ぎ込む。この逆「つ」の字に流れる香宗川の内側が赤岡村、その東端の岸本境が江見村、町の北域に平野と少しの丘陵地となるのが須留田村である。『地検帳』の「香宗分地検帳」に赤岡村、須留田村が、「大忍庄地検帳」に江見村が見える。元禄郷帳には赤岡村と須留田村の記載しかない。現在、江見村は赤岡本町に続く「江見」という字名に残り、江見集会所がある。

もとは「中岡」と称されていたが、沖合から見ると赤く盛り上がった丘のように見えたことから中世になって赤岡と呼ばれるようになり、「丹陵」「赤岳」の字も当てられたという。江戸期には商業が盛んで、赤岡と上方交易が盛んとなり高知城下経済圏に対抗する「赤岡相場」もたった。赤岡には長木屋・西川屋(梅不し・ケンピ)など有力商人が隆盛をなした。1900年には赤岡銀行も設立された商都である。『赤岡町史』には立山神社の「神輿出銭左通」として神輿調製の寄付者一覧表が掲載されているが、当時の商人職人の屋号・業種や出身地などから県下を代表する商工業の中心地であったと思える。

赤岡町は小さな町ゆえに古くから合併と分離の歴史でもあった。明治3年(1870)には赤岡・古川・岸本の三村が連合して赤岡郷、5年後には赤岡村、岸本村となった。その後大忍村への大同合併と分離、香南町の合併勧告を経て「平成の合併」で香南市となった。

#### • 須留田山(赤岡町/33.549670,133.725720)

赤岡でも唯一の小高い山である。南西には技研製作所の創業者・ 北村家の大邸宅があり、北西には山崎算所の字名もある。

『香美郡誌 赤岡町』には、須留田の地名の由来について、水はけがすみやかな田というところから"駿田"の名となりそれが須留田に転訛したと書いてある。須留田の地名は建治3年(1203)北条時政の書状に「須留田別符兎田保、為香宗我部郷最中之由」とある。須留田の山には良質の土があったらしく上代から土器づくりの一団が定住していたという。

この須留田山には須留田式部入道の城もあったが、城好きの与惣 太も気にとめていない。現在の城山高等学校が城跡であるが遺構は



須留田八幡宮・神祭の絵金展示

残っておらず案内板もない。近くには須留田八幡宮がある。赤岡の字図には「城山」「御所の前」「宮の本」 「宮の前」があり、歴史を刻んだ地名となっている。

この須留田には芦田主馬太夫という算所頭、博士頭がいる 38。算所は古くは「散所」と書き「本所(律令時代の大規模荘園など地租地)」に対応する言葉で、領主に従属し、年貢は免除される代わりに狩猟・交通などの労役を提供して未開墾の荒廃地など地租免除地に居住した。農業従事者(常民)ではなく社会の管理システム(納税・戸籍)から逃れることができた解放の民、漂泊の民となった。走り者(過酷な農業から逃れるため農地を放棄したものや新天地への移住者)や大工事の現場に住みつく渡りの労働者や芸能集団や陰陽師・祈祷師・占い師ら非農業者が散所(算所・産所・山所・三所)に住みつくようになった。その散所の民を支配する支配頭を「算所頭」と呼び、陰陽師がその役を担うことになった。算は占いを意味し、算所は祈祷などの巫術を行う場所である。陰陽師は「博士(卜占者)」と呼ばれたことから同意として扱われるようになった。中世にその名を残すのが芦田主馬太夫である。

野市の字図には香宗川右岸の赤岡境に「算所」「山崎」「鎮守」「太鼓屋敷」「イチノミコ (佾)」がある。 この須留田山の北側に居住し土佐国全域に権勢を誇っていたのだろう。

#### 須留田山(須留田村/p 121)

「幾千年の春もなれ見ん十廻りの 花の咲べき松の下かげ」

人口統計:1743年/1,934☆1960年/4,954☆2018年/2,734

赤岡海岸の「どろめ祭り」は酒を飲干す奇祭として有名。その"動"に対峙するのが"静"の「絵金祭り」である。蝋燭の明かりに照らされたおどろおどろしい絵金の作品を街角展示する、これもまた奇祭である。赤岡には絵金のミュージアム「絵金蔵」もあり高知の次の商都といわしめる面影がある。

旅の面白さに「路上観察学」がある。右の本はその実践本で、歩くことにより日用雑貨のモノの景色に新しい発見が生まれ、道端の人に尋ねることで過去を知ることもできる。看板やマンホール、透かしブロックから路地裏のちょっとした暮らしの知恵、小さなひとコマを探す「路上観察」は町づくりのツールとして全国で進められている。今日も「赤岡探偵」をやっている人をみかけた。その人を観察するのも面白い。赤岡はコンパクトシティーだ。



赤岡の観光資源として「塩の道」もよくニュースに取り上げられる。『地 検帳』によれば塩浜の数が赤岡村 52、古川村 106、今在家村(赤岡東部)

21、岸本村 58、夜須庄横浜 4 となっており合計 241 の塩浜が確認される。赤岡では塩市が開かれ、生活必需品である塩を中心とした人と物の往来が盛んに行われたことだろう。塩市の赤岡を起点として香宗川を上る大忍往還や母代寺・東佐古・逆川を経て韮生郷へ向かう韮生往還があった。塩焚きには燃料となる塩木が大量に必要となることから復路で奥山から持ち込まれた。塩の道は塩木の道でもある。

塩に関連する地名は県下各地に刻まれている。「塩の道ウォーキングトレイル」の終点の物部町山崎の「塩」も印象的で、そこから大栃に向けて峰越えすると山頂部に立派な「塩峯公士方神社」がある。石舟神社のご神体を塩籠に入れてこの地に祀ったという伝承のある神社。無理すれば1日で踏破することができる。「塩の道ウォーキングトレイル」は日本各地のトレイルと同様でイギリスのフットパス(行ったことはないが)ほどには進化していない。パンフレットは充実していて迷うことないが、歩くことを楽しむ仕掛けに工夫がほしい。



塩は細胞のバランス調整に欠かせない「かけがえのない食品」であり、料理の魔法使いである。それゆえに人も動物も昔から塩の調達に苦労を重ね、各地に塩地名が刻まれることとなった。

東洋町野根には塩山、室戸市吉良川に塩屋囲、安田町唐浜に塩屋ヶ森、安芸市井ノ口に塩ノ木、香美市香北町有川にシヲウリ、香美市香北町川ノ内にシヲウリ、香美市物部町拓に塩ノ畝、香美市物部町大栃に塩ノ峯筋、香美市物部町山崎に塩、南国市廿枝に馬シオ、南国市久枝に塩浜、南国市稲生に仁井田汐田、大豊町梶ヶ内と岩原にシヲウリ、越知町佐之国に塩ヶナロ、越知町越知に塩田、土佐市新居に塩走、須崎市多ノ郷に汐木、須崎市土崎に汐木割と塩塚、四万十町興津に塩木山、四万十市三里にシヲギ、四万十市磯ノ川に塩ヶ森、宿毛市藻津に塩屋、土佐清水市下ノ加江に塩屋ヶ谷がある。

## 赤岡浦 (赤岡村/p 120)

「風はやみ波も真砂も吹あげて 雨に霰の交るとぞ聞く」「朝なぎに春の海原見わたせば 限りも波の末ぞ霞める」

#### (5) 香南市吉川町

香美市吉川町は旧吉川村の区域をもって吉川町とした。吉川町は『地検帳』に記録されているように東 部の烏川流域の「古川村」と西部の「芳原村」に分けられる。

古川村は、古くは宗我郷の中にあり中世には香宗我部郷・香宗郷とも呼ばれた。明治8年に編纂された 『古川村誌』には村内を流れる烏川の古名が古川であったことに由来とある。北は古川山(九六山・下田山・大石山・八幡山・篠部山)を境に野市町、西は烏川の支流瀬戸川が北に向かう南北線を境として吉原村に接する。

古川村は『地検帳』「土佐国鏡郡香宗我部郷御地検帳」に古川分として記されている。枝村として「龍山ノ前村」「平ゐ村」「飛岡ノ村」「ツクテノ村」「泉ノ村」「大西やしきノ村」「鏡野馬フクロ村」があると『吉川村史』に書いてある。飛岡ノ村は飛地として野市町東野の富岡山であり、泉ノ村は津波でなくなり、鏡野馬フクロ村の野市町との関係など複雑な変遷となっている。小字には前述の山名のほかに、条里制の痕跡を残す「中ノ坪」や、「前塩田」といった揚浜式塩田の地名や多くの



屋敷地名が見える。「大将軍」は社名の名残りか。『香美郡誌』に室町から戦国時代にかけて流行した大将軍信仰で陰陽道による星占いに関係したため明治維新の神仏分離令で難を逃れるため祭神未詳とした神社が多いと書かれている。不思議な地名は「バラ畑」である。西洋貴族が楽しむ花と思いきやバラの自生地として日本は世界的に知られているという。江戸時代にもモッコウバラなどが栽培されていたが、バラが「花の女王」の地位を築いたのは明治以降という。古川のバラ畑は何のバラを栽培していたのか。

吉原村は『地検帳』では「吉原庄地検帳」として一冊に綴じられている。この『地検帳』に関し『吉川村史』では「大将軍村」「住吉村」「八反畠村」「十町分村」「タツミノ村」「「黒ノ前村・宮村」「野本村」「上前田村・井戸村」「高山村」「東島村」で田・ヤシキの小計を立てている。大将軍村は古川村になっている。八反畠村のホノギに「土居屋敷廻り」がありここが芳原城址になるか。東島村は物部川右岸の飛地である。



このように『地検帳』は当時の村民の信仰関係や多様な職業名、農地開発の痕跡など歴史に刻まれたホノギやその脇書きがある。

#### ・吉原の古城(香南市吉川町吉原/33.545758.133.693571)

吉原は明治の合併で吉川村となる前の郷村である。物部川の最下流の左岸に広がる田園、南には太平洋が広がる地で、吉原は一面に葦が生い茂る河口の低湿地であったことだろう。『吾川郡芳原村誌』に「村名ノ起リヲ考フルニ、往時ハ全村概ネ葭葦稠茂セル埤窪ノ沢原タリシニ職由シ、同訓タルヲ以テ吉或ハ芳ニ作ルニ至レリ」とある。途中、将軍徳川綱吉の時代に恐れ多いと元禄13年(1700)、吉を芳に変えて芳原としたという。高岡郡吉生野村、幡多郡地吉村、幡多郡吉川村、幡多郡吉奈村もそれぞれ吉を芳に改称し

た。吉原(葦原)は開拓前の原風景である。

吉川村ホノギ図をみると「土居屋敷廻」「古城ノ前」「東角田」「孝善寺屋敷」「久保坊」「新養寺屋敷」「射場屋敷」「古市」「番匠屋敷」と土居周辺に往時の賑わいを示す地名が続く。ちなみに古市は『地検帳』以前の市で、江戸期以降の市は新市と言うそうだ。

この吉原城(城監:丁野帯刀)については宮地森城氏の『土佐国古城略史』が詳しい。また、その本と『地検帳』や『南路志』の史資料をもとに現地を訪れた西山晴視氏の『土佐の古城』は、中世城郭の今の姿(昭和 40 年代)を記録した「城址探訪ガイドブック」として読みやすく面白いので参考にされたい。



## (6) 香美市土佐山田町

山田郷は平安期にみえる香美郡八郷の一つ。時代によって範囲は幾分違ってくるが吉田東吾『大日本地名辞書』<sup>39</sup> (1907) には「今山田野地村・明治村・大楠植村・佐岡村是也深渕郷の西北、殖田郷の東、岩村郷の北、物部川の西」とある。また『日本地理志料』<sup>40</sup>には「吉祥寺・町田・加茂・林田・七野・高棚・狭間谷・舟谷・小島・杉田・大比良・大法寺・山田・野地・岩積・西後入・大後入・中後入・有太・秋友・河



内・遅越・佐岡・上村・二十四邑」とある。

現在の市街地の街並みは小倉少介・野中兼山の新田開発と市町づくりで発展していった。特に舟入川の 開設に伴う往来の要衝として氾濫原にあった「古町」を上段の河岸段丘に「新町」を移した。今でもその西 町、東町の名称は残っている(詳しくは山田の段を参照)。

#### • 逆川(土佐山田町逆川/33.603848,133.738321)

与惣太は「さかさまの川もある世に老楽の 若さに帰る年波やなき」と逆川を自分にかけて人生はままならぬと詠う。聞楽山を源として物部川に逆流しつつ土佐山田町神母ノ木でその本流に入る片地川の上流域が土佐山田町逆川(さかがわ)。地内の龍河洞付近はまさに本流とは逆に流れる位置となる。『地検帳』にも逆川ノ村とある中世以前の地名だ。

合流先の河川の増水により水が逆流することがある河川(四万十市川登)や本流の流れとは逆の方向に流れる河川(物部町舞川・香我美町舞川)を「逆川(さかがわ・さかさがわ)」と呼び、全国に分布する。高知県では逆川とは呼ばないが四万十市川登は四万十川の増水時はまさに逆流する「川登現象」となる。永瀬ダムに合流する舞川も香南市香我美町撫川を源流域として物部川とは逆方向に 21kmも北流する川である。

#### 逆川(深渕郷逆川村/p 119)

## 「さかさまの川もある世に老楽の 若さに帰る年波やなき」

NHK・BSプレミアム「日本縦断こころ旅」で火野正平が「人生下り坂最高」という。正平さんと同世代の男子諸君は共感しているのでは。上り坂、下り坂と人生の起伏にも似た自転車旅にとって下り坂は苦しみからの開放、そんな時フッとでた自然な言葉のようだ。与惣太も50歳を過ぎあの世もそこにと予感する旅先で、逆川を見てプレイバックしたのだろう。「今が最高」「人生下り坂最高」と思って詠んだと思いたい。

## ・影山(香美市土佐山田町影山/33.616741,133.728279)

人口統計(片地村): 1743年/1,568☆1960年/3,243☆2018年/2,293

与惣太はどうして影山の大峰山に参詣しないのかと不思議に思ったが、調べたら明治8年に影山・林田・山田島の三部落が勧請したものだという。山容が大和大峰山に似ていることからというが、山頂に至る行者道には鐘かけ岩、競り割岩、胎内くぐり、西の覗、亀の岩とあり修験道発祥の大峰山に似せた設えである。明治維新の大罪は一片の神仏分離令。各地の修験僧がこの地に烽火を上げたのだろう。昭和30年頃まで四国各地の先達が集まって護摩供養が盛大に行われたと『土佐山田町史』(p934)は記している。香美郡には修験者(山伏)とその山修行の場が多い。大峰山(夜須・手結)、大峰山(山田・片地)、高坂山(物部・笹)、石立山(物部・別府)などあり香美は神の居ます場所、祈りの地、修行の地である。

#### 影山(山田郷影山村/p 130)

## 「夕日かげ山路照らして岩つつじ こき紅の色ぞあらそふ」

影山城のあるところは土佐山田町間の小高い丘で片地川の右岸、その北側が土佐山田テクノパークである。

## · **夢野**(香美市土佐山田町佐古藪/33.618434,133.716810)

『地検帳』「山田郷地検帳」に小村として佐川藪(佐古薮)がありその次に夢野として「ウシツキイシ上道トツイチトイアイ」「鹿ヲトシの東駒伏一籠」「野畠ヤシキ理有」など8筆がある。現在の土佐山田町佐古薮の小字に「シカヲトシ」「ユメノ」があり、鏡野公園の南側、県道22号線の向いが「夢野」と比定できる。土佐山田町宮ノ口には「夢野南ノ丸」「夢野酒屋床北」、土佐山田町神母ノ木にも「夢野」の字があることから片地小学校周辺が夢野と呼ばれていたようだ。『地検帳』の佐川藪は現在の佐古薮である。



中世に夢野と洒落た地名になっているが、「ユリ」「ユラ」「ユル」は台地や丘陵の平坦面にちなむ地形用 語であることからこの音節の転訛ではないかと推理する。県下で夢の付く小字はここだけである。

#### 夢野(山田郷片地村/p132)

#### 「幾度か寝覚しつらん秋の夜の 夢野の鹿の声を聞にも」

物部川左岸・神母ノ木に「鹿寝覚 (シカノネザメ)」という字、佐古薮には「シカヲトシ」という字がある。当時も鹿は有害鳥獣であったらしく「鹿落とし (しかおとし)」の設えがあったのだろう。鹿は「ピー」と鳴くものかと思いきや万葉集など古歌では「カーヒョー・ヒヒ・カイヨ」と詠んでいる。『土佐一覧記』でも鹿は郭公 (21 首) に次ぐ 10 首が詠まれている。

#### 古今集(雑1034)

#### 「秋の野に妻なき鹿の年を経てなぞわが恋のかひよとぞ鳴く」

一人身の鹿が夜な夜な効(かい)もなく「かひよ、かいよ」と雌を求め捜し泣く、夜這歌。

与惣太は詞書に「此野は韮生にあり。平かなる広野」とある。片地小学校や高知工科大学の西側が土佐 山田町船谷にあたり『地検帳』の船谷を見ると「韮生口」「アカリトロ」というホノギがある。韮生郷への 入口となる明戸峠はこの船谷の裏山である。

## • 鏡石(香美市土佐山田町/33.620900,133.716767)

与惣太は詞書で「此石は夢野にあり。磨る鏡のごとし。此郡をかがみ郡と言ふも此石による名なりとぞ。そのこ川をかがみ川と言う」と記し、郡名(香美郡・かがみごうり)も川の名(古名・鏡川は江戸期に物部川となる)も鏡石が由来と説明する。

鏡石(山田郷片地村/p133) 「みがきえぬ心のくもり返りみて 向ふ鏡の石もはづかし」



物部川左岸の山田堰井筋土地改良区付近に「鏡石」

#### ・夢森(香美市土佐山田町宮ノ口周辺/33.620739,133.719835)

『校注土佐一覧記』では「夢野一帯にある森林で、神母ノ木から佐野付近へかけてであろう」と山本武雄氏は推定している。

物部川左岸の河岸段丘の二段目となるところに片地小学校や高知工科大学がありそこに「夢野南ノ丸」という字がある。丸は男の幼名(牛若丸)、船名(明神丸)、本丸の城郭(二の丸)、中世の名田からきた田地の所有者をつけたもの(太郎丸)、などとともにモリの転訛として山を意味する名称でもある。特に徳島県に多く分布する。ただ、語尾に丸のつく地名は山田郷、大忍庄に多く分布するので森と断定はできないが、付近に城郭の記録もないし



条里制の区画でもないことから古くはこの付近を夢森と言われていたのがいつしか転訛して夢野の丸になったのではないか。高知県の未来の森を創る高知県立林業大学校や高知工科大学がこの地にあることは縁である。

#### 夢森(山田郷宮ノ口村/p134)

## 「たのまじよ露の契りのかり枕 結ぶも夢の森の下草」

与惣太はこの片地周辺が気に入ったらしく「夢野」「鏡石」「影山・古城」と立て続けに詠んでいる。さては、物部川の大水で渡しがかなわず待機することになったのか。すぐに出立するなら明戸峠から韮生郷を 目指したはずである。やはりここは夢の中で待ったのだろう。

#### 佐野(香美市土佐山田町佐野/33.629816,133.714492)

人口統計(佐岡): 1743年/1,463☆1960年/1,311☆2018年/587

佐野は土佐山田町に編入されるまで佐岡村と呼ばれた8村落 (本村・大平・有谷・佐竹・中後入・西後入・大後入・佐野) の一つ。物部川右岸沿いに河岸段丘が形成され農地が広がる。 この佐岡の山側に大平地区があり高知県立林業大学校が開設されている。高知県森林総合センターや森林技術センターもあり 「林業の拠点」ともいえるのが佐岡である。

『土佐山田町地名解説』には佐岡の説明に「南部にある半坂 山を北へ向かい越える時は物部川を右に、諸岡陵を左にする故



に左岡とせり」を引用し、村の入口から左側に岡がある地としている。上下(かみしも・うえした)や東西南北の方向地名は一地点を基準とした方向地名で基となる地名から位置関係が理解できるが、左右の場合は何を基準にしているかを推定しなければならない。例えば同じ佐岡の地名が四万十市の後川左岸にあるが、その右岸が右山である。京都の右京左京と同じように一条氏の御所を基準としたものと理解できる。

また、左右の違いは民俗学的にも大きな意味をもつ。「左遷」「左巻き」などの言葉があるが、何れもマイナス評価で「右尊左卑」が常識となっている。逆に古来は左=聖(呪術・宗教的活動)、右=俗(世俗的生活活動))が文化的基礎にあったという<sup>41</sup>。

「村の入口から左側に岡」といわれても、韮生郷から明戸峠を越えて山田郷の夢野に折り付けば、佐岡は「右岡」になってしまう。そう思っていたら行方不明の子どもを探したスーパーボランティアの尾畠春夫さんが「子どもは上の方に向かって行く習性がある」とインタビューに答えていた。左京右京は別として俗世間では下方から上方が命名の基準となるのかもしれない。

『民俗地名語彙辞典』には、全国に分布する佐野地名だが多くは「狭い土地」を意味するサノのようだと書いている。また『地名用語語彙辞典』には、サノの項で①サ(接頭語)・ノ(野)の意味もあり美称地名として「佐」を付す場合もあるとしている。

#### 佐野(山田郷佐岡村/p 130)

#### 「ふけ渡る月もながれて涼しさの 深くなり行く秋の川風」

#### • **鏡野**(香美市土佐山田町・香南市野市町/不明)

古代にさかのぼる地名で香我美の野という物部川下流域を示す地名であろう。一般的には物部川の左岸 (東岸)が鏡野、右岸(西岸)が香我美・長岡両郡に広がる山田野地ではあるが、どちらも物部川の未開の 河岸段丘であり氾濫原である。土佐山田町片地に鏡野公園、土佐山田町楠目に鏡野中学校の地名を刻んで いる。

鏡野の由来について『土佐幽考』42に二つの伝承として、一つは郡司・物部鏡連家主の姓にちなんだもの、もう一つは土佐山田町神母ノ木の字名にもなっている鏡岩にまつわる話とある。「姓は地名からが 80%」の原則から判断すると鏡石の段で述べたが物部川のほとりで行き交う人を映した鏡岩が納得する。

#### 鏡野 (p119)

## 「暮行けば月もうつろふ鏡野の 草葉にみがく露の白玉」

与惣太は今夜も野宿かと思う。今風のテントや寝袋、コンロ・コッフェルもフリーズドライの食品もない昔の野営である。鏡野は未開の採草地。向こうにはここかしこと竈の煙はたなびいているが今夜は露をしのぐ間借りもない。そんな野原にぽっかりと月が照らす、そんなイメージを読む。鏡野は、条里制により開発された田園風景ではない。

#### 山田(香美市土佐山田町/33.595541,133.690953)

人口統計:1743年/1,841☆1960年/8,983☆2018年/11,810

香我美の北端の台地。『地検帳』の検地の時点では市街地の 形成には至っていない。『地検帳』では山田郷の小村「中野西」 の次に「新野」があり、そのホノギに「新野北町」「南町東ハ シ」と芝荒地が見える。『土佐山田町史』(p364)も旧山田町 の西南端の平地部にあるわずか2町歩程度の幻の町の痕跡 とある。山田氏が長宗我部に支配される前の出来事で野中兼 山の「市村」づくりの半世紀以上前の話である。

山田堰の完成とともに舟入川の水運を利用して香美郡韮



山田野地の町分(現・東本町付近)

生の地と高知城下の交易点として山田の野開きが始まったのが正保元年(1644)という。「現在のなんまつ

橋の南、上井と中井にはさまれた地域の古町から、今の秦山町付近の新町に移されたが、東西の交通路を考えて、再び旧山田町の街並みの線に移住させられた」と立証する文献史資料はないが推定できると『土 佐山田町史』に記されている。

山田野地村が山田野地町となった記録が寛延2年 (1749) の古文書にあり <sup>43</sup>、当時、野地町は東1丁から9丁まであり、山田野地は町分と郷分に分かれていたとある。舟入川の整備とともに区画街路の街並みも東町と西町として整備され、それぞれに「公儀の井戸」も設置された。「東の井戸」が現在も山田郵便局の斜め前(東本町3丁目)にある。

山田は人と物が交わる地政学上の重要な位置にある町として発展してきた。

#### 山田・古城(山田郷楠目村/p127)

「山田守苅穂の庵の秋深けて 風に鳴子の音ぞさびしき」

#### · 岩積神社(香美市土佐山田町/ 33.592279,133.693421)

日本に古くからある自然崇拝。それは山であり森であり岩である。巨石信仰の対象となる神の依代である岩を磐座(いわくら/磐倉・岩倉)という。岩や石の重さ硬さが不動永遠の命を象徴するものとして信仰の対象になったものだろう。ナスカの地上絵、屋久島宮之浦岳の巨石アート、足摺の唐人駄馬石群など今では人気のパワースポットである。岩手県の岩は『三ツ石さま』と呼ばれる大岩を由来とするなど、岩の字のついた地名は多く、かつてその地域の幸福を願って神を祀った場所であったという。



土佐山田駅から真っすぐ南下すると物部川の戸板橋に辿り着くがその左側(右岸)に通称・岩積神社(右上の写真)がある。堰留神社(いどめ)・石留神社(いわどめ)として境内地に説明書きがあり「物部川の中州にできた戸板島村の北端にある巨石が洪水のたび河水を堰き留めて、村を水害から守ってくれるので、村人たちはこの巨石を磐座(いわくら)として堰留の神、石留岩積の神としてまつったものである」と書いてある。それでも文化12年(1815)の大洪水では堰留神社の社殿が流失し同年10月に再興したという棟札がある。寛政元年(1789)の『物部川絵図』44には「岩ツミ社」とあり、また神社記には地元では御岩大権現として崇敬されていたが明治元年に社名を堰留神社に改称したとある。

#### 岩積神社(山田郷岩積村/p129)

#### 「動ぎなき御代の守も跡たれし 誓ひぞ仰ぐ岩積の神」

与惣太も詞書に御岩権現、堰留石留神社と書いている。物部川を鎮める神社である。

#### · **金地神社**(香美市土佐山田町神通寺/33.583704.133.677049)

金地神社(神奈地神社)の周辺は条里制の区分けが字名として残る古来よりの地である。『校注土佐一覧記』には「往時は元三所大将軍と称しており、祭神は事代主命とも加奈地姫ともいう」とある。神奈地祇神

社は、明治維新後に郷社となったが、祭神は「饒速日命」物部 氏祖3世の孫「天忍男命(あめのおしおのみこと)」の妻「賀 奈良地姫(かならちひめ/賀奈良知姫)」を神奈地祇神社として 当地へ祀ったもので、三所大将軍と称したと伝えられている。

『土佐幽考』には、里人当社祭神を「賀奈地姫」としていた との記載がある。別の書では国産み神話の際に生まれた五島 列島を神格化したのが「忍男」。「多し男」の意味で五島列島の 島々を表現したもの。「賀奈地姫」は奈良盆地の南西を支配す



る葛城国造「剣根命」の娘であり、その子が尾張連の祖神となり、娘が第5代孝昭天皇の妻となっている。 物部氏の勢力の強いこの地域に賀奈地姫を祀ったのは自然で、その賀奈地が転訛して金地となりこの地 の地名となったのだろう。ただ鎮座地は神通寺で金地は西隣(南国市金地)に位置する。ここは物部川の 氾濫原、流路の変更で何度が移動したのではないかと思われる。

金地のカナは金属に関連する地名が一般的であるが、カネ(矩)で「直角」「曲がった」という意味もある。また高知の方言でカナグルがある。カク(掻く)ナグ(薙)で崩壊地形浸食地形をいう場合や焼畑地名のカナの転訛もあるという。どうもこの金地は関係なく「賀奈良知姫」が由来のようだ。

与惣太は詞書で「居民称大将軍」と書いている。『校注土佐一覧記』で山本武雄氏は「三所大将軍」と説明している。三所は王子、若一王子、若王子、新宮、十二所、権現など熊野神社の一群である。県下各地に79 社が勧請されている。熊野の御師(おし)と熊野で修行した地元の先達が熊野信仰の伝道者として各地で修験しながら各地の有力者が勧請していったのだろう。大将軍神社は香美郡(夜須村・王子村・吉原村・神通寺村)、長岡郡の平野部に多い。『長宗我部地検帳の神々』45によると安芸郡に3社、香美郡に5社、長岡郡に2社あるがほとんどが未詳である。大将軍と勇ましい社名ではあるが縁結びの神であったり陰陽師の祭神であったりする。香南市吉川町の説明で述べたが、室町から戦国時代にかけて流行した大将軍信仰で陰陽道による星占いに関係したためと思われる。

賀奈地の音は神奈備に通じる。この地に流れる物部川を神奈備(かむなび・かみなび・かんなび)として神の依代としたのではないか。「神」は香美であり、「奈備」は隠れるを意味する。修験の山伏(熊野信仰)、陰陽師(大将軍)、いざなぎ流(民間信仰)にみられる香美郡は古来より信仰の刻まれた神の居ます地である。

### 金地神社(山田郷神通寺村/p 124)

「伏し仰ぐ心のぬさを手向にて 祈るまことを神や守らん」

#### ・上村古城(香美市土佐山田町/33.618854,133.680718)

国府の都を流れる国分川は上流域で領石川と新改川を合わせる。ここは北山に向かう交通の要衝である。 与惣太は「上村越前守居之」としか書いてないので、ここを訪ねたかは不明である。

#### ・甫木(甫喜山氏城:香美市土佐山田町東川/33.653593,133.683443)

『校注土佐一覧記』では長岡郡の段に載せられている。古くは甫喜山と呼ばれその山稜に辿りつけば「甫

喜ヶ峰森林公園」となる。昭和 5 3 年、第 29 回全国植樹祭がこの地で行われ、その 102 h a の県有林を森林公園として整備したもの。アセビの森など是非訪れていただきたい。

JR土讃線は山田を過ぎると新改川流域の山地をあくせくと東川へと標高を刻み甫喜山のトンネルをくぐり繁藤へと至る。この地に山城が必要であったのは「北山越え」の抜け道として防御することによると思える。

### 甫木(山田郷東川村/p177)

### 「蔦葛はひ松はれてうつぼきの 枯たる後も紅葉をぞ見る」



昭和 8 年(1933)国土地理院 2.5 万地形図「山田」(h p 国土地理院・地図・空中写真閲覧サービス)

# (7) 香美市香北町



『土佐國白湾往来』46は地高帳を引用し韮生郷の村々を「はきの、橋川野、かりやがの、白川、太郎丸、いおろい、下野尻、上野尻、西又、荒川、古井、西峯、あらせ、韮生野、ひのミこ、横谷、中谷、谷相、ほうの木、小川、吉野、ねす、下田、白石、長野、中内、大井平、ひうらこミ、わらびの、長瀬、清爪、伊

野々、日比原、柚木」と物部分となる「やないせ、かぢさこ、安丸、下池、上池、神通寺、くろたい、五王堂、南池、さゝ、大西、窪」とし「以上四十六ヶ村なり」としている。

香北町の区域は、明治の合併で三つの自治体となった。

●暁霞村(あかつかむら/物部川中流右岸/面積36.95km²/総人口1,637人)

白川村・五百蔵村・有川村・荒瀬村・西峯村・川野村・古井村・西又村の区域。村名は村の中央の山・赤塚山 (847m) に由来する。

●在所村(ざいしょむら/物部川中上流両岸/面積 67.83 k m²/総人口 3.908 人)

川ノ内村・谷相村・中谷村・横谷村・朴木村・長野村・大東村・大井平村・梅之窪村・日浦古味村・清爪村・ 日比原村・猪野々村・(ここから左岸域) 永瀬村・蕨野村・白石村・袮須村の区域

●美良布村(びらふむら/主に物部川中流左岸/面積 39.84 k ㎡/総人口 4,956 人)

橋川野村・岩改村・萩野村・太郎丸村・下野尻村・上野尻村・韮生野村・小川村・吉野村・(右岸域)日野御子村の区域。のち西川村の一部編入。

昭和31年(1956)に美良布町と暁霞村が合併し大宮町。昭和36年(1961)、大宮町と在所村が合併して香北町が発足した。

#### 萩野(香美市香北町萩野/33.634680,133.757418)

韮生郷は物部川の両岸に集落が形成されている。明治の合併も右岸と左岸に分けられた。大河・物部川により往来が妨げられる土地柄で、与惣太もどのルートを辿るか悩んだことだろう。明戸峠を越える韮生往還を歩くことにした。

萩野の由来について『美良布文化史』では「元暦、文治の頃萩野勘解由太夫という者が居住し地名となった」と紹介している 47。外から入ってきたものは通常、地元民に同化するため開拓したその地の地名を 冠するものが常套であったように思う。

萩の野という植物ハギに因んだ地名のようでもあるが、地形地名のハケ若しくは剥ぐ(ハグ)が萩に転訛したのではないかと推考する。香美郡は徳島県境から南西にむけて物部川が太平洋に流下しその流域に集落が点在する地形である。その物部川・萩野川・中西川・西の川・香宗川の川筋、秋葉山山系(三宝山山系)・熊王山山系・月見山山系など山筋の南西方向の地形に対し、北西方向に横ずれした形状が、香北町太郎丸から萩野川を遡上し西川の文代に越え、別役から香南市香我美町の別役へ、そこから夜須町の羽尾に通ずる線に見られる。萩野の小字に「栗尾」「薬研サコ」「岩ガラ」「ソゲグエ」「鍋倉」と崩壊地名らしきものが多いのはこの地形によるものか。

この萩野は土佐山田町境にあり字名である「休場」から「国木谷」に入り「ヲソ越」「タカノス」「松葉」「坂ノ谷」と登りつめると「明戸」となる。明戸峠(あかりどとうげ)は韮生郷と山田郷との境で、越えると土佐山田町間へ折り付く往還道である。

昔、韮生の山人が子どもを連れてこの峠に立った。前面に広がる平地やあたりの美しい景色にみとれた子どもは驚いて「おとう、あそこも日本か」と聞いた 48。父親は「まだ知らざったか、お前はまことに山人じゃ。ありゃ鏡野という平野じゃ。日本はまだあの三倍あるぞ」と教えたという。「韮生の山人」と未開の人のような昔ばなしになっているが、恥じることはない。韮生・槙山の山の暮らしはその世界が循環型

社会、持続可能な圏域であった。決して文明の進歩に取り残されたのではなく、江戸の鎖国政策のように 豊かな文化と人間性が育まれた世界であったと思う。

今は車社会で明戸峠を越えることもないがこの子どもが大人になって見えた世界は、土佐山田テクノパークや高知工科大学のキャンパスになっている。

#### 萩野(韮生郷萩野村/p131)

### 「立かへりまた来て訪はんあかず見る 色もゆかりの萩の錦を」

「立かへりまた来て訪はん」とあることから明戸峠の往来であったろう。飽かずに萩の紅葉を愛でた歌ではあるが、萩野の地名にかけた創作ではなかろうか。

# ・大川上美良布神社(香美市香北町韮生野/33.649931,133.783929)



土佐式内社 21 座(香美郡 4 座)の一つで韮生郷の 総鎮守となる由緒ある神社である。社伝によれば雄略 天皇の御代 (465-479) に創建されたというが確かな 記録はない。

高知県無形民俗文化財に指定されている「おなばれ (神輿の神幸)」の行列を順に書くと発先道払(みちは らい) 一太鼓(たいこ) 一獅子頭(ししがしら) 一真 榊(まさかき) 一鼻高面(はなだかめん) 一挟箱(は

さみばこ)一羽熊(はぐま)一鳥毛(とりげ)一台笠立傘(だいがさたてがさ)一指揮(ざい)一真法螺貝(ほらがい)一碁盤(ごばん)一棒打(ぼううち)一楯板(たていた)一御銃(おつつ)一弾丸筥(たまばこ)一弓(おゆみ)一鉾(ほこ)一薙刀(まぎなた)一旗(はた)一金幣(きんぺい)一辛櫃(からひつ)一楽太鼓(がくたいこ)一竜笛(りゅうてき)一篳篥(ひちりき)一鳳笙(ほうじょう)一御太刀(おんたち)一禰宜(ねぎ)一鼻高面(はなだかめん)一駕籠丁(かごかき)一神輿(みこし)一駕籠丁(かごかき)一長柄傘(ながえのかさ)一発子(おこしだい)一宮司(ぐうじ)一神職雇神職一町村長・氏子総代浦安舞奉納舞姫一神馬(しんめ)一供馬一稚児行列となっている。11月3日が川上様の秋祭り。古式にのっとった「おなばれ行列」をみてはいかが。

神社の鎮座地は美良布ではなくて韮生野となっている。韮生野は今では香北町の大字の一つとなっているが物部川の中流域から西熊渓谷の上流域までを韮生郷と呼んでいた。『南路志』には韮生郷の 47 カ村を記しているが一時は土佐山田町佐竹も韮生郷であったが元禄 16 年 (1703) 佐岡村に入ったと『韮生一統記』に書いてある。

韮生と美良布の音が似ている。『南路志』に「韮をミラというは古音にて此地名も古へはミラフといひし」とある。いつごろから韮生と呼ばれたかは明確ではないが仁明天皇の承和8年(841)8月に美良布神社の神名がみえているので、ニロウがミラフに転訛したとすれば、それ以前からの名称であろう。『地検帳』には「韮生谷」がみえ、現在の香北町(西川と岩改を除く)と物部村上韮生川流域(大栃を含まず)がこれに含まれると『香北町史』(2006年版、p48)に記してある。だだし、逆に大川上美良布神社にちなんで「ビラフ」の地名が生まれその音便「ビロウ」が転訛して「ニロウ」になったという説もある。

# 大山川美良布神社(韮生郷韮生野村/p 135) 「数あまた曳しめ縄に願ふ事 おほ川上の社とは見る」

#### ・日野(香美市香北町日ノ御子/33.656835,133.783693)

『校注土佐一覧記』の著者、山本武雄氏も「日野」がどこを指すのか決めあぐねていた。物部町仙頭の日の地集落、槙山川桑ノ川上流の日の地集落、香北町日ノ御子地区の三ヶ所をあげ、道順から考えて物部町仙頭地区の日の地集落(国道 195 号線日の地トンネルを抜けた仙頭大橋の下流右岸域)だと推定している。

日野地名と同じように日浦、日野地、日向など、 山間で北に山を背負い南面に開けた日のよくあた る小平地な土地柄を名づけたものである。香南市香



我美町舞川の日向川、大豊町日浦、本山町北山字ヒノヂ、土佐町田井字日之地、越知町鎌井田日ノ浦、佐川町東組字日ノ地、仁淀川町日浦、土佐市永野の日ノ地、梼原町中平の日ノ地、四万十町日野地、四万十町久保川の日の地など字地名を入れれば書ききれないほどである。日差しに恵まれる集落は田畑の実りにも人の暮らしにも有難い。

香北町の日ノ御子(ひのみこ)は「ひの見こ」「日野御子」「日御子」などとも書かれた古い地名。安徳天皇伝説もある。土佐に落ち延びた安徳天皇がこの韮生の地で皇子を生んだ。皇子がやがてこの地に移ってきたことから天子を日にたとえ日の御子と申し上げ、その後地名となったというものである 49。

### 日野 (p132)

### 「秋ちかくなりぬと見えて草の葉に 宿る夕日のかげも露けき」

与惣太は日野について詞書もなく歌にも地名らしきものはない。 槙山を訪ねて魅かれる景観は影仙頭や 影山崎である。 与惣太が詠んだ場所を影仙頭としないで日の地(日野)とするのは不自然である。



#### 長野(香美市香北町永野/33.664648,133.813305)

人口統計:1743年/588☆1960年/677☆2018年/375

物部川北岸に河岸段丘が長く2kmも続く地形地名の「長野」だろう。ナガ(長・永・那賀)には、動詞ナガル(流)の語幹として傾斜地やナギ(薙)が転訛した崩壊地名の意味する場合もあるという。『地検帳』には永の村とある。『元禄郷帳』には長野村とあり、当時は両方の漢字をあてたのだろう。小村は永野・永岡・中野・谷内がある。

#### 長野(韮生郷長野村/p131)

### 「小男鹿の妻恋わびて秋の夜の 長野の原に音をや鳴らん」

「ぴーひー」という高い鹿の鳴き音が、深い闇夜の山間に渡っていく。地形図では県営吉野ダム湖畔の 北側右岸に河岸段丘が二段にわたって広がる田園風景の永野、ご多分に漏れず鹿の食害にあっていること だろう。と思い訪ねてみれば古民家風のカフェや特別養護老人ホームや郵便局やタクシーや病院まである 町の佇まいだ。

#### ・白石古城(轡城:香美市香北町白石/33.682157,133.845770)

与惣太は白石の古城を訪ねている。別名轡城 (くつわじょう)。詞書に「天正中山崎藤太夫居 之」とあるのみで歌は詠まれていない。山崎氏の 祖先は摂津国山崎に住んでいたので姓を山崎と した。白石城を築いた萩野氏滅亡後に豊岡八幡 宮の宮司からこの城に移ったという。

『地検帳』には「影古味ノ村」と「白石ノ村」とに二分されていたと書かれているが白石の字図をみても影古味村は不明。明治9年に二段の河岸段丘となるこの地の下段にある「下夕田村



(しもただむら)」と合併し白石村となった。地図には下田・和田・府内の地名がある。

### ・蕨野(香美市香北町蕨野/33.684720,133.845341)

人口統計:1743年/100☆1960年/116☆2018年/23

どうして与惣太は蕨野を詠んだのか。不思議なくらい 山いっぱいの普通の集落である。寛文7年(1667)の郷 村石高には「原比野」とある。

ここから中谷川を上りトンネルをくぐると物部である。庄谷相から拓を下に見ながら塩の道を大栃に向かうとタオになったところがあり朽ち果てた茶屋(臼杵店屋)がある。丁度ここがトンネルの上となる。

蕨野の全図をみると轡城(白石城)の南側に飛地がみ



られる。三等三角点の琴平山(425.9m)の大字・拓との境辺りと思われる。字名に「イチノタニ」「クツワダニ」「タビカタ」とある。イチは巫女の佾とも読める。轡(くつわ)の別名は姒・銜(くつわ)で遊女屋を意味する。ここは塩の道の途中で「拓店屋跡」のあると塩の道の由来の看板にある。車社会では考えにくいが山中の往還は賑わいがあっただろう。

#### 蕨野(韮生郷蕨野村/p 131)

### 「うき事を身につむからに早蕨の 下にもゆるもあはれにぞ見る」

香美郡を旅する与惣太が詠んだ歌は秋が大半であるのに、この蕨野の歌は「早蕨(仲春)」で、長瀬の歌は「桃のさかずき(春)」で、春に詠まれた歌となる。対岸の伊野野(猪野々)、長野(永野)、日野(日ノ御子)、佐野で詠んだ歌などはそれぞれ秋である。物部川には渡しはあるものの、昔の往還は左岸東岸にそれぞれ設えていた。与惣太は韮生の地を二度訪ねたのではないか。

### 長瀬(香美市香北町永瀬/33.701627,133.857830)

人口統計:1743年/192☆1960年/114☆2018年/25

白石、蕨野、長瀬と続けざまの詠地である。

昭和31年(1956)に竣工した永瀬ダムのお膝元、左岸が永瀬でダムを少し下ると南西にまっすぐ流れる瀬となる。この長い瀬が地名の由来であろう。

#### 長瀬(韮生郷永瀬村/p 132)

「言の葉はかきながせども岩間行 水にぞよどむ桃のさかづき」



#### 伊野野(香美市香北町猪野々/33.705023,133.854868)

人口統計: 1743年/623☆1960年/840☆2018年/165

吉井勇は「寂しければまだ夜明けぬに戸を繰りぬ 猪野々の里の深霜のいろ」と 3 年ほど暮らした猪野々を詠んでいる。渓鬼荘を建てたのは昭和 9年(1934)、今ではこの山里の地に吉井勇記念館も建てられその脇に移築されている。

『土佐州郡志』には「伝へ云フ古へ伊野々常心ト 云者ノ此村二居故二名」とこの地に開拓者として 住みついた伊野々常心の名字が由来という。地名 にしたという開拓者の名は「猪野」である。そんな



関係で猪野の常心が伊野々常心と呼ばれそれが地名の伊野野(猪野々)になったというのか。

地名を理解するうえで「の」は難解である。例えば「藤原鎌足」「平清盛」「源義経」は「ふじわらのかまたり」「たいらのきよもり」「みなもとのよしつね」と読み、古の人は姓と名の間に「の」を入れて読むと教えられた。正確に言えば天皇から下命された藤原・源・平といった血縁集団を示す「氏(うじ)」については、氏のあとに「の」を付け、職業・職能を示す称号としての「姓(かばね)」については「の」を付せず

にそのまま読むという氏姓制度のルールがある。そう理解すれば猪野は氏ではないので「の」を付けることはないので伊野々に転訛するのは不自然と言える。

また、猪野々が、「猪」が棲む「野」に連体系助詞の「の」を間に加え、漢字表記として猪野々となったとも考えられるが、しっくりこない。

それでは猪野々の「野々」は何を意味するのか。全国に分布する「○野々」地名を拾って検証してみることとする。

全国の「市野々」地名は、山形県米沢市市野々、山形県新庄市市野々、山形県尾花沢市市野々、山形県小国町市野々、福島県喜多方市市野々、千葉県木更津市市野々、千葉県いずみ市市野々、新潟県糸魚川市市野々、福井県永平寺町市野々、和歌山県那智勝浦町市野々、兵庫県篠山市市野々、熊本県菊池市市野々、宮崎県都城市市野々、鹿児島県霧島市市野々があり、高知県では土佐市・黒潮町・四万十市・土佐清水市に分布する。

また「田野々」地名は四国に多い。三重県熊野市田野々、香川県観音寺市大野原町田野々、徳島県三好市田野々、徳島県上勝町田野々があり、高知県では南国市・梼原町・四万十町にある。その他の高知県下の野々地名は当地「猪野々」のほか「安野々(大豊町)」「沖野々(大豊町)」「堂野々(佐川町)」「襟野々(佐川町)」「宮野々(梼原町)」「姫野々(津野町)」「韓野々(中土佐町)」「宮野々(中土佐町)」「古味野々(四万十町)」「馬野々(黒潮町)」がある。

「ノノ・ノーノー」について巫女研究の第一人者の中山太郎は『日本巫女史』50で「信州の北部では巫女をノノーといっているのに反して、南部ではイチイといっているという」と述べ「信州は古くから巫女の名産地。信州では口寄巫を一般にノノウと呼び、神社に属して神楽を奏する巫を鈴振ノノウと云ふ」と日本第一の巫女村である禰津村のノノウ暮らしについて詳しく述べている。また、柳田國男は、幼児語で月をノノサン、仏菩薩をノノサマなど各地の例を引いて「例えば山形県の米沢地方では、ノノサマは仏菩薩だが、ノノは書物であり、ノンノといえば佾のことである」「沖縄では花がノウノウ、肥後の葦北郡でも花をノウノウ又はナナ、同球磨郡には美しいをナナカという形容詞も出来て来て、伊豆新島でも供花がノンノウであるといふ・神仏などを拝む人の言葉が常にナウナウを以て始まる」51と述べている。ノウノウが単なる幼児言葉や方言だけでは説明できない古い言葉のようである。高知県の幼児言葉に「ノーノーサン」がある。神様仏様に手を合わせてお願いする前の呼びかけ言葉である。『高知県方言辞典』には「の一の一」の項に「【幼】神様・仏様。梼原・中土佐・窪川」とある。

『地名用語語源辞典』(楠原・溝手)は「のの[篦、野々]」として項を設け「①ノ・ノ(助詞)~という 地名②巫女に関する地名か[鏡味]。信州では巫女のをノノということから。③ヌノの転もあるか」と説明し、 解説では、はっきりしない地名の一つと結んでいる。

また片岡雅文氏は『土佐地名往来』(2007年9月25日付高知新聞夕刊)で四万十町の田野々をとりあげている。「田野々村は、中央に丘陵(森駄場)を残し、旧河道跡に平地が開けた地形であり、地名の『たのの』は『たなの』がなまり変わった言葉で、段丘のある開き地に由来」と『大正町史』を引用し、四万十川の特徴である環状蛇行跡の段丘"棚の野"が転訛したものと現地を訪ね結論付けている。連体系助詞「の」と理解なら、この地に熊野から移り住んで熊野神社を勧請した田那部氏の野が田那の野になり田野々に転訛したとも考えられる。

先の高知県内の事例のように野々の前に来る文字「市(佾)」「田」「姫」「宮」「槙」など神仏に関連する 文字のように思える。この地の猪野々は「イツノノ(佾野々)」が転訛して猪野々となったのではないか。 京都府福知山市の猪野々、兵庫県朝来市生野町猪野々との関連を含め検証したい。

#### 伊野野(韮生郷伊野々村/p137)

### 詞書「此里に宿し時落葉混雨といふ題をまうけて」

詞書があるだけで、本歌は写本である図書館本系・広谷本系の双方に載せられていない。『校注土佐一覧記』の著者である山本武雄氏は未だ発見されていない『土佐一覧記』の原本に期待を寄せる。

永瀬から猪野々に架かる橋が新神賀橋。神賀山は平家伝説の山で猪野々の奥山である。修験の山・高板山と御在所山が一直線に並ぶのは不思議な世界だ。



森下画伯の絵地図「豊潤の森・麗し三嶺」(hp四万十町地名事典に全作品公表)

### (8) 香美市物部町

香美市物部町大栃は永瀬ダム 湖畔に市街地が広がる旧物部村 の中心地。ここから物部川本流域 の槙山地域(大忍庄槙山郷)と支 流の上韮生流域の上韮生地域(韮 生郷)の二つに分かれる。物部の 新しい観光パンフレットも「伝説 の扉(上韮生編)」と「神秘の扉(槇 山編)」の二つがあり、「山々にか かった霧は刻々と表情を変え、ま るで来るものを試しているかの ようである。一歩、山の中に足を 踏み入れると、そこには"何か" が存在するかのような感覚にな る」と書かれている。



物部には秀麗な山容を誇る三嶺(さんれい/1893m)をはじめとした阿波境の山稜が登山者の人気のスポットがある。この奥山には至る所に神々が宿り、平穏な山の日常と深い山の気配は「いざなぎ流」をはじめとする独特の文化が形成されている。柳瀬の平井集落や影仙頭の山村景観は自然への祈りを感じさせる。パンフレットにはこうも書いてある。

「ようこそ 霧と神秘に包まれた、ワンダーランドへ」

### • 被山(槇山:香美市物部町/33.697485,133.899715)

人口統計(旧槙山村): 1743 年/4,576☆1960 年/11,052☆2018 年/1,266

『地検帳』の一つ「土佐国香美郡大忍庄地検帳事」 (天正 16 年)の表紙に槇山ノ内として石内ノ村、専 当村、清遠、押谷、小浜、禰キヤ、岡ノ内、別やく、 イチウ、別府、庄谷間、中谷川、頓定、大トチノ村、 柳ノ上ノ村とある。『物べ村志』には地検帳に見られ る槇山のヤシキや登録人別に反別とその村の四至・ ホノギをまとめているのでこの段では省略する。「山 間僻地まで丹念に開発されていたことが極めて明 瞭」と編者の松本実氏は述べる。藩政時代は槙山郷、



明治 22 年(1889)に 14 か村が一つになり香美郡で一番大きい槙山村となった。槙ノ山、柀山とも書かれる。

岡内幸盛氏の『被山風土記』には「槙ノ山ト云地名ハ山々二槙ノ大木多アリテ槙ノ山トハ号シナラム今

遠キ山中二槙ノ古株幾ラモ残リテアリ」と記して槙の木が地名の由来としている。『四国樹木名方言集』52によると犬槙(イヌマキ)を東洋町ではオトメとか単にマキと呼ばれ、高野槙(こうやまき)をホンマキという。『民俗地名語彙辞典』ではマキについて①屋敷林②巻、間木、牧。マキは同族、同族集団を表す古い語で、古代の民族、中世の一家一門、近世の本家・分家など同族関係にあるものがマキ。また村落の共同作業をもいう③地名例としては小平地にあるものが多い④槙のつく地名の所は地すべり、土石流が起こる土地のよう。土石流が地物を巻き込んで流下するさまをみてマキ地名とした。と書いている。高知の方言にマクルがある。山で薪を拾うとき、その材料を山上から山下へ順に転がして集める意で、転がす・捨てる・たたむといった行為にあたる(『高知県方言辞典』)。急峻な山峡の槙山には、焼畑や狩猟、山仕事といった山の暮らしを象徴する「マクル」が似合っている。

#### 被山(大忍庄槙山郷/p119)

#### 「郭公初音はひとり聞とだに 告やる方もなき山の庵」

『土佐一覧記』には「郭公」の和歌が 21 首詠まれている。次に多い鳥が鶴の7首であるからいかに多いかが理解できる。ただ、当時はホトトギスのことを「郭公」としているものがあるという。ホトトギス(不如帰・時鳥・杜鵑・子規など)は1首もないので「郭公」は、カッコー(閑古鳥)でなくホトトギスではないか。鳴き声は「テッペンカケタカ」「特許許可局」と聞き取ったりしているが夕方によく鳴くのでご当地方言の「ごっちょうたべたか」が馴染んでいる。

托卵で有名なカッコーは矢筈山や三嶺など高山ではよく聞くことができる。

### 小松神社(香美市物部町/33.740159,133.975031)

人口統計(別役): 1743年/188☆1960年/256☆2018年/5

どうして道の下に小松神社が鎮座するのかという疑問に、『韮生物語』は「昔一人の婆さんが御神体を負うて別役の須道(すどう)に辿り着き、御神体をおろしこの地に鎮め祭ったところ、御神体は光を放ち飛んでいきはるか下の谷の岸にあり、どうしても動かないためこの地に祭ることになった」と書いてある。

小松神社は香美郡にある式内社 4 座の一つ。小松の音は功満王(こうまんおう)のコマが転訛してコマツとなり、小松氏一族が祖先として祭ったものと言われている。



功満王は古代伝承上の渡来人で秦氏らの祖とされる。この小松の名字は県東部では一番多く、土佐山田、香北、物部、夜須、香我美、野市と大忍庄、韮生郷、山田郷では第一位、安芸市でも第一位である。

小松神社への道は国道 195 号(土佐中街道)を大栃から岡ノ内地区まで進みそこを左折、国道の上を走る市道を別役まで歩くと小松神社の鳥居が見える。社殿はここから 337 段の石段を下ったところである。鳥居の端に石碑があり「昭和 31 年 (1956) 槙山村別役集落 52 軒 300 人位の人口同年上韮生村と合併物部村に(中略)昭和 63 年別役集落解散」と書いている。現在では氏子会を結成して出身者が祭りをおこなっているとのことである。

### 小松神社(大忍庄槙山郷別役村/p 119)

#### 「千代よろづ御代ながかれとゆふだすき かけて小松の神に祈らん」

詞書に「此社は大忍庄柀山別役村にあり。小松氏の祖神なりとぞ。二十一座の一社なり」とある。この槙山の奥地まで与惣太は足を延ばしているようだ。

小松神社が鎮座する別役集落。今では総人口5人となっている。この別役地名は高知県に分布する地名で東洋町野根の別役、南国市三畠字別役、安芸市東川の別役、香美市香北町西川の別役、香南市香我美町別役がみられる。桂井和雄氏は別役地名について「別役は別府、別符、別枝と同じように新開拓地の意味で、荘園を作るために必要な太政官が発行する官符(特許状)をもって新たに開拓された荘園を別の符と呼ばれたのだろう」と述べている(『おらんく話』 p 199)。この新たな荘園を大忍庄では別役と名づけられたのか。ただし、物部には別府(べふ)もある。

### · 葛橋(香美市物部町/33.720324,133.890681)

「祖谷のかずら橋」が今では代名詞にもなっているが、 奥山の急峻な渓谷の往来に必要な設えであったことだろ う。

韮生・槙山の集落は山影の谷筋にはなくそこから登った山の中腹の緩傾斜地にある。槙山には「ホイホイー里」という言葉がある。ホーイと呼べばホーイと応えあえる向かい合いの集落。それでも谷に降り登り返せば一里はあるという意味である。かずら橋は安全・便利な往来に欠かすことのできない橋で、上韮生には中ノ上、笹、五王堂が共同で一カ所、安丸に一カ所、柳瀬に二カ所の一本橋があり、槙山には大栃、押谷、岡ノ内にそれぞれかずら橋があったという。それは地元の人々の労働奉仕により維持されたものである53。



### 葛橋(大忍庄槙山郷/p 135)

#### 「世を渡る習ひは誰も語りけり 葛の橋を通ふ杣人」

与惣太は詞書に「此橋は韮生の山川にかけたり」と書き始め、蔓橋の設え方、渡る様子など記し「爪木 (つまぎ/薪) こりて此橋を通ひ日日の業とし侍る」と結んでいる。大栃の葛橋の図は皆山集にも所収され ている。

### •**笹**(香美市物部町/33.785898,133.881304)

人口統計: 1743年/254☆1960年/299☆2018年/10

上韮生川の上流、五王堂の分岐からさらに北へと支流の笹川を進む。昔あった笹温泉も今は廃屋と化している。谷川沿いの土居番から走らせば明賀集落を過ぎ林道を登れば徳島県境の「矢筈峠(通称アリラン峠)」となる。ここから西と東にむけ二つの登山道がある。西へ稜線を進めば土佐矢筈山(1608m)から京

柱峠へ縦走道、東の登山道に進めば綱附森(1643m)から三 嶺(1893m)への稜線山歩となる。

平家伝説の残る笹ではあるが、一ノ瀬橋近くで出会った老人は「廃屋となる家がひとつまた一つと増えている」と言う。通りすがりの者にも笑顔で迎えるのは人恋しさからだろう。宮地たえこの小説『槙山のそら』54の「峠を越えて」に、上韮生の山で生きる営林署の様子、昭和の暮らしが描かれているが、土佐の輪伐法のしきたりを忘れ「昭和」という一時代で



すべての山を収奪してしまった。山は国の都合に合わせた装置ではない。100年の森は100年そこに暮らす人とともに育まれるもの。木地師は奥山の八合目以上を利用できるし、アイヌは山の一部を祈りながら利用してきた。山の所有権から利用権へ、と思っていたら森林経営管理法が本年どさくさ施行となった。所有権と管理権の分離と思っていたらそうでもない。山で持続的に暮らす自伐林業を育成する目的と思いきや、その逆で大規模林業経営者と持続性のない大規模伐採を進めているようできな臭い。アイヌ的な生き方が、山を育てる。

笹は山の暮らしを考えさせられる場所である。

地形図を見れば「ナナヘツイ」とある。ヘツリは絶壁のヘリや川岸などようやく通行できる険しい道の 意となり信越地方でよく使われる。その上の字名が「潰河」とあり「潰野々」もある。急峻な渓谷に険しい 道を設えたものかと思っていたら漢字で「七竈」とある。関西では竈をへっついと呼ばれることからであ ろう。安徳天皇が7つの竈を作って食事をしたという昔ばなしがあるが真意は分からない。

また、笹の字名に「カナワギ」「中番カナワギ」がある。「金輪木」は高知県下の山間部に分布する地名(香美市物部町根木屋・梼原町越知面永野)で、類似の「金輪松」は安芸市穴内・大豊町西峰・本山町坂本・いの町小川津賀才・津野町力石にある。金輪は伐採木の両端の木口に鉄製の金の輪をはめ込んで木場落としをする道具で、鉄やフイゴなど鍛冶道具を持ち込み現場仕立てをしたという。せっかくの良材の木口が割れたりそげたりしないよう保護する道具である 55。山国土佐ならではの地名である。

### 笹 (韮生郷笹村/p 138)

### 「時雨行なごりの露の玉笹に そよぐ嵐の音もさむけき」

与惣太は笹を「此所を時雨の晴間に過行とて」と記し詠んでいる。明賀まで進んで笹越え(久シ峯)から 大豊を目指したのであろう。

# 5、資料

# (1) 年表

香美郡に関する主な出来事と与惣太が旅した年代を中心に次の年表とした。

元号	西暦	事項	備考	
7世紀		香我美郡成立		
8世紀		条里制地割建設	配流の制、土佐は遠流地	
大同2年	807	空海が最御崎寺・金剛頂寺・大日寺等を建立		
承平4年	934	紀貫之帰京『土佐日記』		
貞応元年	1222	土御門上皇土佐より阿波へ遷行		
天正 15 年	1587~	長宗我部検地始まる。天正 17 年終了		
慶長6年	1601	山内一豊土佐入国		
寛永7年	1630	忠義公の指示により佐古郷新野町開拓開始	父養寺用水と三又	
寛永 12 年	1635	手結山にお茶屋建築		
寛永 16 年	1639	山田堰築造に着手。上井・中井・舟入川建設		
正保元年	1644	山田野の新田開発用水建設始まる	1658 舟入川開通	
寛文3年	1663	大道幅 3 間、脇道幅 2 間、枝道幅 1.5 間と規定	1663 野中兼山失脚同年没	
寛文4年	1664	山田堰完成。		
貞享4年	1687	『四國徧禮道指南』遍路ガイドブックが版行		
宝永年間	1704~	『土佐州郡志』緒方宗哲の土佐国地誌		
宝永4年	1707	宝永大地震。夜須笠松流失		
享保5年	1720	川村与惣太貞佳、元浦で誕生		
享保 19 年	1734	『土佐幽考』安養寺禾麿の地誌		
延享3年	1746	『土陽淵岳誌』植木挙因の博物誌		
明和9年	1772	<b>与惣太土佐巡国(第1回目~安永4年)</b> 与惣太 52 歳		
安永7年	1778	『磯曲の藻屑』谷真潮の土佐東部巡察日誌		
天明7年	1787	正月 13 日川村与惣太没(享年 67 歳)		
天明8年	1788	『東郡巡見日記』葛目彦左衛門の記録		
文化5年	1805	伊能忠敬土佐国を測量		
文化 12 年	1815	『南路志』編纂。一覧記から 18 首採録		

### (2) 高知県の滝

日本人は滝が大好きだ。水しぶきの清涼感、滝壺にひそむ神秘性、周囲の新緑や紅葉との調和性などいくつもの要素が深みとなって整い「美しい景観」と思うのだろう。また、滝に打たれ冷たい流れに身を浄める信仰の地でもあったりする。魚にとってはこれ以上先には遡上できない壁でもある。「魚留」の地名は各地に刻まれている。

サンズイに竜(りゅう・たつ)の「滝」の漢字をあてるが、古書体では「瀧」が用いられる。その滝を数える単位は「瀑」となる。西日本では断崖をタキと呼び、山中のザレ地や水のない崖を「滝山」などの地名がみられる。また、タケは岳として高い山をあらわす。身の丈ノタケ、竹の子のタケ、人ダカリなど高みを表現する言葉である。古語では「タルミ(垂水)」が垂れ落ちる水をあらわした言葉として使われていた。伊豆の河津の七樽など「ダル(樽)」をあてた地名は全国にある。

与惣太が訪ねた滝は、二見滝(室戸市元)、琵琶滝(琵琶ヶ滝)、滝本滝(毘沙門の滝)、裏見滝(翠ヶ滝)、 剣が滝(小金滝)、清水滝(程野の滝)の5瀑である。滝の一般的な定義は「流水が急激に落下する場所で 落差が5m以上で、常時水が流れているもの」だという。

高知県内の有名な滝の一覧を示す。(注) 瀑名の太字が与惣太の訪ねた滝

瀑名	所在	高さ等	備考
琵琶ヶ滝	奈半利町加領郷	15.6m	琵琶の名に恥じない心地よい響きの滝音
不動の滝	北川村小島	18m	丸淵滝・大タビ滝・赤タビ滝の三滝の総称
大釜の滝	香美市夜須町羽尾	20m	駐車場から5分ほど遊歩道を歩く
轟の滝	香美市香北町猪野々柚ノ木	82m	日本の滝百選。四季を通じた景勝地
大荒の滝	香美市香北町大東	40m	二匹の龍が大竜巻に乗り舞い降りた伝説
びしゃもんの滝	香美市土佐山田町北滝本	15m	三滝神社の滝ともいわれる三つの滝
大たびの滝	香美市土佐山田町上穴内	12m	海津見神社の裏手にある
毘沙門の滝	南国市岡豊町滝本	30m	弘法大師も訪れた三段からなる滝
龍王の滝	大豊町佐賀山	20m	日本の滝百選。高知県の名水 40 選に選定
翠ヶ滝	土佐町和田	15m	糸を引くように静かに落ちる裏見の滝
小金滝	大川村川崎	80~100	一直線に流下する美しい四国最大級の滝
銚子滝	大川村大平	25m	小さな大平橋と標示板の右側の沢にある
平家の滝	高知市鏡横矢	30m	三段瀑。平家の落人を祀る貴船大明神が
樽の滝	高知市鏡今井	65m	二段瀑。大樽をゆるがす轟音に由来
程野の滝	いの町清水上分	60~100	4本の滝(東滝、西滝、権現滝、大樽の滝)
大龍の滝	いの町寺川	35m	手箱山の麓。冬場の見事な氷瀑は必見
大樽の滝	越知町越知	34m	日本の滝百選にも選定。県下屈指の名瀑
樽の滝	須崎市上分	37m	裏側から滝を眺めれる裏見の滝
長沢の滝	津野町芳生野乙	25m	滝口はハート型で岩を貫流する「潜り滝」

# (3) 高知の城

与惣太は『土佐一覧記』で89カ所の古城を紹介している。「古城」の詞書は漢文調で城主の名のみであることから当時の書籍を引用したようである。このうち香美郡で古城として項をたてた15カ所(33城)のみ紹介する。

城名	城主	現在の名称	所在地	備考
上夜須尼森城	吉田右近	尼ヶ森城跡	香南市夜須町上夜須字クスダ	
下夜須三ノ城	夜須七郎	下夜須城跡	香南市夜須町出口字城山	
姫倉城	姫倉右近	<u>姫倉城跡</u>	香南市香我美町岸本	月見山
苅谷城	河合越後守	刈谷城跡	香南市香我美町徳王子刈谷	
大忍庄城	国吉五左衛門	国吉城跡	香南市香我美町徳王寺国吉	
山南十万城	田中喜介	十万城跡	香南市香我美町上分十万	
東城	長谷川大上	東十万城跡	香南市香我美町上分十万 318	
堀内城	岩神七郎兵衛	堀の内城跡	香南市香我美町上分 3858	
堀内東北城	入交藤蔵人		香南市香我美町	
岡西城	岩神七郎兵衛	岡城址	香南市香我美町上分 3240	
卯山城	石田嗚呼右衛門		香南市香我美町	
窪田城	中神兵衛		香南市香我美町	
徳善城	工文将監	徳善城	香南市香我美町徳王子 3245	
東川福万村古城	近古福万孫右衛	福万城跡	香南市香我美町福万	
奥西川城	別役左衛門督	別役城跡	香南市香我美町別役	
中西川上城	別役三吉郎		香南市香我美町	
南城	別役三吉郎		香南市香我美町	
北城	延清惣左衛門	延清城跡	香南市香我美町中西川 2905	
正延村古城	正延与兵衛	正延城跡	香南市香我美町正延	
山南城	国吉左五衛門		香南市香我美町	
山南東城	吉田右近		香南市香我美町	
(未記載)	富家刑部	富家城跡	香南市野市町本村 1865	
(未記載)	出羽守秀義	香宗城跡	香南市野市町土居	
(未記載)	細川常陸守	鳥ヶ森城跡	香南市野市町西佐古字鳥ヶ森	
大谷古城	大谷左馬助	大谷城跡	香南市野市町大谷 482	
(未記載)	山田治部小輔	<u>山田城跡</u>	香美市土佐山田町楠目字楠目	
加茂城	西内常陸	加茂城跡	香美市土佐山田町加茂字花代	
談議所城	山田監物	南森城跡	香美市土佐山田町楠目字奥宮	この他5城
上村古城	上村越前守	植村城跡	香美市土佐山田町植字古城北平	
(未記載)	野中肥後守	影山城跡	香美市土佐山田町間字城山丸	

城名	城主	現在の名称	所在地	備考
吉原の古城	丁野帯刀	吉原城跡	香南市吉川町吉原西木戸	
(未記載)	伊野野常心	猪野城跡	香美市香北町猪野々字城ヤシキ	
白石古城	山崎藤太夫	轡城跡_	香美市香北町白石	
(未記載)	馬場惣右衛門	甫喜山氏城	香美市土佐山田町平山	

- ・『土佐国古城略史』(宮地森城著、1935年)は国立国会図書館デジタルコレクションで公開されている。
- ・『土佐の古城』(西山晴視著、1971年)は、『南路志』などの地誌とともに『土佐国古城略史』を引用し、 中世城郭の今の姿(昭和40年代)を記録した「城址探訪ガイドブック」

#### 【註】

1 川村家の系譜によると、当初は『土佐道記』と称していた。原本は発見されておらず、写本が5冊ある。写本それぞれに個性がありいずれが正確かとは言い切れない。山本氏の著書『校注土佐一覧記』は写本の一つ「図書館本系」と「広谷本系」を相互に補完しつつ氏独自の判断で編纂された。

<sup>2</sup> 山本武雄『校注土佐一覧記』1986 年、室戸市教育委員会。与惣太の現存本はなく、高知県立図書館蔵本と広谷喜十郎蔵本の写本を比較しつつ郡別に東から西に向けて地名を項にして上段に与惣太の詞書と和歌を、下段に山本武雄氏の説明と『南路志』等の文献や寛保郷帳の戸数・人数・牛・馬・猟銃等の統計を引用している。

- $^3$  文化 15 年(1818)伊勢生まれ。幕末から明治時代にかけての日本を旅して全てを記録した探検家・松浦武四郎。蝦夷地を幾度も踏査し「北海道」の名付け親でもある。1818 年は伊能忠敬の没年でもあり、丁度 2018 年は 200 年。
- 4 吉田武三編『松浦武四郎紀行集・中』「四国遍路道中雑記」、1950年、冨山房
- 5 近藤日出男『何をたべてきたのだろう-高知の食文化史-』1996年、高知新聞社、p19。別名「大正選り」「幾治ヨリ」ともいわれる。旧大正町烏手で生まれ育った市川幾治が選種改良した香り米である。
- 6 安芸郡の式内社は、室津神社・多気神社・坂本神社で坂本神社は比定社として多気坂本神社(奈半利町)と王子宮(芸西村和食)の二つがある。
- 7 香美郡の式内社は、天忍穂別神社(香南市香我美町山川)・小松神社(香美市物部町別役)・深淵神社 (香南市野市町西野)・大川上美良布神社(香美市香北町韮生野)
- 8 長岡郡の式内社は、 豊岡上天神社 (南国市岡豊町常通寺島)・朝峯神社 (高知市介良乙)・殖田神社 (南国市植田)・小野神社 (南国市岡豊町小蓮)・石土神社 (南国市十市)
- <sup>9</sup> 土佐郡の式内社は、都佐坐神社(土佐神社/高知市一宮)・葛木男神社(高知市布師田)・葛木咩神社(高知市布師田)・郡頭神社(高知市鴨部)・朝倉神社(高知市朝倉丙)
- 10 吾川郡の式内社は、天石門別安国玉主天神社(いの町神谷と高岡郡越知町黒瀬の二カ所が論社)
- 11 幡多郡の式内社は、伊豆田神社(土佐清水市下ノ加江)・高知坐神社(宿毛市平田町戸内)・加茂神社 (黒潮町入野)
- 12 筒井功『葬儀の民俗学』2010 年、河出書房新社、p 168。『長宗我部地検帳』に載せられた「佾給」を示しながらイチ地名を全国に展開し、「一」も「市」もイチ(佾)の場合があるという。式内社の数が不自然に多い地域があるとして、伊豆 92・壱岐島 24・対馬 29 をあげて、イツの地名に関連するという。h p 四万十町地名辞典「「イチ」の付く地名の謎」参照
- <sup>13</sup> 岡内幸盛『柀山風土記』1815年、土佐史談会。国文学研究資料館が山内文庫本をW e b 公開中。
- 14 『定本柳田国男集』第 25 巻「旅行の進歩及び退歩」、p 110
- 15 このページ数は『校注土佐一覧記』による。以下同じ
- 16 『日本民俗文化体系』6巻「漂白と定着」、p 248
- 17 服部英雄『地名のたのしみ』 2003 年、角川ソフィア文庫、p 123
- <sup>18</sup> 筒井功『風呂と日本人』 2008 年、文春新書、p 142。筒井氏は高知出身の民俗研究者。風呂地名については『日本の地名』 p 74、にも詳しい。
- 19 四万十町江師のほか、室戸市市役所前、南国市緑ヶ丘(十市ニュータウン・石土池畔)、四万十町大正 (田野々)、四万十町下津井の5カ所。『校注土佐一覧記』にはその写真が掲載されている。
- <sup>20</sup> 松尾俊郎『地名の探求』1985 年、新人物往来社、p 85
- 21 『土佐国史料集成 南路志第1巻』1990年、高知県立図書館、p 491

- <sup>22</sup> 塩の生産地と奥地をつなぐ「塩の道」交易路。赤岡町から物部町の塩峯公士方神社まで続く道は、住民らにより再整備され 30 k mのウォーキングトレイルとなる。「美しい日本の歩きたくなる道 500 選」。
- <sup>23</sup> 『土佐山田町史附属地図 (土佐山田町史付録)』1979 年、土佐山田教育委員会、 p 174。南海道の 3 ルートについて、史料を示し、多くの研究者の論考をまとめている。
- 24 武内亮『はぐれ馬借 疾風の土佐』2018年、集英社文庫。琵琶湖畔の東坂本で馬借(馬荷運送業)を 生業とする獅子若が土佐へ向かう。室町期の暮らしと土佐の山事情を描く小説。民が必要とする道を開い たのは聖や山伏という。
- 25 『土佐國群書類従第八巻』2006 年、高知県立図書館。所収、p 208
- <sup>26</sup> 『地域資料叢書 17 土佐の地名を歩く・高知県西部民俗調査報告書 I 』 2018 年、奥四万十山の暮らし調査団、 p 110、楠瀬慶太・藤原駿・池内克徳「高知県における歴史資料のデータベース化試論」『高知工科大学紀要』 15-1
- 27 大忍庄は、元は「大里庄」であったが里の崩し字を誤って忍と呼んだことに始まるという説がある。
- <sup>28</sup> 桂井和雄『おらんく話―土佐風物考―』1959年、p162。「海辺地名誌」に所収
- <sup>29</sup> 『皆山集第 9 巻』 1975 年、高知県立図書館、所収 p 45
- 30 山本幸男氏は『香我美の地名考』で「本来のホノギを廃したことの功罪については、ここではふれません」と遠慮して記しているが地名研究者にとって第一級の犯罪行為である。
- 31 山本幸男『香我美の地名考』1999年、p1
- 32 高知新聞連載コラム。2003年4月3日から毎週1回夕刊に連載され現在も続く。高知県下の各地を訪れ地名が醸し出す古の景色を文献から読み解き紹介する「現代版土佐風土記」
- <sup>33</sup> 佐藤省三『改訂版「土佐日記」を推理する』2011年、文芸社、p 54。氏は、高知県在住の焼畑研究家でもある。
- 34 廣江清『長宗我部地検帳の神々』土佐民俗学会、1972 年、p 23
- 35 山本大『高知県史·中世編』
- 36 河野通信『土佐史談』132 号・164 号所収。野市の市町について詳細な研究を発表している。
- <sup>37</sup> 高知市HP<https://www.city.kochi.kochi.jp/akarui/rekishi/index.htm>に高知市広報紙「あかるいまち」掲載
- 38 『赤岡町史』1980年、p90
- 39 吉田東吾『増補大日本地名辞書』1907年、冨山房。日本最初の地名変遷を記録した全 11 冊の大地誌
- $^{40}$  村岡檪斎『日本地理志料』 1902 年、東洋堂。国立国会図書館デジタルコレクションに所収、巻 57-60 の 33 コマ
- 41 礫川全次『左右の民俗学』批評社、2004年。左右の民俗事象について発表された著名な論考をまとめたもの。高知の寺石正路氏の「右得手と左得手」、桂井和雄氏の「"ひだり"考」も掲載。葬制の左ない、左まわり、左前、左膳など「逆さごと」がよく理解できる。
- $^{42}$  安養寺禾麿『土佐幽考』。禾麿は江戸中期の国学者で秦山の門下生(1697-1767)。同書は歴史地理な史料として珍重される。刊本『土佐國群書類従』 2006 年、高知県立図書館。第八巻に所収、p3
- <sup>43</sup> 『土佐山田町史 (p 366)』の山田野地町の段に当時の祭礼分担の記録を引用。当時、町分・郷分に分かれていた。
- 44 『物部川絵図』(寛政元年/安芸市立歴史民俗資料館所蔵)。物部川の下流域、神母ノ木から吉原にかけて詳細に記述。寛政元年夏の堤防決壊箇所が朱書きされている。同館の特別展・絵図の世界(1998年)の図録として刊行された『絵図の世界』の中に「物部川絵図」が収録されている。
- 45 廣江清『長宗我部地検帳の神々』1972 年、土佐民俗学会
- 46 『皆山集』松野尾章行。刊本を高知県立図書館が発行。第8巻・第9巻に『土佐國白湾往来』所収
- 47 土佐地名往来(高知新聞夕刊・2011年4月25日付)では萩野氏の名字由来とともに、韮生郷を人の体にたとえ萩野は脛(はぎ=すね)の部分にあたるので"脛(萩/はぎ)野"としたと紹介している。
- 48 松本実『韮生物語』1981年、p17
- 49 『香北町史』 2006 年、香北町教育委員会、p 601
- $^{50}$  中山太郎『日本巫女史』2012 年、国書刊行会、p 30、p 34、p 270。神和系と口寄系に分けて神子の名称を地域別に説明。高知県では「佾(イツ)」がある。
- 51 『定本柳田国男集』第 20 巻所収「小さき者の声」 p 361-363「子供と言葉」 p 427、ほか多数の「ノ ノ」がある
- 52 『四国樹木名方言集』1936 年、和田豊洲・高知営林局。公務の傍ら四国管内国有林の樹木の方言名を収集した記録集。国立国会図書館デジタルコレクション参照。 h p 「四万十町地名辞典」では全データを公開している。
- 53 松本実『韮生物語』1981年、p96。大栃の葛橋について詳細な記述がある。
- 54 宮地たえこ『槙山のそら』2016年、高知新聞総合印刷。帯書きに「奥物部、槙山の空と川の「昭和

和」は、もう歴史になってしまった。山深くまでえぐられた時代の波濤に生きてきた人々」とある。山の 暮らしが伝わってくる。

55 伊与木定『上山郷(昔の大正邑)のいろいろ掻き暑めの記』1984年、上巻 p 287

### 【参考文献】

#### ○全般

山本武雄『校注土佐一覧記』1986年、室戸市教育委員会

松永美吉『民俗地名語彙辞典 上・下』1994年、三一書房

楠原佑介・溝手理太郎『地名用語語彙辞典』1983年、東京堂出版

『綜合日本民俗語彙』1956年、平凡社

『日本地名大辞典 39 高知県』1986 年、角川書店

土居重俊・浜田数義『高知県方言辞典』1985年、高知市文化振興事業団

#### ○地域史

『高知県史・中世編』1971年、山本大・高知県

『高知県香美郡町村誌』

『夜須町史 上・下』1987年、夜須町教育委員会

『香我美町史 上・下』1985年、香我美町

『赤岡町史』1980年、赤岡町教育委員会

『野市町史』1992年、野市町

『吉川村史』1999年、吉川村

『土佐山田町史(附図共)』1979年、土佐山田教育委員会

『香北町史』1968年、松本実・香北町教育委員会

『物べ村志』1963年、物部村教育委員会

『続物部村史』1975年、松本実・物部村教育委員会

#### ○郷土地誌

『土佐州郡志 上・下復刻版』1983年。刊本を土佐史談会が発行

『南路志』1813年、武藤致和。刊本を高知県立図書館が発行

『皆山集』松野尾章行。刊本を高知県立図書館が発行。第8巻・第9巻に「土佐国白湾往来」所収

『土佐国群書類従』2006 年、高知県立図書館。第8巻に「土佐幽考」「土州淵岳記」「土州名勝記」所収 『天保七年申八月支配中諸指出』1836 年、香我美郡野市。香南市野市図書館所蔵

『高知県集落台帳』1975年、高知県企画調整課

岡内松幸盛『柀山風土記』1815年

松本実『韮生物語』1981年

楠瀬慶太『新韮生槇山風土記』2008年、花書院

(https://catalog.lib.kyushu-u.ac.jp/opac\_detail\_md/?lang=0&amode=MD100000&bibid=1516062)

#### ○地名

『長宗我部地検帳 香美郡上・下』1962年、高知県立図書館

片岡雅文『土佐地名往来』2003年~現在、高知新聞夕刊コラム・毎週掲載

桂井和雄『おらんく話・土佐風物考』1959年、高知新聞社

徳弘勝『土佐の地名』1976年、土佐史談会

徳弘勝著『ふたつの浮津から』1978 年、土佐史談会

山本幸男『香我美の地名考』1999年、香我美町教育委員会

### ○道路・交通

山崎清憲『土佐の道』1998年、高知新聞社

山崎清憲『土佐の峠風土記』1991年、高知新聞社。「笹越え」「手結坂」「四ツ足峠」

### ○城郭

宮地森城『土佐国古城略史』1935年

西山晴視『土佐の古城』1971年

#### 〇宗教

廣江清『長宗我部地検帳の神々』1972 年、土佐民俗学会 『高知県神社明細帳』オーテピア高知図書館 寂本・村上護(訳)『四国徧礼霊場記』1987 年、教育社新書 吉村淑甫『土佐の神ごと』1989 年、高知市民図書館 『いざなぎ流の宇宙―展示解説図録』1997 年、高知県立歴史民俗資料館 『四国へんろの旅―企画展・図録』2011 年、愛媛県歴史文化博物館 真稔・稲田道彦(訳)『四國遍禮道指南 全訳注』2015 年、講談社学術文庫

#### ○地図・絵図

『絵図の世界―特別展図録』1998 年、安芸市立歴史民俗資料館 『土佐山田町史附属地図(土佐山田町史付録)』1979 年、土佐山田教育委員会

#### ○その他

柳田国男『定本柳田国男集』1970年、筑摩書房 『日本民俗文化体系』6巻「漂白と定着」 横川末吉『野中兼山』1962年、吉川弘文館

#### ○主要なWeb

- ・国土地理院・電子国土Web<https://maps.gsi.go.jp/>
- ・国土地理院 地図・空中写真閲覧サービス〈http://mapps.gsi.go.jp/maplibSearch.do#1〉
- ・Google.com/maps/search/高知県香美郡/>
- ・歴史的行政区域データセットβ版〈http://geoshape.ex.nii.ac.jp/city/ 〉
- ・市区町村変遷情報 < https://uub.jp/upd/>
- ・城郭放浪記〈http://www.hb.pei.jp/shiro/tosa/〉
- ・八百万の神〈 https://yaokami.jp/kochi/>
- ・滝ペディア〈 http://www.takipedia.com/#〉
- ・日本の滝データベース〈http://www.ne.jp/asahi/otoma/home/database/db0.html〉
- ・土佐塩の道パンフレット< http://www.city.kami.kochi.jp/map/sionomichi.html >
- ・四万十町地名辞典〈https://www.shimanto-chimei.com/〉

### 1、はじめに

近年、市町村の合併が全国各地で行われ、大きな自治体に合併吸収してもらい財政再建を図る地方白治体がある。財政赤字で悩む自治体の多くが合併を余儀なくされ、地名変更等でできた自治体が何処の県にあるか分からず戸惑う事もある。都市部への一極集中がさらに追い打ちをかけ、農林水産業の衰退や人口減少等で合併編入はやむをえない現状にある。当地高知県もご多分に漏れず、国の財政支援無くして行政運営は困難だ。明治時代に入り大正、昭和、平成と市町村合併は進みどれだけの町村が消えていった事か。合併編入の度に役場は消えていくが、消えた村や町の役場は何処にあったか。

町歩きを趣味にしていた私は、高知市内各地の史跡を歩いて訪ね、市内数箇所で合併碑を目にした事で、 役場跡地に興味を持った。高知市に合併編入した町村役場で旧潮江村(写真1)、旧一宮村(写真2)、旧高

須村(写真3)、旧五台山村(写真4)の4地域に合併記念碑が建立されている。旧小高坂村には合併記念支住(2基、写真5・6)が山ノ端町、大膳町にそれぞれ残されているが、他の地域では確認できなかった¹。地域の中心だった役場の所在すら分からず忘れられてしまうのは忍びない。「せめて高知市合併編入の昭和17年以前の役場でも記憶に残したい」「小さな記憶遺産になれば」との想いで、大正6年以降に高知市と合併した戦前の17町村役場所在地を探索、現地比定したのが本稿である。



図1 戦前の旧高知市 18 町村 (Google マップをもとに作成)



写真1 旧潮江村の合併記念碑(天神町)



写真2 旧一宮村の合併記念碑(高知市一宮中町)



写真3 旧高須村合併記念碑(高須本町)



写真 4 旧五台山村合併記念碑(五台山)



写真 5 旧小高坂村合併記念支柱(山ノ端町)



写真 6 旧小高坂村合併記念支柱 (大膳町)

### 2、高知市合併の系譜

まず、『高知市史』(1973) から戦前の高知市合併の経緯を見てみよう (表 1)。まず明治 22 年に大手筋・鷹匠町・升形・本町・東唐人町・九反田・菜園場町・種崎町・新町田渕・山田町など現高知市中心部の町が合併し、高知市が生まれる。大正 6 年に江ノロ町、大正 14 年に旭村、鴨田村の一部・下島、大正 15 年に下知町、潮江村も高知市に編入。昭和 2 年には小高坂村、昭和 10 年に初月村と秦村、昭和 17 年に朝倉村、浦戸村、御畳瀬村、長浜町、三里村、五台山村、高須村、一宮村、布師田村、昭和 22 年に鴨田村が編入され、計 18 市町村が合併した高知市ができる(表 1)。その後、昭和 47 年に大津村・介良村、平成 17 年に土佐山村・鏡村、平成 20 年に春野町を編入合併し、現在の高知市(面積 309.22 k ㎡)ができあがった。

旧役場跡地はその後も支所として利用された場合もあるが、大正6年の合併から 100 年が経過した今では建物は現存していない。役場跡の碑は残されておらず、合併記念碑と役場跡の場所が一致していないことからその所在を現地で確認する方法はない。

表 1 高知市町村合併の系譜(明治22~昭和22年)

合併年	旧市町村名	合併編入町村
明治22年	高知市	大手筋・廿代町・西唐人町・朝倉町・片町・南新町・南与力町・北新町・八軒町・鉄砲町・鷹匠町・中新町・中島町・掛川町・金子橋・浦戸町・升形・本町・堺町・八百屋町・帯屋町・要法寺町・本与力町・農人町・西弘小路・東唐人町・北門筋・広岡町・永国寺町・囃喉場・北与力町・九反田・新市町・南奉公人町・廿代筋・田渕・菜園場町・種崎町・北奉公人町・細工町・築屋敷・新町田渕・通町筋・紺屋町・水道町・蓮池町・本町筋・山田町・材木町
大正6年	江ノロ町	江ノロ村、大川筋・比島村
大正14年	旭村	旭村
十丁15年	下知町	下知村
大正15年	潮江村	潮江村
昭和2年	小高坂村	小高坂村
и <u>п</u> 711 2 <del>11</del>	秦村	三谷村・秦泉寺村
昭和10年	初月村	久万村・円行寺村・柴巻村・万々村
	朝倉村	朝倉村、十六村の一部(大字宗安寺・行川・針原・上里・領家・唐船)
	浦戸村	浦戸村
	御畳瀬村	御畳瀬村
	長浜町	長浜村・瀬戸村・横浜村・藻洲潟村
昭和17年	三里村	種崎村・仁井田村・池村
	五台山村	五台山村・吸江村・屋頭村
	高須村	高須村
	一宮村	一宮村・薊野村・久礼野村・重倉村
	布師田村	布師田村
昭和22年	鴨田村	鴨部村・神田村

### 3、現地比定の方法

2015年に始めた旧 17 町村の役場跡地の現地比定は、文献調査と現地踏査、法務局での登記調査、古地図(『大日本帝国陸地測量部 明治 33・39・42 年製版』)の確認などをもとに行った。しかし、古地図に記された役場の位置を確定できる文献資料をうまく見つけることができず、自分の調べ方に問題はないか自問自答し、途中中断することもあった。昭和 20 年の太平洋戦争高知空襲、21 年の南海地震津波、45 年台風 10 号による水害等の被害で多くの書物や文庫、古文書等が消失しており、文献探しには苦労した。また、合併編入時の記録は当然あるが、役場の住所地は記されておらず、場所の特定は難しかった。

まず、役場跡地の大方の場所は古い地図を調べることで、目安は付いた。さらに図書館やふれあいセンター、小学校や地元民にも協力ご指導を賜るうちに、地図上の役場は殆んど小学校に隣接していた事が分かった。小学校の記念誌等の資料から大方の場所は判明したが、合併年は江ノロ町が大正6年、旭村・鴨田村(一部下島)が大正14年、下知町、潮江村が大正15年と1世紀近く前のため記録は少ない。中でも江ノロ、旭、下知は特に情報が乏しかった。『大日本帝国陸地測量部』の古地図に記された役場マーク全てが正確とは言えず、各小学校の記念誌といった文献資料や住民の証言、法務局での土地登記調査などから総合的に判断して旧役場跡の場所を比定した。

### 4、17町村役場比定地を歩く

次に17 町村の役場跡の現地比定について説明する。以下、合併順に町村役場比定地を現在(2018年2月)の写真、比定根拠とともに紹介する(表2)。

表 2 17 町村役場の比定地と参考資料一覧

役場名	跡地・ 建物等	位置	現在の住所	参考文献	備考
江ノロ町	江ノロコミュニ ティセンター ※四国銀行愛宕支 店跡地	北緯33.566302 東経133.536383	愛宕町 1 -192	『旧江ノロ公民館のあゆみ』 『私の江口帖』『江ノロ小学校 百年のあゆみ』	元土佐婦人会「三葉寮」 ※浜川金兵衛氏私有地
旭村	中須賀町自治会公園周辺	北緯33.557755 東経133.509700	中須賀町107-110	『旭小学校の百年』	JR旭駅前東と記録があるが、明確な資料は見当たらない。渋谷内科医院周辺、『旭小学校の百年』 の写真を参考に判断した。
下知町		北緯33.559432 東経133.554327	中宝永町4-9	『土佐電鉄八十八年史』	『土佐電鉄八十八年史』の写真と 法務局での土地登記調査で確認。 現在保育園跡地は集合住宅になっ ている。
潮江村	高知市消防団潮江 分団屯所	北緯33.551716 東経133.541785	塩屋崎1-5-12	『潮江村誌』	消防分団の隣、潮江公民館・潮江 西の丸公園前。絵図および法務局 での土地登記詞査で確認。
小高坂村	高知市小高坂会館	北緯33.558877 東経133.523819	大膳町1-30		小高坂会館内に関勉氏の撮つた写 真が残してある。法務局の土地登 記調査でも確認。
秦村	高知市消防団愛宕 分団奥 ※秦小 学校児童クラブ	北緯33.577840 東経133.535149	愛宕山18(秦小学 校)※愛宕町18-1	『秦小学校の百年の歩 み』	
初月村	J A高知市初月支 所駐車場	北緯33.574920 東経133.518106	万々387-2	『高知市立初月小学校創 立百周年記念誌』『郷土 資料』(初月小発行)	初月小学校前の久万川柿内橋横
朝倉村	朝倉小学校内プー ル	北緯33.546769 東経133.487685	朝倉本町2-11-20	『母校百年 朝倉小学校』	
浦戸村	桂浜公民館	北緯33.498852 東経133.568253	浦戸274-9	『浦戸小の百年』『吾南 の名勝』	桂浜排水ポンプ場隣奥、新浦戸大 橋の真下
御畳瀬村	高知市消防団御畳 瀬分団屯所	北緯33.504784 東経133.556156	御畳瀬249-2	『ふるさと御畳瀬』『吾 南の名勝』	御畳瀬の大時計・ふれあいセンター等 がある
長浜町	長浜小学校プール 南東、高知市防災 倉庫	北緯33. 499132 東経133. 546329	長浜4811(長浜 小)、長浜4727-3	『百年のあゆみ 長浜小 学校』	高知市防災倉庫の前に支所の門柱 が残る
三里村	高知市消防団仁井 田分団車庫	北緯33.517249 東経133.579352	仁井田1536-5	『三里地区史跡報告』 『目で見る三里のことど も』	道路反対側に仁井田神杜の参道、 鳥居がある
五台山村	五台山小学校	北緯33.543284 東経133.579196	五台山3371	『ふるさと五台山 五台山・高 知市合併50周年記念誌』	五台山ふれあいセンター前に合併記念 碑ある
一宮村	一宮ふれあいセン ター	北緯33.583722 東経133.569224	一宮中町1-5-20	『一宮未来に翔る 一宮 村・高知市合併50周年記 念誌』	ふれあいセンター敷地内に合併碑 がある
高須村	J A高知市高須支 所	北緯33.559657 東経133.580725	高須本町4-9	高須小学校蔵「町内地 図」	JA前に合併碑がある
布師田村	J A 高知市布師田 支所	北緯33.583434 東経133.595273	布師田1616-1	『布師田小学校百年のあゆ み』『ふるさと布師田』	
鴨田村	鴨田小学校プール 東南側	北緯33.546465 東経133.507919	鴨部1214	『鴨田教育資料篇』 『鴨田小百年誌』、鴨田 地区町内地図(個人蔵)	中山正男氏の宅地も旧役場跡地の 一部と思われる。

# (1) 江ノロ町(図2、写真7)

役場跡地は、明治 42 年の古地図(図 2)から推測すると、国道 66 号沿いの江ノロコミュニティセンター(写真 7)と隣接する四国銀行愛宕支店等を含む辺りに比定できる。江ノロ小学校の記念誌『江ノロ小

学校 百年のあゆみ』に記述されている数人の回顧録の文章から場所を推定すると、中水道地域を含む場所に江ノ口小学校があり、その門の東隣に江ノロ町役場があったようである。跡地は一時、土佐婦人会の三葉寮(浜川金兵衛氏私有地)となっていた。



図 2

写真7

### (2) 旭村役場跡地(図3、写真8)

明治 42 年の地図上(図3)では大まかな位置しか分からなかったが、JR旭駅前にあるJA旭販売所・毎日屋の東側に「旭尋常小学校」と「旭村役場」があったことが、記念誌『旭小学校の百年』の中の写真から分かった。尋常小学校、役場ともに現地に痕跡はないが、地元の証言等も踏まえ、跡地は中須賀町自治会公園辺り(写真8、渋谷内科医院周辺)であると推測される。『旭小学校の百年』には、作家・田岡典夫氏らの思い出話から、学校の存在は確認できるが、役場に関する記述は見当たらない。資料的な裏付けがなく、確認出来る資料があれば是非提供していただきたい。





写真8

### (3) 下知町役場跡地(図4・5、写真9)

明治 42 年の古地図(図4)など複数の地図で役場の表記場所が異なり、判然としなかったが、『土佐電鉄八十八年史』記載の絵(図5、大黒竹夫画)から電車通り北側に下知町役場があり、その裏に下知尋常小学校校舎があったことが分かる。また、当時の土地登記も確認した上で、役場跡地は土佐電交通電停「中

宝永町」北側の元下知保育園周辺(写真9、株式会社ヤフー高知センターと三谷組の裏)に比定した。



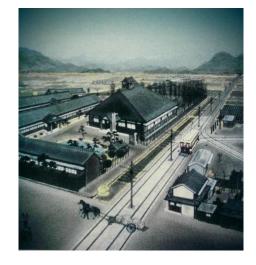


図4





写真9

### (4) 潮江村役場跡地 (図6、写真10)

潮江村役場は明治 24 年の古地図では、潮江橋南西の「上町」に役場のマークが確認できるが、大正 10年の「高知市街図」(図 6)では塩屋崎町の周辺に役場マークが確認できる。『潮江村誌』によると、役場はもともと善法寺2西隣にあったが明治 21年上町大越戸内三千九百九十八番地に移転。明治 41年に潮江尋常小学校の塩屋崎町移転とともに役場も移転改築され、大正8年には学校の増築とともに村公会堂の東隣に

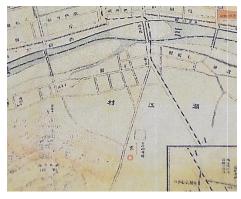




図 6

写真 10

改築されたという。大正 10 年の古地図の役場位置および『潮江村誌』の記述、法務局の土地登記の確認から、塩屋崎町の高知市消防団潮江分団屯所(写真 10)・潮江中央公民館付近に役場跡地を比定した。

### (5) 小高坂村役場跡地(図7、写真 11·12)

明治 42 年の古地図 (図7) から大膳町周辺に役場跡 地があり、これは現在の小高坂会館 (写真11) 周辺に 比定できる。合併後、昭和40年頃まで役場支所として 使われていた。また、小高坂会館内に掲示されている 関勉氏撮影の古写真 (写真12) から、役場跡の建物が 戦後小高坂会館として使用されたことが分かる。会館 前には旧高知師範学校跡だった大膳公園もある。





写真 11



写真 12

### (6) 秦村役場跡地(図8、写真13)

明治 42 年の古地図では、愛宕山の西側に役場マークが確認できる(図8)。『秦小学校の百年の歩み』には、役場の下に崖があると記されている。住民への聞き取りを含めて現地で確認すると、高知市消防団秦分団屯所奥にある秦小学校敷地内児童クラブが崖の上に建っており

(写真13)、ここが役場跡地であったと比定した。



図8



写真 13

### (7) 初月村役場跡地(図9、写真14)

明治 42 年の古地図では、久万川沿いに役場マークが確認できる(図 9)。初月小学校八校の『郷土資料』に「村役場ハ久万字柿内二アリテ初月村役場ト称ス」とある。JA 高知市初月支所にあった町内地図も参照して、住民への聞き取りも含めて現地で確認した結果、役場跡地は初月小学校前の久万川に架かる柿内橋(写真 14)横の JA 初月隣駐車場周辺に比定した。





図9

写真 14

### (8) 朝倉村役場跡地 (図10、写真15)

明治 33 年の古地図では、歩兵第 44 連隊兵舎と練兵場の間に役場マークが確認でき、小学校も隣接して確認できる(図 10)。『母校百年 朝倉小学校』の付図に役場位置が記載されている。当時の役場は、朝倉



だ。

小学校東側に隣接してあった。現地で確認すると、写真 15 右奥のプールがある辺りが役場跡地に比定できる。周辺の土地登記を調べてみると、昭和 17 年の高知市合併時に役場跡の敷地は朝倉小学校の土地になっている。合併後の高知市朝倉支所は 60m東にある現朝倉ふれあいセンター・図書館がある場所にあったよう



写真 15

## (9) 浦戸村役場跡地(図11、写真16・17)

明治 39 年の古地図では、浦戸湾沿いに役場マークがある(図 11)。また、『吾南の名勝』記載の「長浜町御畳瀬浦戸二村略図」も参照にして、現地で確認すると、新浦戸大僑の真下で、手前は勝浦浜排水ポンプ

場の番小屋(写真 16) 裏にある現在桂浜公民館(写真 17) が役場跡 地に比定できる。住宅地図を確認すると、役場はその後保育園とな り、その後公民館となった。地図の記載などを見ると、桂浜は当時 「勝浦浜」と呼ばれていたようだ。

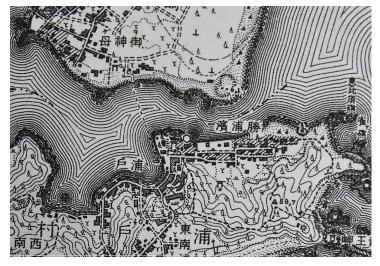




写真 16



写真 17

図 11

### (10) 御畳瀬村役場跡地 (図 12、写真 18)

明治 39 年の古地図では、浦戸湾沿いに役場マークがある(図 12)。『ふるさと御畳瀬』に御畳瀬尋常小学校が後に村役場になり、現在は消防屯所となっていることが記されている。高知市消防団御畳瀬分団屯所(写真 18)を役場跡地に比定した。『吾南の名勝』記載の「長浜町御畳瀬浦戸二村略図」も参考にした。周辺には、地元青年団や住民の寄付金で造られた昭和天皇成婚記念の大時計が残されている。





図 12 写真 18

### (11) 長浜町役場跡地 (図 13、写真 19)

明治39年の古地図では、新川川沿いに役場マークがあり、小学校も隣接している(図13)。現在、長浜

小学校隣の高知市防災倉庫がある場所に「高知市長浜支所」と書かれた石製の門柱が残る(写真 19)。『百年のあゆみ 長浜小学校』の長浜小の学舎配置図(昭和6年当時)から、役場周辺に学校・農業実習地・農舎などがあったことが分かる。これらの記述と門柱から高知市防災倉庫がある敷地を役場跡地と比定した。



図 13



写真 19

### (12) 三里村役場跡地(図 14、写真 20·21)

明治 42 年の古地図では、三里の集落内に役場マークがある(図 14)。『三里地区史跡報告』に高知市三里支所が写った写真(写真 20)が複数載っている。東側から見た仁井田神社鳥居と支所が写った写真などから、現地で位置関係を確認し、高知市消防団三里分団屯所(写真 21)を役場跡地と比定した。

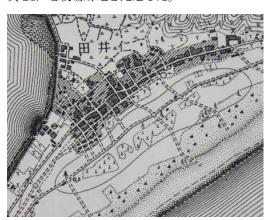


図 14



写真 20



写真 21



写真 22

### (13) 五台山村役場跡地 (図 15、写真 22・23)

明治 42 年の古地図では、下田川沿いの山裾に役場マークが確認できる(図 15)。『ふるさと五台山 五台山・高知市合併 50 周年記念誌』に昭和 14 年頃の学校・役場を写した写真がある(写真 22)。周辺の風景などから

五台山小学校がある敷地の西側に村役場があったと比定した(写真23)。

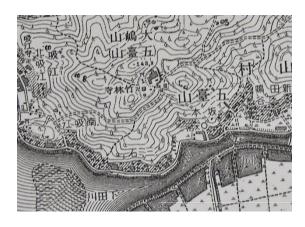




写真 23

図 15

### (14) 一宮村役場跡地 (図 16、写真 24)

明治 42 年の古地図では、道路沿いに役場マークがある (図 16)。『一宮未来に翔る 一宮村・高知市合併 50 周年記念誌』に、「一宮ふれあいセンター」がある場所に、役場と役場支所があったことが記されており、センターが役場跡地であることを確認した (写真 24)。







写真 24

### (15) 高須村役場跡地 (図 17、写真 25)

明治 42 年の古地図では、舟入川南の山裾に役場マークがあり、小学校も隣接している(図 17)。現地で



図 17



写真 25

確認すると、高須本町の電車通り沿いにあるJA高知市高須支所に合併碑が建立されている。高須小学校 に戦後すぐの町内地図が所蔵されており、地図に現在JA支所がある場所に高知市高須支所が記載されて いることから、役場跡地として比定した(写真 25)。

### (16) 布師田村役場跡地 (図 18、写真 26)

明治 42 年の古地図では、布師田橋北東の山裾に役場マークがある(図 18)。『布師田小学校百年のあゆみ』に、布師田村役場の建物は産業組合との合同庁舎だったことが記されている。また、布師田御殿跡案内板に小学校跡の写真が載っており、その写真と『布師田小学校百年のあゆみ』記載の周辺地図を現地で確認し、同支所に役場跡を比定した(写真 26)。





図 18

写真 26

### (17) 鴨田村役場跡地 (図 19、写真 27)

明治 42 年の古地図では、能茶山の南、小学校横に役場マークがある(図 19)。1953 年発行の『鴨田教育』に鴨田小学校プール南東側(現在はない)に役場があったと書かれている。『鴨田小百年誌』の校舎配置図と写真を見ると、明治 20 年頃には学校と並行して役場の門があったことが分かる。明治 30 年代も同様に同じ敷地内にあったが、大正 6 年に吏員の死亡が相次ぎ、学校の外側(東側)に移った。そのため、戦前(昭和 19 年)の学校内の配置図には役場が記載されていない。プール跡地は、現在鴨田小の駐車場に







写真 27

なっており、当時の町内地図でもプールの位置が現在の駐車場になっていること確認した。また、能茶山 自治会長を務めた中山正男氏への聞き取りで、駐車場と中山氏の住宅一帯が以前役場であったことが確認 でき、この場所を役場跡地と比定した(写真 27)。その他の住民の通学時の記憶からも、学校東側に役場が あったことを確認できた。

### 6、おわりに

本稿では、戦前の旧高知市 17 町村役場は何処にあったか?現在の役場跡地はどうなっているか?を探ってきた。当初は県庁や市役所、図書館等で調べれば簡単に分かると思ったが、十分な情報や資料はなく、全てを比定するまでに約3年の月日を要した。その結果、旧町村役場はほとんどが小学校に隣接し、現在も小学校の隣接地となっている場所が多いことが分かった。また、法務局で役場跡地の土地登記の変遷を確認すると、個人の私有地を借用して役場として使った場所も多く、後に村町が買い取るケースもあったようだ。役場跡地は合併後、JAの支所や消防分団屯所となっているケースが多く、ほとんどは公共用地として活用されたことが分かった。

調査は、住民や図書館職員ら多くの方々の協力が無ければ途中で頓挫していたと思う。戦前最後の合併から75年以上が経過し、現地を歩くと周辺の景観は大きく変貌しており、役場跡地の記憶がある人は非常に少なく、時の流れを感じた。特に、土地区画整理事業が計画されている旭地域では、下島地区、中須賀地区の街は、今後一変してしまうだろう。旧旭村役場は中須賀地区に当たるが、毎回街を通る度1軒、2軒と消えてゆく家屋を見て、今後ここはどんな街になるだろうと考えてしまう。昔小学校があった場所さえ知らない旭町の住民が多くいるのだから、役場跡地などもちろん忘れ去られてしまっている。また、江ノロ・下知地域でも当時の役場を知らない住民がほとんどだった。

役場という地域の政治・経済・文化の中心を担った場所が、合併によって周縁となって変貌し、数十年 が経過するとその存在すら忘れられてしまう。地域の中心だった役場跡地という空間を記録する本稿の試 みを、小さな「記憶遺産」として広く共有していただけたら幸いである。

なお、調査成果は地理情報システム (G1S) の機能を使ってホームページ「高知工大フィールドデータベース」(http://fdb.kochi-tech.ac.jp/) で近く公開を予定している。

#### 【註】

1 本稿の対象時期ではないが、昭和47年に合併した大津村、介良村には合併記念碑が建てられている。

#### 【参考文献】

朝倉小学校創立百周年記念事業実行委員会 1975『母校百年朝倉小学校』

一宮村・高知市合併 50 周年記念事業実行委員会文化部編 1992『一宮未来に翔る一宮村・高知市合併 50 周年記念誌』

大久保千涛編『吾南の名称』若宮八幡宮社務所

江ノロ小学校創立百周年記念事業実行委員会編1974『江ノロ小学校百年のあゆみ』

<sup>&</sup>lt;sup>2</sup> 『潮江村誌』によると、善法寺は明治 32 年秋の暴風雨で倒壊し、吾川郡池川村(現仁淀川町)へ移転している。

門田武久 1977『ふるさと五台山を歩く』

門田武久 1985『ふるさと布師田』

鴨田小学校編1953『鴨田教育資料篇』

高知市江ノ口コミュニティーセンター運営委員会 2009 『旧江ノ口公民館のあゆみ』

高知市史編纂委員会編 1985『稿本高知市史 現代編』

高知市史編さん委員会絵図地図部会編 2012 『描かれた高知市』

高知市役所編 1973『高知市史』名著出版

高知市立旭小学校記念誌編集委員会編 1974 『旭小学校の百年』

高知市立浦戸小学校編 1974『浦戸小の百年』

高知市立高須小学校 1972 『やなぎ 創立百周年記念誌』

五台山・高知市合併 50 周年記念事業実行委員会文化部編 1992『ふるさと五台山 五台山・高知市合併 50 周年記念誌』

重松実男 1957 『(稿本) 高知市史』高知市役所

長浜小学校創立百周年並校舎落成記念事業実行委員会編 1977『百年のあゆみ 長浜小学校』

西本明四編 1929『潮江村誌』

秦小学校創立百周年記念事業実行委員会編1977『秦小学校の百年の歩み』

八十八年史編纂委員会編 1991『土佐電鉄八十八年史』土佐電気鉄道

浜川金兵衛 1981『私の江ノロ帖』

百周年記念誌編集委員会編 1992『布師田小学校百年のあゆみ』

三里史調査委員会編 1993 『三里地区史跡報告』高知市教育委員会

御畳瀬小学校開校百年誌編纂実行委員会編 1983『ふるさと御畳瀬』

三里小学校開校百年記念誌編集委員会編 1981 『目で見る三里のことども 高知市立三里小学校開校百年記 念誌』

初月小学校百周年記念事業実行委員会編集部編 1978『高知市立初月小学校創立百周年記念誌』

### 第2章 古地図を歩く

本章では、高知県内の古地図をもとに地域を現地調査し、史跡・旧跡の歴史を検討する。古地図を使った町歩きやフィールドワークの楽しみを、実践事例を通して感じてもらいたい。

### 「『弘岡井筋絵図』に見る春野の歴史景観」

横山 有弐

### 1、はじめに

『弘岡井筋絵図』には、高知市春野町の弘岡井筋の主要な流路が描かれていて、仁淀川本流から引いた井筋が春野各地を灌漑するように長々と流れている様子が俯瞰できる。絵図の中には「悪水」や「ミチ」などの表現が散見され、当時の人々の生活感覚が見事に表現されている。 荒削りではあるが、弘岡井筋と新川川流域の景観が伺える絵図である。

一方、新川川(しんかわがわ)は、高知市春野町を流れる河川であるが、江戸時代初期、土佐藩の2代目藩主・山内忠義の治世に、時の執政・野中兼山が井筋の建設にあわせて開削したものだと伝えられている。古来より暴れ川と呼ばれた仁淀川の自然分流であった新川川は兼山により開削され、唐音(かろと)の切抜を経て浦戸湾に流れこむようになった。兼山の事業により、新川川は「新川のおとし」を中継地として、弘岡井筋とつながり、はるか仁淀川上流から春野・浦戸湾の内陸水路を経て、高知城下に至る水運路として活用されることとなった。また、そうした運河としての機能だけではなく、洪水時には、排水路としての役割も果たしており、複雑で高度な水運と治水の管理システムが構築されていた。

この論考では、往時の井筋と新川川流域の有様を探り、絵図上での各遺構の位置と名称、現在の景観を画像で示し、現地踏査や聞き取り調査の結果もあわせて春野における兼山の水運・利水(灌漑)・治水(洪水対策)等の事業全般を総合して紹介したい。

### 2、『弘岡井筋絵図』について

まず、『弘岡井筋絵図』(現オーテピア高知図書館「平尾文庫」所蔵)のことであるが、この絵図の作者、成立年代について詳しいことは分かっていない。ただ、絵図全体を見ての印象から、江戸時代前期、それも兼山の春野での井筋工事(1648~1652年)からあまり時を経ずして作成されたものではないかと推察される。井筋の描き方、位置、長さなどおおざっぱな表現が見られ、正確さに欠けるところから、実用的な地図としての絵図というよりは、弘岡井筋や新川川の意義・役割を説明するために作成されたものではないかという印象を受ける。絵図には二か所にわたって「弘岡五千石」「弘岡上中下五千石」といった表現が見られることから、弘岡井筋の農政上の成果を示す意図があったのではないかと推察されるのである。

#### 3、『弘岡井筋絵図』を歩く

『弘岡井筋絵図』に着目したのは、平成 29 年 9 月より高知市春野郷土資料館での「兼山の水運・治水事業~古地図と巡る新川川の謎~」と題した企画展の開催がきっかけである。企画展開催にあたり、来館者の皆様に古地図に親しんでいただきながら、春野における兼山の業績を紹介したいと考え、絵図の井筋や新川川に沿って歩いて、各遺構の現状を確認しようと思い立ったのである。以下、平成 29 年 8 月から 11 月にかけ、弘岡井筋の上流部から絵図に沿って実際に現地を踏査して遺構を確認してみた調査結果を記す。なお、「新川の落とし」については同年 10~11 月に地元の古老数名から聞き取り調査をした結果もふまえ

後述する。

### ① 仁淀川と八田堰(はたぜき)

絵図には「八田堰」の記載はないが、井筋の構築には欠かせない遺構のため参考までに掲載した。現在の八田堰は、昭和6年にコンクリート化され、その後同40年に改修し一部が可動堰となっている。平成7年にさらに可動部他改修がなされた。現在の堰の長さは320m、高さは平均1.8m、幅は平均20mである。兼山に関する最初の研究書とされる『南海之偉業』によれば、当時の堰の長さは415m、高さは3m、幅は15mとされている。堰の位置はほとんど変わっていないとされるが、堰の長さは明治時代の方が曲線斜め堰のため長かったようだ。残念ながら、八田堰の構造や工事の方法については、江戸時代の文献による詳細な記録がなく、不明なことが多い。なお、絵図の中の「大川筋」は仁淀川の本流のことであり、「八田川筋」とは、弘岡井筋のことである。仁淀川沿いに「ツツミ(堤)」が築かれていたことも分かる。

#### ② 行当の切抜(ゆきとうのきりぬき)

絵図には「雪戸」と書かれているが、当て字ではないだろうか。西畑も「戈畑」と記入されている。切抜とは用水路の建設において、その進路に岩山が立ちはだかった場合に、その岩山を「ノミ」などを用い人力で掘削したものである。『南海之偉業』によれば、その切抜の規模は「長二十間、巾九尺、高六間」との記載がある。この時点の調査記録では建設当時から 240 年ほどの年月が過ぎている計算になるが、兼山の工事の原型を留めていたと推察される。現在は道路下に隧道(トンネル)を通して、用水路を流しているが、昭和初期にも隧道を用いていたとの記録がある。兼山の用水路建設では困難を極めた工事のひとつである。

#### ① 仁淀川と八田堰









#### ③小田井流(おだのゆる)

絵図には、はっきりとカタカナでオダノユルと表記されているので、当時の人々も井流のことを「ユル」と発音していたことがわかる。あくまで筆者の私見だが、本来は「イル」と読むのだが、「ユル」に転訛したものだと思われる。井筋についても同様に本来の読みは「イスジ」だったものが、転訛して「ユスジ」と発音していたのではないか。井流とは幹線である弘岡井筋と支流との接点につくられた取水口のことを言う。幹線を舟や筏が通るときには、その取水口を閉め、幹線の水量を確保できるようになっている。もちろん、夏場は稲作用に大量の水が必要になってくるので、井流の水門は必要に応じて開かれる。そうなると、逆に幹線の水量は減少し、水運の機能は低下する。今はコンクリート製であるが、昔は大石と巨木を方形に組んでの大工事であったと『春野町史』は伝えている。上流には水車の記載もある。

#### ④ 新川の落とし

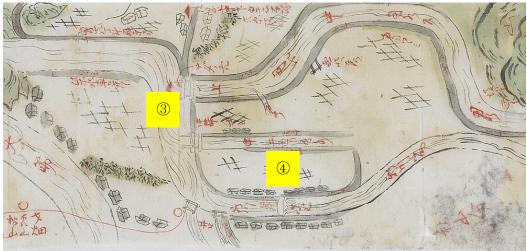
春野町森山、新川町にある全国的にも珍しい造りの「傾斜型水路」である。弘岡井筋と新川川は、用水路と排水路という性格の違いから高低の差が約3mもある。その高低差を調節するために、新川川の入り口に水路の坂、つまり「落とし」を造ったのである。「新川の落とし」は、用水路の最終部に水門を造り、プールのように水を貯めておき、木材を流す時に開いて、流れ落ちる水流に乗せて、木材を新川川に流す役割を果たしている。「新川の落とし」により、弘岡井筋と新川川はつながり、はるか仁淀川上流の木材や炭などの物資は高知城下町へ、また城下町や平野部の物資は仁淀川上流の村々に運ばれることとなった。昨年度、同館を訪れる小学校の社会科見学の説明のため、「新川の落とし」を詳しく調査した。「新川の落とし」の模型を作製する必要に迫られたからである。そこで水運が行われていた往時の様子を再現するために、現地調査と古老への聞き取りを実施した。その結果については、別の項目で紹介する。

## ③小田井流

#### ④新川の落とし







#### ⑤ 西分の掘割(切抜)

春野町での切抜と言えば、行当の切抜と唐音の切抜が知られているが、もうひとつ、春野の中心部の西分地区にもある。『西分村史』には「西分村字池田ト字湯ノ芝トノ間、山ヲ切抜キ井溝ヲ通スル工事アリ。慶安ノ末、奉行 野中伝右衛門八田閘ニ依ル井溝開鑿中ニ山ヲ切抜キタル難工事ハ弘岡・西分・長浜ノ三ヶ所トス」。『南海之偉業』には「堀割 西分村字湯ノ芝ニアリ長五十間巾三間」との記述がある。『西分村史』では切抜という表記だが、南海之偉業では掘割という表記になっている。同じものを、それぞれ別の表現を用いている。行当の切抜も唐音の切抜もかなりの高さの岩山を切り抜いているが、西分の掘割は前者ほどの岩山ではなく、どちらかと言うと用水路の両側は、なだらかな丘のような地形である。岩山を切り崩したというよりは用水路の進路に硬い岩盤が埋まっており、その岩盤を掘りおこしていったのではないかと推察される。また前者の現在の様子は近代的なコンクリートで固められているのに対し、西分のそれは、北側の山肌などは当時の地形がそのまま残っているかのような印象で、いかにも手作業で工事を進めていた様子が容易にイメージできる。用水路を挟んで山肌が迫り、木々の間から木漏れ日がさしてくる情景は非常に風情がある。

# ⑥ 落山樋

「樋」は用水路と河川が交差する場所につくられるもので、河川の上を通る用水路の橋というべきものである。今はコンクリートや金属製であるが、江戸時代には竹や木材を材料にして造られた。

#### ⑦ 悪水

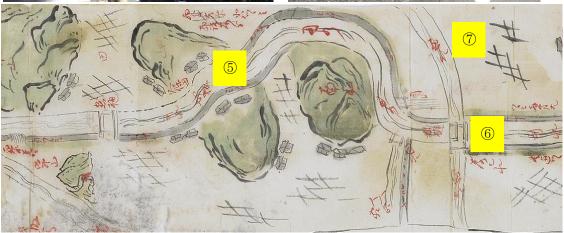
農業用水は稲作にとっては何よりも貴重なものであったが、必要以上の水や腐った水はさっさと排水する必要がある。特に雨量の多い土佐では、余分な水はできるだけ排出しなければならない。絵図には「悪水」という表記が散見される。当時の人々の汚水や余分な水に対する感覚が伺われる表現でおもしろい。

#### ⑤西分の掘割



⑥落山樋



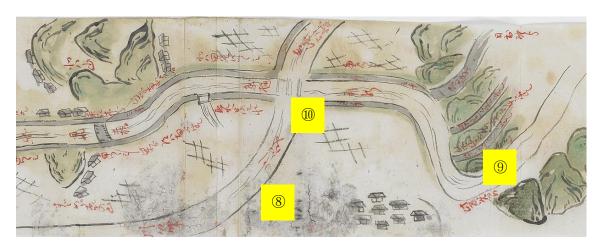


#### 8大曲

#### 9唐音の切抜







# 

春野町における野中兼山の業績というと、八田堰と用水路の構築による新田開発事業、新川の落としを活用した水運事業が注目され、治水事業が見落とされがちである。さらに治水事業と言えば、堤防の構築で知られているが、実は新川川を開削し、唐音の切抜を通して、浦戸湾につなげたことも重要である。新川川を開削し浦戸湾につなげたことで、安全な航路を通っての水運事業が盛んになったことはもちろんだが、もうひとつ忘れてならないのが、このことによって新川川の排水機能を高めたという事実である。新川川はもともと、諸木から土佐湾に流れ出る甲殿川という河川につながっているのだが、この甲殿川の河口が土砂で埋まり排水できなくなることがたびたびあり、そうなると大雨が降ると諸木あたりは洪水に見舞われる。そこで新川川を唐音の切抜を通し長濱川へとつなぎ、浦戸湾へ排水することで、新川川の排水機能を高めたのである。

ただし、この事業も苦労が多く、とりわけ唐音の切抜の工事は困難を極めたとのことである。唐音の切抜については『南海之偉業』には次の記載がある。

#### 長濱東諸木両村ノ境界ニアリ長五十間高十五間五尺幅七間

さらに筆者は新川川の舟運ルートの通過点である「大曲(おおまがり)」という地名に興味を抱き、現地へ 徒歩で行ってみた。⑩東浦樋のある地点から新川川沿いにひたすら土佐湾に向けて堤防沿いを南下して歩いてみた。8月の炎天下で大変だったが、30分ほど歩くとようやく新川川が東向きから北側に向けて大き く蛇行する光景に出くわした。それが⑧の写真である。この流れ方は全く不自然でほぼ直角に曲がってい る。しかも海側から陸側に向けて北上している。このような流れは人が手を加えなければありえないもの だ。現地で見ると実感できるのだが、この新川川の開削も並大抵のことではないと思われた。

また、大曲の地点から 300m ほど北に進むと、平成 29年につくられたばかりの真新しい橋がある。この橋の名前は「ひろかたばし」である。古い住宅地図には、この橋の地点より手前(南側)に「大曲橋」という橋が記載されていたのだが、その「大曲橋」はなくなっていた。誠に残念である。この地点こそ、かつて「大曲橋」が存在していて、「大曲」という.呼称が使用されていたということを記録に留めておきたい。ただ、このあたりの小字には「大曲」という字はないので、おそらく兼山によって開削されてから、地元の方や川船の船頭達によって、「大曲」と呼称されるようになったのではないかと推察する。地名ではなく新川川の大きく蛇行する流れそのものを指して大曲と呼称するようになったのではないか。ちなみに、この大曲では干潮の時、水深が浅くなるので、川船の船頭達は西隣の西川橋で、汐待ちをして、満潮になるのを見計らって長浜に向けて漕ぎ出したとのことである。さらにつけ加えれば、この開削事業は、大曲の北側から土佐湾に向けて流れ込む、旧内の谷川に沿って開削したものだと推察される。できるだけ労力をかけず、効率よく工事をするには、もともと流れていた内の谷川を遡上して開削する方が容易だからである。

## 小結

『弘岡井筋絵図』をもとに、現地を踏査しながら春野の用水路、そして新川川を巡ってみて、あらためて、兼山の事業の壮大さと緻密さ、そしてその深慮に思い至った。例えば同じ切抜でも、行当の切抜と唐音の切抜では、その意義が違ってくる。どちらの切抜も水運機能を兼ねているが、行当の切抜は用水路を通すためのものでもあり、唐音の切抜は浦戸湾に余分な水を排出する役割、つまり治水機能をも兼ねているのだ。

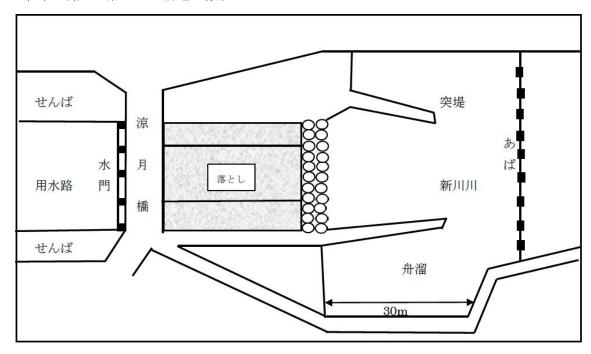
兼山の事業の優れたところは、単なる利水(灌漑)事業ではなく、それに合わせての水運事業、さらには、 治水事業(洪水対策)も含めての、総合的な開発を実践したことにある。その複雑な水の管理システムが、す でに江戸時代初期に中央政権から遠く離れた遠国の土佐で現実のものになっていたという事実には驚嘆す る。兼山の企画力の卓越性は、まさに土佐の開発プロデューサーだと断言してもいいし、全国に誇っても いい土木事業家だと思う。

またささいなことではあるが、この絵図には「悪水」や「落水」「ミチ(道)」といった表現が散見され、 当時の人々の生活感覚が感じられたことや、西分にも切抜(掘割)があり、今もその工事の名残が感じられる 地形が残存していることを再認識させられたことは大きな収穫であった。切抜についての遺構は、行当に しても唐音にしてもほとんどコンクリート化されていて、当時の様子を想像することすら難しいが、西分 のそれは、小学校の社会科見学時のフィールドワークには適切な遺構である。

#### 4、「新川の落とし」を歩く

前述したように、小学校の社会科見学時に教材として用いるため、「新川の落とし」の模型を作製したいと考え、その遺構の調査・研究をすることとなった。「新川の落とし」の役割や構造については大人でも理解することが難しい。ましてや、それを小学校4年生にわかりやすく伝えるには、説明や図だけでは困難で、どうしても立体的な構造の模型が必要になったからである。それには、設計をするにしても、まずは現状の確認が必要であるし、現在の新川の落としは、江戸時代に構築されたままとは到底考えられないので、昔の様子を再現するためにも、地域の方、それも古老の方から聞き取り調査をするしかないと考えた。現地には写真撮影も含めて30回以上調査に赴いた。以下その結果判明した新川の落としの構造と古老への聞き取りの結果、そして考察を記す。

## (1) 新川の落としの構造と機能



(上の図は春野町教育委員会発行「唐音」の図版を参考に筆者が簡略化して作図したもの)

「新川の落とし」の模型を作るにしても、江戸時代当初のものは、どのようなものであったかについては全く記録がなく、不明である。涼月橋は明治 30 年頃に石橋となる前は木橋であったと伝えられているし、「落とし(傾斜した水路)」の石畳も、江戸時代から数百年の間一度も修復されていないとは考えられない。そこで、モデルとなるのは、どんなに古くさかのぼったとしても、記録として残っている、この明治 30 年頃のつくりの「新川の落とし」とならざるを得ない。また、実際に筏が流され、水運がかろうじて行われていた終戦直後の昭和 20 年代の頃、新川町で「落とし」を直接見てきた古老の話をもとに再現することが、現状ではベストだと考えた。

まずは、現地調査を行った。上の図はかつての春野町教育委員会が、「唐音」の報告書の中で再現した「昔の新川(落とし周辺)」という図版をさらに簡略化して作図したものであるが、当然現在の「新川の落とし」周辺とは異なる点が多い。また、「昔」といってもどの程度昔のことなのか分からないが、「唐音」の報告書の前後の文脈から読み解くと、おそらく石橋の涼月橋が使用され始めた明治 30 年以降の新川の姿ではないかと推察される。なぜなら、報告書には次のような記載があり、その内容は、筆者が新川の古老から聞いた話とほぼ一致するので、おそらく、石橋ができてから、昭和 20 年代までは、「新川の落とし」とその周辺の景観はさほどの変化はないと思われる。以下にその記述を抜粋する。

「明治30年頃、石造の涼月橋ができると、それまで水門でせき止めていた用水路の水は、涼月橋の上手に厚さ2寸、幅1尺の板を数枚縦に積んで用水路の水をせき止めた。つまり涼月橋は通行用の橋と水門の2つの役目を持っていたのである」

そこで、明治 30 年から昭和 20 年にかけての新川の落としとみられる見取り図と、現在の「新川の落と し」周辺を比較してみると、以下のことが明白となった。

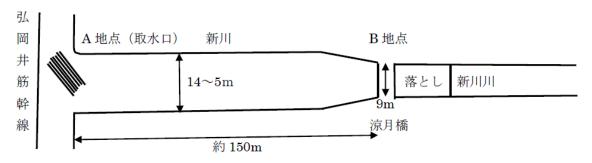
・図面に見られる突堤がなくなっている。

- ・舟溜であったところは、今は埋め立てられて公園になっている。
- ・その関連で、舟を引き上げるための小路もなくなっている。
- ・「せんば」もなくなっており、今は民家や私有地になっている。
- ・現在の涼月橋は明治時代の石橋ではなく、コンクリートを継ぎたした橋であり、車が通りやすいよう に、さらに橋の幅を広げるための工事が行われた痕跡がある。
- ・石橋の頃の痕跡が橋の片側の端に石積みとして一部残っている。
- ・「落とし」の規模は、「南海之偉業」にある「長十二間三尺、巾五間、高九尺」の記載とほぼ同じ規模である。

# (2) 古老への聞き取り

#### 「新川のおとし」聞き取り調査まとめ(H29.10~11月)

#### <「新川の落とし」周辺略図>



#### ●Aさん(春野町森山在住)

「北から南に流れる弘岡井筋幹線から東に分かれて涼月橋に向かう用水路は、幹線からの取水口で筏を東に向けて直角に大きく回転させる関係で、 $14\sim15$ mくらいの幅をもたせており、今と比べて大変幅が広かった。昔は、この前の道路の半分くらいまでは用水路が張り出していた。「新川のおとし」についてはBさんが詳しい」

#### ●Bさん(春野町森山在住、83歳)

「少年の頃(昭和20年頃)、「新川のおとし」では、筏を流している光景が見られた。その頃は、涼月橋の水門で用水路の水をせき止めてプールにし、コースもかまえ、学校での水泳大会も行われていた。涼月橋の橋げたの部分に用水路をせき止めるための戸板を留めていた窪みが今でも残っている」

(窪みは現地で確認)



矢印は戸板を留めていた窪み跡

「今の涼月橋は車を通すために、一部増築して幅を 増している」

橋の下から見ると、確かに継ぎ足した跡があり (右写真の矢印部分)、はっきりと確認できた。ちなみに筆者の確認では、現在の涼月橋は明治 30 年頃 の石づくりのものが元となっているが、その後さらに改築されたものである。



「明治時代の石橋の頃の痕跡は涼月橋の北西側の端に『石積み』として今も残っている」(下写真矢印部分)

石造りの前は木橋であったようである。また、おとしのスロープにあたる「石畳」の部分も江戸時代から一度も修復されていないとは考えにくい。

「涼月橋より上手の用水路の両岸も昔は石垣で造ってあり、堤は普通の土手で、草花が咲いていた。中には畑を作っているところもあった」

「製材所が4箇所ほどあり、筏で運ばれてきた木材を製材して、新川の舟に載せて運搬していくこともあった」

「近くに映画館もあり、料亭や旅館もあってにぎわっていた。諸木方面から遊びに来た人が酔っぱらって涼月橋から、よく落っこちていた。商売をやっている者は儲けていて、腹巻に札束を入れて遊んでいたし、昼間から三味線の音が聞こえていた。」

「今は公園になっているあたりは、昔は舟溜まりだった」(右写真の矢印部分)





#### ●Cさん(春野町森山出身)

「涼月橋よりすぐ上手の用水路はぐっと広くなっていて、橋の長さ( $9\,\mathrm{m}$ )よりずっと広いくらいで、おとしの手前で急に狭めている構造であった。筏は『かずら』のようなもので縛っていて、 $8\sim1~0$ 本ずつ組んでいた」

#### ●Dさん(春野町森山在住、83歳)

「小さい頃は新川川で筏に飛び乗ってよく遊んでいた。筏は涼月橋の水門の手前で三本ずつくらいに解体し、落としを流したあと、新川川で再び組み直していた。ふだんは涼月橋の水門(4つ)のうち、真ん中の2つを使って筏を流していた。筏を流す前は、水門を閉じて、プールのように水を貯めておき、流す時は、鳶口を使って水門に留めてある戸板を一気にはずして、流していた」

この筏の流し方は、「唐戸」の報告書の、筏は一組ずつ流していたとの報告とも、また、春野郷土資料館

にある「新川の落とし」のビデオでの一本ずつ流していたとの説明とも違っていた。確かに、橋には橋脚があり筏を8・9本組んだままは流せないし、一本ずつ流していては、あとで組みなおす時に手間がかかる。 Dさんの証言が真実ではないかと考えている。

## (3) 考察

実はこの聞き取りの後しばらく経って、筆者がここ数年間疑問に思っていたことが、ようやく解決されたように思う。自分自身ずっと考えていたし、社会科見学で知り合った小学校の先生方や、来館者の中にも幾人か疑問に感じていた方がいて、すっきりしない問題があった。

兼山が「新川の落とし」を構築した理由も、用水路と新川川の高低差を調節するために、「落とし」をつくった意義も、その役割もよくわかるのだが、それなら、何故最初からもっとゆるい傾斜にして、川船も通過できるようにつくらなかったのか、という疑問が残る。「落とし」の急な傾斜角のため、構造上、筏は通しても、川船は通過できないのである。そのため、仁淀川上流の川船はわざわざ新川で荷を降ろし、新川船に荷を移しかえなければいけない。「面倒ではないのか?」というのが、皆の正直な意見である。兼山ほどの才覚があるなら最初からゆるい勾配の傾斜水路をつくり用水路と新川川をつなげられるのではないかと考えた。では何故そうしなかったのか?何か理由があるはずである。総延長 25km もの用水路を築いた兼山である。それだけの技術力は普請奉行の一木権兵衛も有していたのではないか。だが、あえてそうしなかったのは、

- ・何かしらの工事の困難さがあり断念した
- ・費用対効果を考えた場合、主要な収入源の材木だけを流すために「落とし」を構築した
- ・農業用水路としての弘岡井筋と排水路としての新川川を物理的に別物として区別し、無理にゆるい勾配 でつなげない方がよいと考えた
- ・新たな難工事で農民が疲弊してしまうことを考えた
- ・物資の中継地としての新川町を繁栄させたかった(なお、昭和の時代には「落とし」の利用料を徴収していた記録も残っている。いつから始まったかは不明。)
- ・仁淀川の水運を利用できなくなった、高岡・新居の水運業者への失業対策のため (後に新居の水運業者を新川に居住させて水運をまかせていることから)
- ・内海とはいえ浦戸湾を航行するには川船では無理だから、結局は舟を乗り換える必要がある 等々、いろいろ考えたが、納得のいく説明、合理的な理由が思い至らない。兼山ほどの土木事業家が何故 後々こんな余計な労力を必要とすることをしたのか、どうしても納得がいかなかったのである。しかし、 今回の聞き取り調査を経て、思わぬ問題解決への糸口を得た思いがする。

「落とし(急な傾斜型水路)」という「しくみ」を考えたのは、「農業用水」を確保することを、まずは優先して考え、水運の便宜は二の次にしたからではないかということを古老への聞き取り調査から思いついたのである。

というのは、新川川に用水路をゆるい勾配でつなぐためには、排水路としての新川川に向けて、かなりの長さの、ゆるい傾斜角の水路を設けなければならない。そのためには新川川の南側に併走するように傾斜水路を構築してずっと下流で新川川に合流させる必要が生じてくる。そして、長い距離の傾斜水路を設けるとなると、当然その分大量の用水路用の水を必要とする。それに加えて、筏を通すために用水路の幅も広くとり、舟を通すための水深も確保するとなると、たとえ水門でせき止めたとしても川船を通す度に膨大な量の水を、貯水しなければならなくなる。しかも、その水は水運の役には立っても、結局は海へ排

水されてしまう。それではせっかくの貴重な農業用水が無駄になり稲作に悪影響を与えるのではないか、と考えを新たにした。

具体的に考えてみる。「新川の落とし」は用水路と新川川の高低差 2.7m を調節するために 22.5m の長さを要しているが、川船を通そうと思えば、かなりの長さのゆるい傾斜型水路が必要となってくる。仮に、その傾斜角度を現状の 1/10 程度にゆるめた場合、短く見積もって 200m の傾斜水路を設ける必要がある。そこへもってきて、A さんの証言では、新川の用水路は 14.4m もの幅を要していたのである。仁淀川上流へ向かう川船も新川で行き交うためには水路の幅は当然広くせざるを得ない。また明治時代の弘岡井筋の最も浅い水深でも六尺(1.8m)もの水深がある。傾斜水路を長くし、水路の幅を広くとり、水深も確保しなければならないとなると、膨大な量の用水が必要となってくるのである。流しっぱなしではとても無理である。水門でせき止めたとしても、相当な水量を貯水しなければならなくなるし、その貯水のための時間もかかる。加えて夏場は稲作のため農業用水が大量に必要とされる。上手にある諸木井筋と川窪井筋、下手にある北川井筋と南川井筋にも用水は流さなければならない。もっと具体的に考えてみる。

もし無理して、現状のものに比べ 1/10 程度のゆるい傾斜の水路を作ろうとすれば、先の「新川の落とし」周辺略図の B 地点から少なくとも 200m も用水路を延長し、A 地点からすると総延長距離は 350m もの長さになる。現状の短い傾斜水路の「落とし」の利用ですら、水運業者と農民の間で水をめぐるせめぎあいがあったことを考えれば、これほど長い傾斜水路では水量のロスが多すぎる。水門を設けて貯水すると、その水量は、長さ 350m、幅 14.4m、水深 0.6m として、3024 t にもなる。しかも、高低差を調節するために、おそらく何箇所も水門が必要だろう。

今、現在の八田堰からの最大取水量が毎秒 6.5t であり、そのほとんどは各用水路へ水を供給していることを考えれば、これだけの膨大な農業用水を、舟を通すたびに排水し無駄にしていくことはありえないと考える。

当時の土佐藩の経済事情からすれば、水運も大切であるが、まずは米の生産量を増加させることが優先される。そうなれば、必然的に傾斜水路は短くし、水を節約せざるを得ない。このような理由で、荷の積み下ろしは多少面倒で労力がかかっても、まずは農業用水を確保するために、落としの傾斜水路を短くしたのではないかと考えたのである。結果的に新川の落としのおかげで、新川は物資の中継地となり町は在郷町として栄えた。この仮説が正しいかどうかはもっと科学的に検証してみないとわからない。そして、急傾斜の「落とし」を構築した理由もひとつだけとは限らない。先にあげた理由のいくつかが複合して、様々な事情で「新川の落とし」が誕生したのだろう。最終的に、「落とし」の工事を決断し、それを命じた兼山だけが、その深い理由を知っているのだろう。いずれにしても今回の調査で、この仮説に至るヒントをいただいた、地域の古老の皆様に感謝申し上げたい。

#### 5、おわりに

兼山の企画展を通じ、地域の皆様や来館者の皆様に、多くのことを教えてもらい助けていただいた。その中には、かつて新川に暮らし、水運業を通じて旧吾北村の開発の土台を築いた、森岡茂次郎氏に縁のある方々もいる。そのような地域の皆様から得た様々な協力や情報により、それがやっと「新川の落とし」の模型となって結実した。今年の社会科見学の際には、小学生への兼山の授業で、この「新川の落とし」の模型が、「わかりやすい!」と好評で、教材として極めて有効であることが実証できた。今後も社会科見学時の教材を開発するためにも、地域に足を運び、地域の歴史を掘り起こしていきたい。

## <筆者が作製した明治30年代の「新川の落とし」の模型>



〈『弘岡井筋絵図』(オーテピア高知図書館平尾文庫蔵)〉



# 【参考文献】

小田玉城編 1915『西分村史』 松野尾儀行 1893『南海之偉業』開成舎 春野町史編纂委員会編 1976『春野町史』 春野町立郷土資料館 2001『堰と用水路』 春野町教育委員会 1987『唐音』

# 第3章 山村・峠を歩く

本章では、史料の少ない高知県西部の山間地域の歴史を、歴史地理学や民俗学の方法論で分析する。 『長宗我部地検帳』や中世文書の再検討、古道調査に基づく戦前の交通・流通の復元など断片的な史料から、地域の歴史を解き明かす方法論を提示する。

## 「山の領主・土佐上山氏の支配領域とその構造」

目良 裕昭

# 1、はじめに

鎌倉幕府の崩壊からおよそ 60 年にわたり打ち続いた南北朝の動乱は 14 世紀末に一旦収束するが、この間、地域社会の自立化動向が顕著となった。都市・村落自治の進展、貨幣・信用経済の発展、列島外地域との多様で広域的な交易の展開、芸能・職能伝承の成立など、15 世紀にかけて社会全体の在り様は大きく転換した¹。このような状況下において、海や山を地盤とする地域領主は、縄張りである山海の産物を管理・用益し、当該期に発達した河海の交通・流通網をつうじて商人や金融業者、交通業者らが形成したネットワークにも積極的に関与して、武力を養い、経済力を蓄え、海域や山間地域で支配・活動領域を形成していったのである。

中世後期、列島で地域経済圏と地域を結ぶ流通網が確立し、政治面でも多様な形で地域的権力編成が進行していくなかで、地域領主の領域支配体制や財政構造、活動実態などを解明し、これを総体として捉えて守護や大名権力等との関係、地域交通・流通との関わりを検討していくことは、地域の視座から中世社会を捉え直すうえで不可欠な作業である。しかしながら、以上の問題関心をもって研究に取り組む岸田裕之や川岡勉らが指摘するように<sup>2</sup>、山の領主に関する研究は史料の制約もあって十分に進んでいない現状にある。

こうした課題は筆者がフィールドとする土佐国でも同じく有するが、研究の視点と方法を見直し、中世文書の再検討、城郭や村落、石造物などの発掘調査結果の活用、近世以降の文書や地誌、絵図の利用などを図っていけば、史料の不備を補い、山の領主の実像に迫ることができると考える。そこで本稿では、土佐西部幡多郡の山間地域に蟠踞した上山氏を事例に、成立過程と支配領域の構造を解明する作業をつうじて、その実践的考察を試みる。

## 2、上山氏の成立と上山郷

上山氏の名字の地である上山郷の様子について確認できる最も古い史料は、16 世紀末、天正 10 年代に実施された土佐惣国検地の仕直し検地として慶長 2 年 (1597) におこなわれた検地の結果である。『幡多郡上山郷地検帳』として 7 冊にまとめられ、『上山地検七帳』(以下、『七帳』と略記) とも呼ばれている <sup>3</sup>。『七帳』には、上山氏の所領だけでなく、一族・給人らの給地や扣地なども含まれており、長宗我部氏に従属する以前の旧支配領域をおおむね引き継いだ地域が上山郷とされていたことがわかる(図 1)。

『七帳』に登録される上山郷の郷域は、現在の高岡郡四万十町西部(大正・十和地域)と四万十市北部(後川上流域)にひろがり、北幡(幡多郡の北部を示す)と呼ばれる地域にあたる 4。全域が山林に覆われて平地はほとんど無く、集落は東西に蛇行する四万十川とこれに流れ込む梼原川、久保川、長沢川や後川などの中小河川の沿岸域に形成される。耕作面積は狭小で、製材や木材加工製品の製作、製炭といった山の生業で成り立ってきた地域であり、中世には木挽きや檜物師、轆轤師、炭焼きなどの職能民が山々を舞台に活動していたことは間違いない。

中世上山郷の変遷と上山氏の成立過程については、『大正町史 通史編』(以下『町史』と略記) など

自治体史でも述べられているが $^5$ 、見直すべき点もあるため、江戸後期に編纂された土佐国の地誌『南路志』などに収載された寺社の由緒書きや棟札を参照しながら、あらためて跡付けてみたい $^6$ (以下、括弧書きで示すアルファベットは表 $^1$ に対応)。

上山郷の中心地であり、上山本村とも呼ばれた田野々村には、上山氏の菩提寺や上山郷の郷社があり、 以下のような記録が残されている。菩提寺である五松寺の寺記は、「開基建久年中、田那邊別當旦増其子

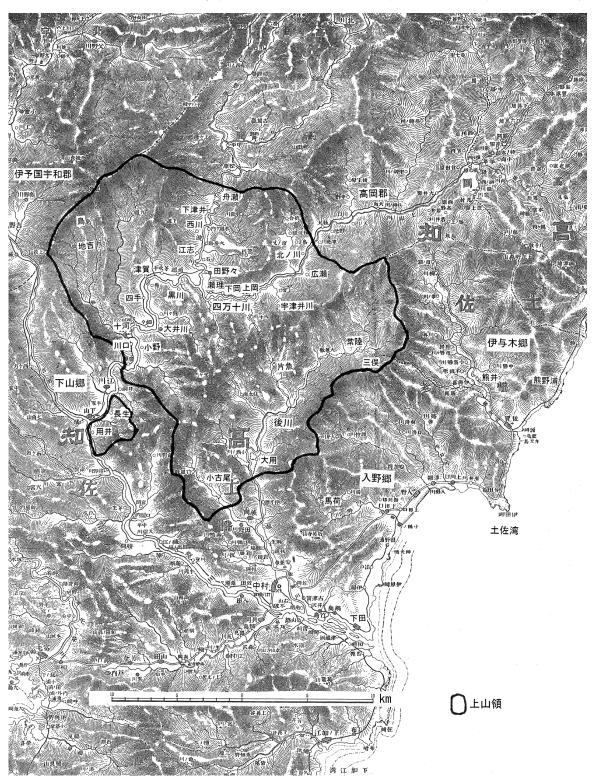


図 1 中世上山郷とその周辺地域 (『日本歴史地名大系第40巻 高知県の地名』(平凡社、1983年) 付録地図に付記)

#### 表 1 中世上山郷の領主が関与した寺社造営・修築関係の棟札等一覧

	和暦(西暦)	地域	寺社	造営·修築主体	巻数
А	応永17(1410)	上山郷 田野々村 (四万十町大正)	熊野三山権現	大檀那真方中将四代孫田那部別當旦増・嫡子永旦・ (中略) ・道圓・出羽左衛門尉重正	巻33
В	応永17(1410)	伊与木郷 熊井村 (黒潮町熊井)	熊野三所権現	大檀那真方中将四代孫田那邊別當旦増・嫡子永旦・ (中略)・同(嫡子)道固(圓の縁記)・出羽左衛門重正	巻28
С	応永35 (1428)	上山郷 田野々村 (四万十町大正)	熊野三山権現	出羽入道沙弥道圓・出羽左衛門重正	巻33
D	応永35 (1428)	伊与木郷 熊井村 (黒潮町熊井)	熊野三所権現	出羽入道沙弥道圓・家嫡出羽左衛門重正	巻28
Е	嘉吉2 (1442)	上山郷 下津井村 (四万十町下津井)	仁井田大明神	大檀那藤原重正	町史 史料
F	享徳2 (1454)	上山郷 田野々村 (四万十町大正)	熊野三山権現	大願主出羽左衛門重正、願主藤原重泰	巻33
G	享徳2 (1454)	伊与木郷 熊井村 (黒潮町熊井)	熊野三所権現	出羽左衛門重正	巻28
Н	不明(15C半ばヵ)	上山郷 北野川村 (四万十町大正北ノ川)	宝積山歓喜寺	願主上山郷領主田那部出羽左衛門重正	巻33
I	永正10(1513)	上山郷 四手村 (四万十町昭和)	三島大明神	大願主中平住家之上山家藤原安重	巻33
J	享禄3 (1530)	上山郷 田野々村 (四万十町大正)	熊野三山権現	藤原朝臣藤兵衛丞義重	巻33
К	享禄3 (1530)	伊与木郷 熊井村 (黒潮町熊井)	熊野三所権現	正玉沙弥	巻28
L	天文16(1547)	上山鄉 四手村 (四万十町昭和)	三島大明神	藤原朝臣上山藤兵衛尉義重・同藤次郎質(資ヵ)重・ 同左衛門尉重貴・同源五重家、 造立本願昌玉・藤原朝臣中平右馬助重則・ 同其子源七郎・同與三郎・同源左衛門尉綱久	巻33
М	弘治3 (1557)	上山郷 田野々村 (四万十町大正)	熊野三山権現	大檀那藤原資重・嫡子弥陀保子丸・二男重家・ 義重入道・沙弥良範	巻33
N	弘治3 (1557)	伊与木郷 熊井村 (黒潮町熊井)	熊野三所権現	大檀那藤原資重・嫡子弥陀保與丸	巻28
0	天正 6 (1578)	上山郷 四手村 (四万十町昭和)	三島大明神	上山藤次郎氏重・同大官左近大夫重高・ 松岡左衛門佐重吉・中平左衛門大夫重綱・ 同庵室隠岐介重房・大井川名本七郎五郎	蠹簡 409
Р	天正10(1582)	上山郷 田野々村 (四万十町大正)	熊野三山権現	大檀那上山右衛門介藤原朝臣氏重	巻33
Q	天正10(1582)	伊与木郷 熊井村 (黒潮町熊井)	熊野三所権現	大檀那上山右衛門佐藤原氏重	巻28
R	慶長4 (1599)	上山郷 四手村 (四万十町昭和)	三島大明神	藤原朝臣中平六之進重良・其子正千代丸・ 名本宮崎吉兵衛	巻33

注)出典は、『土佐国史料集成 南路志 第三巻』(註 6) に拠った. ただし、EとOは収載されていない棟札であるため、Eは『大正町史 資料編』(註 5) に、Oは『高知県史 古代・中世史料編』(註 9) 所収の「土佐国蠧簡集」に、それぞれ拠った. また、一部他資料との校合を行った.

永旦、八嶋兵乱の砌讃州江渡り、夫ゟ當国ニ来上山領主ト成」と記し、田辺別当家の旦増(熊野三山の 熊野別当湛増)の子である永旦が治承・寿永の乱に際して讃岐国を経て土佐国に来着し、上山郷の領主 になったと伝える。郷社の熊野三山権現(現在の熊野神社)の棟札(A)にも、永旦が建久元年(1190) に紀州の熊野権現を勧請したとの由緒書きがあり、大檀那に「田那部別當旦増嫡子永旦」以下「出羽佐 衛門尉重正」まで10代にわたる嫡流を記している。 また、上山郷南東部から佐賀越と呼ばれる峠を抜け、海岸部の伊与木郷に出る道の沿線に建つ熊井村の熊野三所権現(現在の熊野神社)にも、紀州の熊野権現を勧請したという由緒に関連して湛増にまつわる以下のような伝承が残る。源氏方に反して平氏方に転じたため、寿永年中の平氏没落により身の置き所が無くなって漂泊した末、伊与木郷の南岸に辿り着いて上陸し、「夫より西の方五十町はかりに鎮座なし奉」ったという。

『町史』は、湛増が平氏方に味方した史実が無いことをはじめ、これらの記録について『吾妻鏡』や古記録、旧自治体史等を引き、そのまま事実とは認められないとする。ただし、『十和村史』の「注意されるのは両伝承(五松寺と熊野三山権現の記録、筆者注)に『上山領主』とあることであって、古代末上山郷の発展の成果として、いわゆる開発領主が成長してきている」との記述に注目しており「、この点については、古代末、田野々村を拠点に上山郷域を開発した領主が存在したであろうことは首肯され、国衙の支配権が及んでいたかどうかは不明だが、そうであれば郷司職などに補任されていたかもしれない。

永旦が湛増の子であるという記録も確かな史料には見えず、熊野三山との関係を誇示するために創作されたものと思われるが、こうした伝承は、上山郷もしくはその郷域の一部が熊野三山の荘園や社領となっていた時期があったために生まれた可能性がある。中世前期には、熊野三山に寄進された荘園や造営料国などが畿内・東海を中心に列島各地に存在し<sup>8</sup>、土佐国でも久安5年(1149)、長岡郡吾橋山の開発領主である頼則・盛政らが長徳寺領として定めた土地を「熊野権現」に施入しており(『土佐国蠧簡集木屑』17・47号)、延慶2年(1309)には「熊野御領」であった香美郡の大忍庄槙ノ山と山田韮生山の境界を定めたとする記録が残る(『土佐国蠧簡集木屑』31号)<sup>9</sup>。いずれも山間部の荘園であり、上山郷内に開発領主が熊野三山に寄進した土地や田辺別当家の進出により経営されていた土地があったとしてもなんら不思議ではない。

15 世紀前半の応永年間、二度にわたって田野々村の熊野三山権現を造営・修築した道圓と出羽左衛門 財重正は父子と考えられ (D)、南北朝の動乱を経て上山郷に支配領域を形成した山の領主とみなされる。 道圓と重正が上山郷の開発領主や田辺別当家に連なる一族であったかは定かでないが、応永 17 年 (1410) に打ち付けられた棟札 (A) は、山間部に浸透していた熊野信仰の宗教的権威を利用し、湛増の嫡流に 結び付けることで領主としての正当性を示そうとしたのであろう  $^{10}$ 。上山郷の領主が熊野三山と湛増に まつわる由緒を重視していたことは、 $15\sim16$  世紀をつうじて支配領域外にある熊井村の熊野三所権現を 修築している点からも明らかである (B G Q など)。熊野三山権現の修築と同じ年に実施し、修築主体に 「家嫡」 (D) や「嫡子」 (N) と記していることを鑑みれば、家督継承など重要な政治的変化に際して 修築が企図されたと考えられる。

重正はその後、嘉吉2年(1442)に上山郷北部にある下津井村の仁井田大明神(現在の仁井田神社、写真1)を勧請し(E)、享徳2年(1454)には嫡子とみられる重泰とともに熊野三山権現を修築している(F)。東部の北ノ川村にある歓喜寺には、重正が長男の長兵衛尉(重泰カ)に田野々城を譲って北ノ川へ移り、歓喜寺を建立したとの寺記も伝わる(H)。15世紀半ばにかけ、上山郷の領主として確かな地歩を築いていった様子が看取されるとともに、下津井村や北ノ川村が

重正の代に上山郷に組み込まれた可能性を示唆する。



写真1 四万十町下津井の仁井田神社

16 世紀に入り、修築主体として登場してくるのが藤兵衛丞義重である(J)。義重は上山氏を名乗るが(L)、道圓-重正-重泰と続いた道圓流領主とのつながりはよくわからない。ただし、義重以降の上山氏当主は、上山郷西部の三島大明神(現在の三島神社)を定期的に修築しており、その理由として道圓流領主の勢力が西方の四手村や大井川村などに侵出し、16 世紀初めまでにはこれを編入して一族を配置したことが推測される。

永正 10 年 (1513) に造営された三島大明神の棟札には「大願主中平住家之上山家藤原安重」と記されており (I)、「中平に住まう上山家の藤原安重」と読み取れる。中平は四手村の字で中平氏の本領であることから、安重は上山姓を名乗るようになっていた道圓流領主の近親で、四手村を根拠地とする中平氏に送り込まれた蓋然性が高い。安重は上山氏の領域支配体制のなかで重要な位置を占めていたと思われ、その子とみられる義重が道圓流領主の家督を巡る何らかの事情(継嗣がいなかったか継承権の争いがあったか)により、上山氏当主の座に就いたのではなかろうか。

義重流上山氏は、16世紀に義重-資重-氏重と代替わりを重ねながら、土佐一条氏や長宗我部氏との関係を築きつつ、上山郷の支配領域を維持しつづけた。その様子を知ることのできる一次史料はほとんど伝存しないが、以下のような記録が残っている。

先に見た歓喜寺の寺記には、「先年上山之領主」であった重正に対して「一條様ゟ、入野郷之内馬荷村、下山之内用井村解地、則北ノ川へ引越、宝積山を居城二構住居、以後元親公に随う」と記される。重正が活動したのは15世紀前半であり、時代は合わないものの、『長宗我部地検帳』には入野郷の馬荷村と下山郷用井村周辺に上山氏の一族・給人の給地が登録される。両地域が上山氏の支配領域に入っていたことは間違いないため、これらの土地は重正ではなく、16世紀に一条氏に従属した義重流上山氏に与えられ、のちに従った長宗我部元親にも引き続き領有を認められたのではないだろうか。寺記を記すにあたり、歓喜寺を造立した重正の事歴と結び付けられた可能性がある。

また、愛媛県北宇和郡鬼北町延川の白王天満神社に所蔵される永禄 13 年 (1570) の棟札には、永禄 11 年春、伊予国南部の宇和・喜多両郡を境目として一条・宇都宮方と毛利・河野方の戦いが繰り広げられた際、郡境の高島に一条方の「土州衆・三間衆・両山衆」が在番していたことが記録される <sup>11</sup>。「両山衆」が北幡の上山・下山の国人衆を指すことは先学の指摘するところであり <sup>12</sup>、永禄 10 年頃に喜多郡を押さえて毛利・河野方と対峙した一条・宇都宮方の一手として上山衆が動員されていたことがわかる。

一連の戦いは結果的に毛利・河野方の勝利に終わり、一条氏は伊予国から撤退し、以後その勢力を衰退させていった。数年後には一条氏家中で「家老衆」と「国人衆」の内紛が勃発し、これに介入した長宗我部氏が幡多郡を実質的に支配するようになる(『長元記』)<sup>13</sup>。上山氏は「国人衆」の一人としてその名が見え、内紛の前後に長宗我部氏に付き従ったとみられる。後で触れるが、『七帳』等の土地登録状況や関係史料を見れば、上山氏は旧領のほとんどを支配地として認められたと考えられ、長宗我部氏が豊臣秀吉に降伏し、土佐一国の領有のみを許されたあともこれを大きく減らすことなく、支配を任されていた。

#### 3、上山氏の支配領域とその構造

それでは、中世後期をつうじて形成された上山氏の支配領域(以下、「上山領」と表記)はどのような構造を有していたのか。「上山郷給人目録」(以下、「目録」と略記)と呼ばれる史料をもとに、在り様や特徴を見てみることにしよう。

「目録」は、『七帳』が編纂されてから約3年後の慶長5年(1600)2月4日に作成された、上山領内の給人等の知行高一覧である(『土佐国蠧簡集』726号)。「上賀入」以下、43の給人等が列記され、末尾

には38人の「侍」、3人の「大工」(番匠)、2の「寺領」で構成されることが記される。これを『七帳』 等の地検帳に記録された登録人や給地等の分布と照合すれば、上山氏の支配体制や上山領の構造を明ら かにする基礎資料とすることができる(表2)。

表 2 「上山郷給人目録」に記された給人等の知行高と『長宗我部地検帳』の登録状況

П	登録給人等		知行高				『長宗我部地検帳』の登録状況		
			反	代	歩		居住地·所在地	給地等	
1	上加入 (上山加賀入道)	11	3	18		勺	田野々村 (四町大正)	瀬理村(四町瀬里)に3筆の給地 大安寺領・番匠弥五良給地をのぞく大用村全域を給地	
2	上山惣兵衛	18	3	38	2				
3	上山蔵人	6	6	44	3		田野々村	津賀村(四町津賀)・戸口村(四町昭和)を一円的に給地	
4	上山十兵衛	8	7	30			田野々村	上岡村(四町上岡)を一円的に給地(「主土居」有り) 北ノ川村に18筆の給地・扣地	
5	上山助兵衛	5	4	40			十河内戸川村(四町戸川)	戸川村・小城村 (四町古城) を中心に約52筆の給地・抱地 と110筆以上の作地・扣地	
6	上山賀兵衛	3	8	14		勺	十河内大野村 (四町十川)	大野村・川口村(四町十和川口)等に約145筆の作地・扣地 十河内鍋谷の扣地に「トゐ」(土居)有り	
7	喜多藤右衛門	11	1	30	4				
8	森野	3		8	4	勺			
9	森野弥五郎	5	2	15	4		十河内烏村 (四町古城)	烏村・地吉村に75筆の給地、江志村に20筆の給地が散在	
10	森野監物	1		1				下山郷長生村(四市西土佐長生)を一円的に給地 下山郷江川村(四市西土佐江川)に2筆の給地	
11	中野孫十郎	1	9	44		勺	地吉村 (四町地吉)	地吉村に52筆の給地を有する	
12	十川弥四郎	2	5	23	5				
13	新屋弥吉	3	8	18	1				
14	宮脇弥八郎	1	6	1	5		広瀬村 (四町弘瀬)	広瀬村に13筆・ハリ木村 (四町上宮) に5筆の扣地 田野々村「カチヤシキ」にも「主居」の記載有り	
15	奥助丞	1	5	21				北川カラステ村(四町烏手)に8筆の作地	
16	喜多源十郎	2	8	33	5	勺	喜多川村(四町大正北ノ川)	喜多川村に15筆の作地・扣地	
17	東市蔵	1	9	22	5	勺			
18	中江五郎右衛門	2	5	7	3	勺	田野々村	大井川村に25筆以上の作地・扣地	
19	敷地助之進	2	4	29	5	勺	田野々村	大井川村に17筆の作地・扣地カ(「介進」表記)	
20	中平六之進	3	7	16	2	勺	四手村 (四町昭和)	四手村に11筆の作地・扣地	
21	同(中平)惣十郎	1	8	5	3				
22	上山市兵衛	2	3	13	2		田野々村		
23	奥勘兵衛	1	9	43	4				
24	松岡又左衛門	2	8	7	4	勺	舟瀬村 (四町下津井)	舟瀬村に4筆の作地	
25	南彦五郎	2	2	15		_			
26	林小兵衛	2	8	28	4				
27	宮﨑吉兵衛	2	9	28	2	勺	大井川村 (四町大井川)	大井川村の名本 大井川村に46筆以上の作地・扣地	
28	小野源五郎	4		47		勺	小野村 (四町小野)	小野村の名本 (「名本ヤシキ」に居住) 小野村に61筆の作地・扣地	
29	小野源三郎	1	7	32		勺	小野村	小野村に22筆の作地・扣地	
30	下津井磯之進	3	3	45		勺	下津井村 (四町下津井)	下津井村の名本 下津井村に23筆の作地・扣地	
31	同(下津井)市太夫	1	4	9	1	勺	森河内村 (四町大正中津川)	森河内村に8筆の作地・扣地	
32	古尾将監	1	7	23			小古尾村 (四市古尾)	小古尾村の名本 (「名本ヤシキの上」に居住) 小古尾村に13筆の作地・扣地	
33	南権之進	2	4	31	2				
34	常陸七兵衛	4					常陸村 (四市常六)	常陸村に10筆の作地・扣地	
35	村尾九兵衛	2	2	20		勺			
36	村尾彦兵衛	4	3	14	2				
37	黒川惣三郎	4		19	1		黒川村 (四町里川)	黒川村に14筆の作地・扣地	
38	竹内弥十郎	1	2	26	3	勺	用井村 (四市西土佐用井)	下山郷用井村に16筆の抱地が散在 大用村にも3筆の作地と「ゐ」(居)の記載有り	
39	番匠弥介	1	4	5	3		江志村 (四町江師)	江志村に約17筆の給地が散在 広瀬村に3筆の給地 大井川村に1筆の給地	
40	同(番匠)平太		7	20	5			江志村に2筆・西川村(四町西ノ川)に4筆の給地	
41	同(番匠)助左衛門		7	3			宇津井川村(四町打井川)カ	番匠の記載なし 鍛冶藤左衛門の居住地と隣接	
42	護松寺 (五松寺)	3	4	44	2		田野々村	宮の谷川流域をのぞく四手川村(四町希ノ川)全域を寺領 田野々村に3筆の抱地	
43	大安寺	1	7	8	2		大用村 (四市大用)	大用村に17筆の寺領が散在	

- 注1) 「上山郷給人目録」と『長宗我部地検帳』の両史料に同一の名義で記録されるのは、5上山助兵 衛、10森野監物、39番匠弥介など一部に限られるため、照合に際して以下の作業をおこなった.
  - ①16 喜多源十郎や 28 小野源五郎、37 黒川惣三郎などは、『長宗我部地検帳』に姓の表記無しで登録されるが、喜多川村・小野村・黒川村に居住し、村内に多くの土地の権利を有していることから、同一の給人として比定した.
  - ②15 奥助丞や 24 松岡又左衛門、27 宮崎吉兵衛などは、姓の表記が無く、居住地・給地等も名字の地を示すような記載は無いが、上山領の検地結果のなかに同じ名義が見えず、同一の給人である蓋然性が高いことから比定した.
  - ③9宮脇弥八郎や38竹内弥十郎などは、『長宗我部地検帳』に①②と同様な記載がなされるとともに、複数の村に登録人として記録されるため、土地の権利を多く有する村に居住するなど、同一の給人である可能性が高い者を比定した.

なお、史料の再検討や新出史料の発見によって、③については見直しが必要になり、空欄部分についても明らかになる可能性があることを付言しておく.

注 2) 村名に付した括弧書きは現在の住所表記で、四万十市は「四市」、四万十町は「四町」と略記する.

「目録」の配列は、記載順が知行高の多寡と比例せず、1~6に上山氏一族が記載されることも鑑みれば、当主との関係性を一定程度表していると考えられる。筆頭には当主もしくは前当主の1加賀入道が記され、惣領とみられる2惣兵衛がつづく。加賀入道は上山氏の本拠である田野々村の「トイ」(土居)に居住しているが、所領は上山領南端にある大用村の大部分を給地とする以外は、田野々村と瀬理村に若干の給地が登録されるのみである。なお、先行研究では上山領に広範に存在する「上山分」を上山氏の所領と考えてきたが、平井上総は①上山氏当主とその一族の給地が「上山分」とは別に登録されていること、②慶長二年検地の全体高と「目録」の給人知行高を比較すると後者が半分以下に過ぎないことから、これに疑問を呈した <sup>14</sup>。筆者は、加賀入道が慶長初めまでに上山郷の庄屋職に任じられていることをふまえて(『土佐国蠧簡集』673号)、「上山分」を上山氏の所領ではないが支配を任された土地と考えている。なお、長宗我部氏の支配機構における庄屋制の職務は、地域維持にかかる年貢収納・治安維持・井戸や道路整備、給人支配にかかる土地の売買や給人に対する土地の打ち渡しなど、地域の代表者として広範な役割があった <sup>15</sup>。

惣兵衛は地検帳に登場しないが、『七帳』等を子細に見ていくと、加賀入道から次の当主への代替わりにかかる以下のような動静が浮かび上がってくる。上山氏一族で「目録」には載らずに『七帳』に登録人として見えるのが、惣吉良と熊法師である。惣吉良は下岡・津々羅川・三俣・奥野々川・十河内大の・十河内川口の村々を一円的所領としており、惣の字を持つことから考えても加賀入道の継嗣であったと想定される。しかしながら、下岡・津々羅川の2村をのぞいては登録人の下部に「上地」と記され、給地を返上もしくは召し上げられていた。一方、熊法師は幼名であるにもかかわらず、本拠の田野々村に近い瀬理村と片魚村を一円的所領としており、当主に近い一族であったことは間違いないであろう。

これらの事実から推測すれば、上山氏惣領の惣吉良が文禄末~慶長初め頃に何らかの理由で早世もしくは失脚し、惣吉良の子弟であったろう熊法師が継嗣になったと考えられる。慶長2年、上山郷の庄屋として加賀入道とともに記される四郎兵衛は熊法師の元服名とみられ、「目録」が作成された慶長5年には惣吉良の所領も引き継ぎ、18町を超える知行高を有する惣領として惣兵衛を名乗るようになっていた可能性が高い。

その他の上山氏一族を概観すると、四万十川主流域に存在する北ノ川・上岡・津賀・川口・戸口とい

った村々に多くの給地や作地、扣地を抱えており、3 蔵人・4 十兵衛・22 市兵衛の3人は田野々村に屋敷を構えて当主を身近で支えていた。

上山氏につづいて記載される喜多氏は北ノ川(喜多川)村を名字の地とする一族で、7藤右衛門は『七帳』には見えないが加賀入道に並ぶ約 11 町の所領を抱え、16 源十郎は田野々村に屋敷を構えて活動している。北ノ川村は先に見た歓喜寺の寺記に出羽左衛門重正が移り住んだと記され、重正の墓があるという伝承も残るように(『町史』)、上山氏にとって重要な村であった。所領の大きさを考えても、喜多氏は上山氏から分かれて北ノ川村を治めるようになった一族の可能性が高く、譜代として惣領家を支えていたと思われる。

森野氏は一族の知行高を合わせると9町を超える所領を有している。9弥五郎は上山領西部の烏村と地吉村を地盤とし、檮原川沿いの江志村にも給地をもつ。江志村や地吉村は番匠の活動拠点であり、江志村には「筏戸」のホノギも見える。弥五郎は番匠らを使って木材の伐出・加工を差配し、木材流通を管理する立場にあったと考えられる。10監物も一族としてこれに関わっていたとみられ、拠点が上山領西端に位置する下山郷長生村にあることから、四万十川河口部へ流す木材を管理していたと想定される。

おなじく上山領の山林経営に関与していた給人とみられるのが、18 中江五郎右衛門と 19 敷地助之進、14 宮脇弥八郎である。五郎右衛門と助之進は大井川村に、弥八郎は広瀬村に作地・扣地を有しているが、いずれも番匠や鍛冶の土地が登録される村であり、大井川村には筏乗の給地が存在するなど、製材と木材流通の拠点として機能していた。彼らは給地を持たず、田野々村に居住(弥八郎は広瀬村にも居住の記載あり)していることからみて、上山氏が管理する山林で、その命を受けて山仕事や筏流しなどに従事する人々を差配していたと考えられる。また、弥八郎は田野々村の「カチヤシキ」(鍛冶屋敷)に居住しており、鍛冶から給人となったテクノクラートの可能性がある。

20 中平氏・24 松岡氏・27 宮﨑氏は、三島大明神の棟札に修築主体として記される。中平氏は代々、上山氏の偏諱である重の字を受けて重則一重綱一重良(六之進)と名乗っており、先に見た義重流上山氏の成立過程も考慮すれば、上山氏から分かれて四手村の中平氏に入った一族である可能性が高い。宮崎氏は四手村の南に位置する大井川村の名本であり、吉兵衛は大井川村に 46 筆以上の作地・扣地を有する。このように、修築は基本的に領主の上山氏、周辺地域を地盤とする中平氏と大井川名本が担っていたが、天正6年の棟札に記される松岡氏は下津井村の枝村である舟瀬村に居住している。舟瀬村は上山郷の北端、檮原川沿いにあり、舟津として機能した小村と考えられることから、松岡氏は上山領の河川流通に関与していた給人と想定され、四万十川の中州に建ち、周辺を航行する人々から崇敬されていた三島大明神の施工主の一人に名を連ねたのであろう。

「目録」の後半には在地の名本を務めた給人が記載される。大井川名本の宮崎氏、28・29 小野名本の小野氏、30・31 下津井名本の下津井氏、32 小古尾名本の古尾氏、34 常陸名本の常陸氏、37 黒川名本の黒川氏である。これらは上山領の周縁部にある村々で、上山氏の版図拡大にともなって支配領域に組み込まれた地域であり、名本は在地の小領主から上山氏の支配下に入り、ひきつづき村の支配を任されたとみられる。ただし、村の土地の登録人欄には「上山分」と記され、名本は作地・扣地しか持っていないことから、旧領は上山氏に上知したのであろう。上山氏の命を受け、名本を務める村の年貢収納や井溝・道路整備などの地域維持にあたったと考えられる。

「侍」につづき「大工」として番匠が記されるのは特徴的である。知行高は多くないが、単なる職人ではなく木工技術者集団の長となるような存在であったに違いない。39 弥介は江志村に居住する番匠で、広瀬村と大井川村にも給地をもつ。40 平太も江志村とこれに隣接する西川村に給地を有する。41 助左衛門は宇津井川村に10筆の抱地が登録され、番匠とは記されないが同村には「番匠屋しき」のホノギがあり、番匠の拠点となっていた。

先にも触れたが、江志村や大井川村、 宇津井川村など番匠が登録される村には 鍛冶や筏乗の土地も見えることから、周 辺の山々から伐り出された木材の集積地 となっており、これらの村で製材・加工さ れて積み出され、あるいは筏に組まれて 川流しされていたと想定される。

末尾に記載される「寺領」の寺はいずれも上山氏との縁が深く、上山領内で特別な地位を与えられていたのであろう。42 護松寺(五松寺)は先に触れたように田野々村に建つ上山氏の菩提寺であり、四手川村に寺領を与えられている。43大安寺は加賀入道が直轄地とする大用村の中

表3『長宗我部地検帳』に見える上山領の職人記載等一覧

村	鍛冶	番匠	その他
ハリ木村			・白王谷木屋ノ下 (ホノギ)
広瀬村		・番匠給 与兵衛 ・番匠弥介	
宇津井川村	<ul><li>鍛冶藤左衛門</li></ul>	• 助左衛門	・番匠屋しき (ホノギ)
田野々村	・カチヤシキ 弥八良		
江志村		· 番匠弥介 · 番匠平太	・筏戸 (ホノギ)
西川村		・番匠平太 ・番匠弥五良	
三俣村			・かちやノロ (ホノギ)
小古尾村 竹やしき		・番匠弥五良	
平串村			• 後乗勝衛門
大井川村	・かち (虫穴)	・番匠弥介	<ul><li>・かちやのまへ(ホノギ)</li><li>・山クビトキヤノ下(ホノギ)</li><li>・筏藤介</li></ul>
地吉村		・番匠彦七	
大用村		・番匠弥五良	
用井村	<ul><li>鍛冶</li></ul>		

心にあり、村の支配を担っていたと思われる。

以上、「目録」に記された給人等を検討し、上山氏の支配体制と上山領の実像に迫ることを試みた結果、次の三点を明らかにすることができた。

- 1. 上山氏の当主と一族、譜代の給人は田野々村とその周辺の村々、上山領の交通・流通の根幹を成す四万十川流域の主要な村々を押さえ、本拠の田野々村を中心とする領域支配体制を構築していた。加賀入道の土居廻には一族や譜代の給人が使用する屋敷があり、彼らは田野々村と自身の所領を行き来して地域支配にあたっていた。
- 2. 上山氏の勢力拡大にともない上山領となった周縁部の村々では、傘下に入った在地の小領主をそのまま置いて名本に任じることにより、新たな支配地域の安定を図っていた。
- 3. 江志村や大井川村などは木材の集積地となっており、番匠や鍛冶、筏乗などが活動し、山仕事や 筏流しに従事する人々の拠点であった。上山氏は森野氏を始めとして木材の伐出や加工、流通を差配す る給人を重用し、番匠を下位ではあるが一般の給人と同列に扱うなど、上山領の経済基盤であり、莫大 な権益を生み出す山林の経営を積極的におこなっていた。

## 4、おわりに

本稿では、史料的制約が多く研究の進んでいない中世の山の領主に関する検討を試み、上山氏を事例としておもに文字史料の再検討に取り組んだ。推論を重ねざるを得ない部分はあったが、不明な点の多かった成立過程を跡付け、支配領域の構造について一族・給人配置の在り様や山林経営の一端を明示できたと考える。

しかしながら、上山領内で確認される 中世城館の遺構、寺社に残る石造物など は検討材料として盛り込むことが



写真2 四万十川沿いの江師集落(旧江志村)

できず、執筆開始時には予定していた木材流通の実態を検討する作業についても時間的・紙数的制約から断念せざるを得なくなった。本来の目的からいえば甚だ不十分な内容となってしまったために、これら残る課題に関しては早い機会に別稿を期したい。

#### 【註】

- 1 網野善彦 2008『網野善彦著作集第十六巻 日本社会の歴史』岩波書店。
- <sup>2</sup> 岸田裕之 2001「国人領主の財政と流通支配―戦国時代の雲芸攻防における山間地域領主層の性格―」 『大名領国の経済構造』岩波書店、川岡勉 2006「中世伊予の山方領主と河野氏権力」『中世の地域権力 と西国社会』清文堂出版。
- <sup>3</sup> 『長宗我部地検帳・幡多郡上の一』(高知県立図書館、1964年)。なお、上山郷の検地結果は『七帳』のほかに、郷内の高山畠地を集成した『上山高山バタ地検帳』(天正 16年編製)が残る。
- 4 四万十町は「平成の大合併」により高岡郡窪川町と幡多郡大正町・十和村の3町村が合併して発足した自治体で、西部の大正・十和地域はこのときに幡多郡から高岡郡に編入された。
- 5 『大正町史 通史編』『大正町史 資料編』(大正町、2006年)。
- 6 『土佐国史料集成 南路志』第三巻(高知県立図書館、1991年)。
- 7 横川末吉 1984「古代・中世編」『十和村史』十和村。
- 8 宮家準 1992『熊野修験』吉川弘文館。
- <sup>9</sup> 『高知県史 古代・中世史料編』(高知県、1977年)。なお、本稿で使用する『土佐国蠹簡集』『土佐 国蠧簡集木屑』収録の史料はすべてこれに拠る。
- 10 阿波国南部、那賀川流域の国人領主である湯浅氏には紀州からの移住伝承があり、先祖書きに「田辺の別当湛増ニ与力」した者や「紀州熊野権現を勧請」した者が記される。このことについて、長谷川賢二は「湯浅氏一門の移住が事実とするなら、熊野信仰の誇張は違和感」があり、「阿波の在地社会における一定の存在感の主張の『道具』として熊野信仰が持ち出された可能性」を指摘する。長谷川賢二 2018 「阿波と紀伊の文化的交流〜熊野信仰に関わる往来と移住〜」『紀伊水道内海世界の港津と権力』中世都市研究会・徳島大会実行委員会。
- 11 「白王天満神社棟札」(愛媛県北宇和郡鬼北町延川白王天満神社蔵)。
- 12 石野弥栄 2000「戦国末期における西南四国の軍事情勢-永禄年間の「国郡境目」地域の合戦をめぐって-」『よど』創刊号、川岡勉 2004「永禄期の南伊予の戦乱をめぐる一考察」『愛媛大学教育学部紀要』 人文・社会科学第 36 巻第 2 号。
- 13 『長元記』(高知県立高知城歴史博物館山内文庫蔵)。
- 14 平井上総 2008「豊臣期長宗我部検地の実施過程」『長宗我部氏の検地と権力構造』校倉書房。
- 15 平井上総 2012「土佐国における庄屋制の成立」『戦国史研究』64 号。

楠瀬 慶太

# 1、はじめに

2018年8月18日、高知県四万十町の住民団体「奥四万十山の暮らし調査団」(武内文治代表)は、高知県四万十町(旧大正町)と黒潮町(旧佐賀町)で古道調査を実施した。前近代に上山郷(旧十和村・旧大正町)と呼ばれた地域と土佐湾岸地域の関わりを歴史的に研究する高知県立歴史民俗資料館の目良裕昭調査員(目良 2016)の提案を受け、約60年前まで使われた「佐賀越」の古道を歩いてみようというものだ<sup>1</sup>。調査に同行してくれた四万十町奥打井川地区の古老の「佐賀まで歩いて1時間半。打井川は山の中だが、

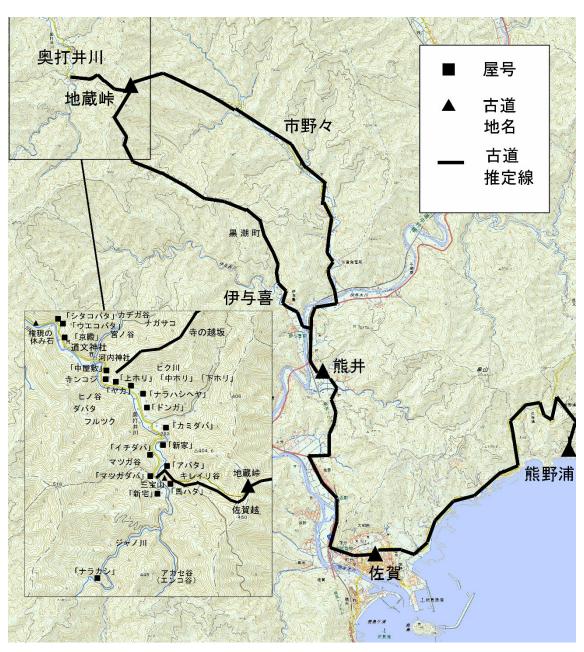


図1 佐賀越の古道と奥打井川の地名

実は海に近い『大正の玄関口』だった」との言葉が印象的だった。自動車による移動を前提とした現在の 道路交通網では、奥打井川地区は奥まった山間地というイメージだが、地蔵峠を越えれば黒潮町佐賀地域 の海岸部に出ることのできる地区で、旧大正町中心部の田野々へ向かう交通の要衝でもあったそうだ。

こうした古道の交通・流通の歴史は、時代の変化とともに忘れられつつある。本稿では、歴史資料から 打井川の概況を確認するとともに、地図と写真を用いて古道の調査内容を報告し、聞き取り調査も踏まえ た「佐賀越の民俗誌」を記してみようとするものである。

## 2、歴史資料に見る打井川地区

## (1)打井川の概況2

慶長 2 (1597) 年の検地台帳『長宗我部地検帳』(以 下『地検帳』) には「宇津井川村・宇津井河村」、18世 紀の『土佐州郡志』は「打井川村」、19 世紀の『南路 志』は「宇津井川村」と記載している3。明治22(1889) 年の明治の大合併により、22 村が合併して「東上山 村」、打井川村は大字「打井川」となった。 東上山村 は大正3(1914)年村名を改称し「大正村」、昭和22 写真1 奥打井川「奥組」の景観



(1947) 年に「大正町」、平成 18 (2006) 年には窪川町・大正町・十和村が合併し「四万十町」となって いる。

打井川地区は旧大正町の南東部に位置し、三方を標高 500m級の稜線で囲まれ、北部を四万十川が西流 する。北東は大正北ノ川・上宮、東は弘瀬、南東は黒潮町、南は四万十市、西は希ノ川、北西は上岡に接す る。集落の中央を打井川(全長約 8.5 k m)が蛇行しながら北西に流れ、四万十川に合流する。上流から奥 打井川・中打井川・口打井川の地区に分れ、高知県道(主要地方道)55号大方大正線が通り、奥打井川で 分岐する高知県道(一般県道)367 号住次郎佐賀線は標高 509mの「鳥打場」の裾を通り、四万十市に通じ ている。打井川盆踊りは町指定無形民俗文化財。大字打井川(ロ打井川【ロ】・中打井川【中】・奥打井川 【奥】の3行政区)のうち、今回の調査対象となった奥打井川は最奥の集落で、下組・中谷・宮組・奥組 (写真1) に区分されている。

#### (2)『地検帳』に見る打井川

中近世の打井川村の状況を知る史料はなく、近世初期の『地検帳』から打井川村の土地支配の断片を読 み解く。一部欠字があり確定的な数字ではないが、『地検帳』に記された田畑の土地所有者(給人)は47人 と3寺となっている4。土地所有者として上山分・上山氏が表記され、上山氏の支配地や長宗我部氏の直轄 地5となっている村が多い上山郷の中で、打井川村は上山氏の支配下になく 50 人近い給人(「抱」) が確認 できる。彼らは苗字を持たず、所有する土地の少ない給人層であることが推察できる。このような形態の 村は田野々村と打井川村のみで、上山郷では珍しい6。打井川村の給人には田野々村に土地を所有する者も いる。また、田野々村には高知城下など都市的機能を持つ場所に見られる「坂の者」(皮革製造や清掃など の生業に従事した職能民)が確認できる。後に紹介する田野々-打井川-佐賀をつなぐ流通の道が中世まで さかのぼれるとしたら、零細に見える給人層が田畑耕作だけでなく、物資流通など経済活動に関わり、個々

に力を持った可能性もある。

土地開発では、打井川村の『地検帳』には中世の開発名主に由来する「土居屋敷」や隣接する「門田」 (直営田)が確認できる。これらの地名から土佐国内の他の村々と同様、土居・門田を中心に谷水田の開 発が進んだことが分かる。土佐の山間部では、『地検帳』段階でも中世名主層が村々の土地を一円支配する 地域が多く確認できる。一方、打井川村では名主層による一円支配は確認できず、多数の給人が小規模な 土地を支配する形態を取っている。今後、『地検帳』記載地名の現地比定を詳細に行い、当時の景観を復元 することで、土地開発と分散的な土地支配の関わりを検討していきたい。

また、欠字があり確定数ではないが、『地検帳』の打井川村の屋敷数は34軒と2寺である7。後世の屋敷 数は 18 世紀初頭の『南路誌』(1704-1711 年) 47 軒、1743 年の『寛保郷帳』56 軒と比較するとか少ない。 『地検帳』で土地所有者数と屋敷数が大きくかけ離れているが、江戸前期に家数が増えたのであろうか。

『大正町史通史編』によると、江戸期の打井川村の庄屋宅は口打井川の小字「カドタ」にあり、老(おと な)役宅は奥打井川の小字「中屋敷」にあった。庄屋は長年永山氏が務め、嘉永年間以降は明治まで伊与田 氏が務めている。神社棟札から「年寄」「五人組頭」などの役もあったことが分かる。

## (3) 打井川の宗教

近世の打井川村の動向は古文書が少なく、断片的で ある。『地検帳』には寺院として奥打井川にある「興泉 寺」、中打井川の「カドタ」にある「吉祥庵」が確認で きる。「興泉寺」は、江戸中期の『土佐州郡志』に「興 善庵 禅宗」とあり、田野々村の「護松寺(五松寺)」 (『地検帳』では「悟性寺」)の末寺で、宗教面でも戦国 期から田野々との関わりがあったことが伺える。『大正 町史資料編』によると、元は小字「寺ノ越」にあって明 治8年ごろには授業場として使われていたが、現在は 写真2 奥泉庵の石像仏



小字「京殿」の道文神社境内に「奥泉庵」として移されている。庵 内には木造4体、石像2体があり、石像には「享保九」(1724年) 銘があり、「嘉永二」(1849年)の棟札も残っている(写真2)。「吉 祥庵」については江戸期の動向は史料からは分からないが、現在の 小字「カドタ」には高さ70撃ほどの五輪塔3基があることから『大 正町史資料編』は「吉祥庵」との関わりを指摘している。

神社については、『地検帳』に「宮ノナロ」のホノギが確認でき るのみで社殿の存在は文書上確認できない。江戸期については、地 誌や『大正町史資料編』記載の棟札類から当時の状況が推測できる。 『南路志』には「王子宮」(西ノ本)、「高治明神」(谷口)、「高治明 神」(宮カ谷)、「道文社」が記載されている。「王子宮」は小字「西 ノ奈路」にあった「皇子宮」(現在は口打井川の河内神社に合祀)に



写真3 道文神社

あたる。ロ打井川・奥打井川にある「河内神社」は江戸期には河内大明神と呼ばれ、『土佐州郡志』は「川

内大明神」、『南路志』には「高治明神」と記されている。「道文神社」(写真3)は江戸期には「道文権現」 と呼ばれ、木造狛犬の台座銘に「嘉永六」(1853年)、棟札に「安政五」(1858年)の墨書が確認できる。

## 3、古道を歩く

奥打井川からキレイリ谷(ウツボノ谷<sup>8</sup>)沿い右側の道を経て地蔵峠に至るのが佐賀越の古道であるが、 現在は林道整備などの影響で古道がほとんど残っていない。打井川は民話の里。道すがら地元の古老・本 山昌文さん(1944年9月生)からさまざまな民話を聞いた。

## (1) 奥打井川を歩く

**奥打井川の屋号** 奥打井川にはほぼ全戸に屋号(屋敷名)<sup>9</sup>がある。打井川上流から「新宅」「馬ハタ」「ア バタ(休み宿)」「マツガダバ」「イヌダバ」「新家(シンヤ)」「カミダバ」「ドンガ」「ナラハシヘヤ」「ヤカ」 「上ホリ」「中ホリ」「下ホリ」「寺ンコジ(寺ンコイ)」「中屋敷(バクチ屋敷)」「京殿」「ウエコバタ」「シ タコバタ」と呼んでいる。また「ジャノ川」の奥の「ナラカシ」と呼ばれる場所にも昔は屋敷が2軒あった という。『地検帳』に記載された「大タヤシキ」「ひかしやしき」「名本ヤシキ」などの屋号は全く確認され ない。江戸期に村役人の屋敷だったとされる屋敷は「イヌダバ」「中屋敷」「シタコバタ」と呼ばれている。

「シンタク」「中屋敷」「新家」などの屋敷名が見られる一方で特徴的なのは平地を表す「駄場(ダバ)」 地名が多く使われている点である。他にも、小字に由来する「京殿」「寺ンコジ」「馬ハタ」「マツガダバ」、 「小畠(畑)」の姓と関わりがある「ウエコバタ」「シタコバタ」があり、多様な様相を呈している。

**千賀三郎衛門の話** 祖父の話では、打井川の庄屋でもあった千賀(ちが)三郎左衛門は、猟師もしていて イノシシを 999 頭獲り終えた。1 千頭を取る前に祈願のためお四国回りをしている途中、突然犬に激しく 吠えられて眠たくなり、自分の鉄砲で犬を殺してしまった。その後、三郎左右衛門は足摺(土佐清水市)の 手前で山賊にやられて殺され、その地元で祭られたそうだ。三郎左衛門の屋敷は、屋号「シタコバタ」の位 置にあったとされる。

**埋蔵金の話** 打井川には 12 反の田んぼをつないだ先に小判が埋まっているという伝説があって、地元の人 で埋蔵金を探し回っている人もいたが、見つかっていない。

権現の休み石 田野々村の熊野神社(熊野権現)の勧請に関する逸話のある史跡で、大正地域には上岡、

小石、打井川の3カ所にある。『大正町誌』によると、建久元(1190) 年11月、熊野三社の別当田辺湛増の子・永旦は、3組に分かれて3方 向から熊野様を奉じて田野々村に入ったと伝わっている10。熊野浦から 熊井(旧佐賀町)にしばらく滞在し、上岡村を奥に入り芳川村を経由す る一行、松原(梼原町)から矢立峠を越え、小石(旧大正町小石)を経 由する一行、熊井から地蔵峠を越えて打井川を経由する一行の3組であ る。それぞれに一行が休んだという権現の休み石があって、伝承が残っ ている。打井川の休石は旧道側の大石で、側に榊が植えてあったが、県 道整備で旧道下の県道側に落下移動させたという。現在も県道沿いに大 石があり(写真4)、看板には「この石の上にあがるとにわか大雨にな る」と伝えられることから「雨降り石」と呼ばれること、「横に生えて 写真4 権現の休み石と榊



いる榊は、(熊野権現) 一行の中の一人が杖にしたものをおき忘れ、それが根付いたもの」と記されている。 **道文神社** 奥打井川にある南北朝期の尊良親王家臣・秦道文を祭った神社(写真3)。神社の看板や『大正 町誌』によると、南北朝期の1331年に起きた「元弘の乱」で鎌倉幕府の執権・北条高時によって土佐へ流 された尊良親王は、家臣の秦武文・道文を伴い、旧大方町有井川に住んだ。道文は親王の命を受けて京都 に行く途中、打井川小畑で病気になって亡くなったと伝わる。「道文様」の祭りは幡多・窪川地域からも参 拝客が訪れる祭りで、『大正町誌』は佐賀方面からは「地蔵峠」、旧大方町の入野・上川口方面からは「伴太 郎坂」、旧窪川町の窪川・仁井田方面は家地川から「寺の越坂」、旧大正町の北ノ川方面からは四万十川を 渡り「カイガヤシ坂」をそれぞれ越えて大勢の参拝客があったと記している。奥打井川と他地域との交通

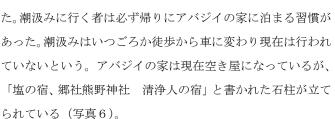
がよく分かる事例である。

塩の宿 『大正町誌』によると、四万十町大正(田野々)の熊野神社の秋大祭(11月12日)では、清浄人(しょうじょうど)と呼ばれる者が正副2人選ばれ、祭礼に関するご供物の一切をつかさどった。彼らは、祭礼の3日前から水垢離(みずごり)を取り(水行を行い)清祓いをして身を清めてから奉仕する。祭りで清めに使われたのが、旧佐賀町熊野浦から汲んできた「潮水」である。本山さんによると、熊野浦へ塩汲み(潮汲み)に行く者は、正副2人連れで11、11月9日に田野々を



写真5 現在は無住の「塩の宿」

出立し、打井川の渡しで四万十川を渡り、奥打井川から佐賀越の道を歩いて、熊井を経て佐賀の「熊乃屋」で1泊する。「熊乃屋」は大正地域の人たちがよく使う宿だったらしい。10日に熊野浦で潮水を汲んで担いで再び佐賀越の道を通り、奥打井川に到着するとアバジイの家(屋号「アバタ(休み宿)」)(写真5)で1泊し、11日に田野々へ向かった。『大正町史資料編』は、塩の宿に宿泊した際、庭の入口に特別に作った棚の上に潮汲みの竹筒を安置し、夜は「塩迎え」「さか迎え」と称して隣近所が集まって酒盛りをしたことが記載されている。アバジイとは秋田シゲキさんのことで12、97歳まで生きたが、病気のほとんどない人だっ



**三宝山(さんぽうさん)** 屋号「馬ハタ」の裏山(写真7)。 山頂に「三宝大荒神」の祠があったが、現在は河内神社に移している。祭神は大歳御年神(おうとしみのしのかみ)。昔は奥 打井川の家々が集まる秋祭りで、余興で相撲を取っていた。



写真6 塩の宿の石柱



写真7 右上の山が「三宝山」

材木搬出 戦前までは、材木(丸太)は河内神社下の打井川までは谷を堰留めて水で流し、その後は陸に 上げて馬車で打井川口まで出した。そこからは四万十川をイカダで流していたそうだ。山では木炭ガスで 移動製材をする人もいた。

**生業** 打井川の生業は、米・炭・硝煙・シイタケ。ミツマタは作っていなかった。シイタケは愛媛から商人 が買いに来ていた。戦後はあちこちにイモ畑があり、カライモを供出した。キビ飯も良く食べた。白米は 祭りの時などしか食べられなかった。

## (2) 佐賀越の古道を歩く

**峠道** 佐賀港は大阪方面との物流拠点になっており、熊井を経由して市野々から大正方面へ向かう山道(佐 賀越えの古道)は「大赤線」。大曲りもせず1本道で、佐賀についた大阪からの荷物を積んだ馬や牛がぎっ ちり通っていた。「ニナ」などの貝を佐賀の浜へ取りに行くこともあった。登り口付近の道は残っているが (写真8)、頂上までの道はほとんど残っていない(写真9)。頂上は平場になっており(写真12)、峠は地 蔵峠(首なしの「しゅむか地蔵」のある峠)と呼ばれる。佐賀方面への降り口は、市野々を通る道と伊与喜 に降りる道と2つがあった。打井川から佐賀への道はジャノ川を登りきった野重峠越え(ノジュウトウ、 馬之助の生まれたあたり)もある。



写真8 地蔵峠へ向かう佐賀越古道の登り口



写真9 道は草に覆われて断片的に残存

御神輿の話 打井川の河内神社の御神輿も、打井川の住民が佐賀から船に乗り、大阪を経由して京都で購 入し、佐賀越の道で持ってきたものだという。一行(3人)は大阪の宿で泊まったが、宿代が安かったので 大酒を飲んだらお金が足りなくなり、御輿の金が払えなくなった。そこで、部落の人がお金を出し合って 御輿代の借金を返したという話がある。

**炭俵6つ** 打井川から佐賀へと搬出したものとして 木炭があった。本山さんの父は白炭を作っていたが、 後に黒炭に変わった。炭俵6つを担って佐賀まで歩 いて持っていった。地蔵峠から市野々までは約1キ ロだった。奥打井川から歩いて1時間半ほどで到着

しゅむか地蔵 佐賀越の道の頂上付近(大正と佐賀 の堺付近、字佐賀越・地蔵山) の平地から少し上がっ た高所に石製のお堂があり、石の地蔵が4体置かれ 写真10 しゅむか地蔵

した。



ている(写真 10)。右から2つ目の小さな地蔵が「しゅむか地蔵」で、昔は首がなかったが、「かわいそう」 とのことで地元の人が首を乗せた。『大正町史資料編』には、首なし地蔵に地元の腕白小僧が「しゅむか、 しゅむか」と小便をひり掛けて遊んだことから、「しゅむか地蔵」と名付けられたとある。

**幻の道舗装** 佐賀越の道は、打井川の人には儲けになるが、佐賀の人には儲けにならない道。道を舗装する話が持ち上がったが、佐賀町長は「いらん」と言って舗装化は実現しなかったという(写真 11)。

**嫁入り** 打井川から佐賀へ嫁に行った人は多い。鳥打場を経由して上川口へ出る道もあった。上川口にも 嫁は行っていた。嫁は打井川に来るよりも佐賀へ行く方が多かった。

**行商人** 上川口や伊田、佐賀から佐賀越えの道を越えて行商人が来た。魚を担ってきて、大正に入っても 奥になれば生魚は販売せず、塩サバなどを売っていた。打井川ではカツオやブリ、クジラなどが販売され、 新鮮な青物が食べられた。伊田のおばあさんは漁港で上がったブリを丸々担って行商人に来ていた。峠道 には馬を使う運搬屋「セグリヤ」もいた。



写真 11 佐賀へ向かう古道



写真 12 地蔵峠がある平場

## (3) 佐賀への道

**熊井の鍜治屋** 打井川には鍜治屋がなく、佐賀へ行くときに旧佐賀町熊井(写真 13)の鍜治屋によく寄っていた。田野々に行くより熊井に行く方が近い。春先には、皆が牛グワや鋤クワの修理、クワの打ち直しにいった。行きがけに熊井で鍜治屋に預けて佐賀へ行き、帰りにもらっていくこともあった。鍜治屋(現在育苗ハウスがあるあたりにあった)は高橋さんという元々大方町鞭にいた人がやっていた。道文神社の祭りには熊井からも市野々を越えて行った。また、熊井には田辺氏に由来を持つ熊野神社がある(写真 14)。



写真 13 熊井集落



写真 14 熊野神社

佐賀・熊野浦 佐賀の町には現在は閉まっているが大正地域の人々がよく使った宿屋「熊乃屋」の建物(写 真 15)、熊野浦には「田辺湛増上陸の地」(写真 16) や田辺湛増の水飲み場(写真 17)、中世のものと思わ れる石仏 (写真 18) などの史跡が残る。熊野神社の潮汲みが行われた海岸の岩場 (写真 19) も確認できた。 海岸沿いを歩けば、佐賀から熊井浦は近い。熊野神社の潮汲みや勧請の伝承から、大正と佐賀・熊野浦と のつながりを実感できた。



写真 15 熊乃屋跡



写真17 田辺湛増の水飲み場

#### 4、峠道と海山経済圏

聞き取り調査や現地踏査の結果、佐賀越の古道は 約60年前まで田野々-打井川-市野々(伊与喜)-熊井-佐賀-熊野浦をつなぐルートで盛んに利用さ れていた。古道は、人・牛・馬が行き交う往還とし て機能し、米や炭、魚などさまざまな物資が往来し ていた。中でも「打井川」「熊井」はその中継点とな る場所にあり、大正・佐賀の玄関口としての機能を 果たしていた。そして古道は佐賀港を経由して大 写真19 熊野神社の潮汲みが行われた海岸の岩場



写真 16 田辺湛増上陸地の碑(左)



写真 18 中世石像仏



阪・京都などの畿内方面とつながっていた「流通の道」であったことも確認できた。

古道の起源は、江戸期の地誌にも記された田辺湛増・永旦や熊野権現勧請の伝承から平安末期までさかのぼる可能性がある。また、南北朝期の尊良親王の家臣・秦道文をまつる道文神社の伝承も存在し、中世の伊与木郷と上山郷をつなぐ「地蔵峠」の重要性が浮かび上がってくる。いずれも源平や南北朝の内乱に付随する中央氏族や貴族の土佐潜伏の際に使われた「軍事の道」であったことも伺える。近世初期の『地検帳』では古道の存在を確認できないが、田野々・打井川の複数給人による特殊な土地支配形態から、一般農村でなく交通流通拠点としての役割を果たした地域である可能性も指摘した。古道を通した佐賀一大正間の交通・流通面での関わりは近世以降も続き、道文神社の祭りや熊野神社の潮汲みなど「信仰の道」としても継続されたことが分かった。

中世史家の服部英雄氏は、全国の歴史的な峠道の性格を「流通」「軍事」「信仰」の3つの道に区分して分析している(服部 2007)。「流通の道」は消費地と生産地を結ぶ牛の道、「軍事拠点」は軍事拠点と前線・緊迫地を結ぶ馬の道、「信仰の道」は人の足のみの道と分類しながらも、それぞれの相互性・共通性を指摘している。このような整理に従えば、佐賀越の古道も3つの性格を持った歴史的な峠道であることが確認できる。また、この古道は陸上の道だけでなく海上の道とつながり、古来から土佐の山村社会を畿内などの中央と結びつけていたといえよう。

打井川地区には、2010 年オープンの「海洋堂ホビー館四万十」、2012 年オープンの「海洋堂かっぱ館」があり、そのキャッチフレーズになった「辺鄙(へんぴ)な」地域として認識されている。しかし、佐賀越の古道の歴史を読み解くと、打井川地区が決して便の悪い、田舎の地区ではなかったことが分かり、打井川の隠れた地域像が明らかになった。すなわち、エネルギー革命以前の社会では、高知県中東部の物部川流域で示した川の道(舟運)を通して山村―農村―町―都市が相互補完的に機能する「流域経済圏」(楠瀬2009)とは異なる、佐賀越の古道(峠道)を介して山村―農村―海村―都市がつながる「海山経済圏」とも言える経済流通圏が機能していたことが想定できる(図2)。このような経済史的視点で、舗装された道

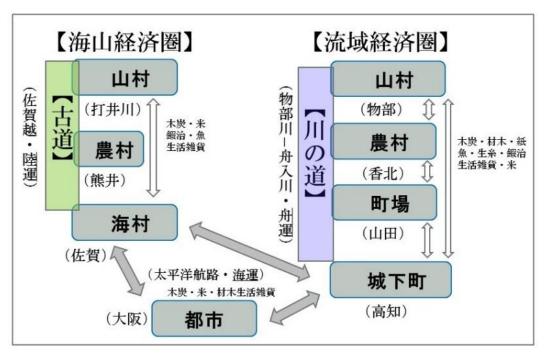


図2 高知県における海山経済圏と流域経済圏の模式図

路や鉄道などの交通網が整備されていなかった社会について、峠道が地域社会の維持・発展に果たした役割を改めて検証していかなければいけない。

#### 5、おわりに

古道が使用されなくなってから 60 年、古道の痕跡はほとんど残っておらず、その歴史を知る人も少なくなっているのは残念なことだ。「奥四万十山の暮らし調査団」では、今後熊野神社の大祭で行われた潮汲みを佐賀越を使って再現する計画を立てている。潮汲みの再現には、古老への聞き取りでその経路や作法などをもう少し深く調査する必要がある。

そこで、集落の歴史文化を地域づくりに活かす「地域再生の歴史学」(楠瀬 2013) の3段階プロセス(「記録」→「掘り起こし」→「普及」) から今後の取り組みを探ってみたい。まず①本稿で説明してきた調査研究による潮汲みや佐賀越の歴史民俗を「記録」する活動を行う。次に②潮汲みの再現を行い、住民にその歴史の価値を再認識してもらう「掘り起こし」の活動を行う。最後に③住民を巻き込んで佐賀越の道を歩くツアーや潮汲みの再現を行う「普及」の段階へと活動を進めたい。

高知県内でも香美市・香南市の「塩の道」(保存会)や高知市から嶺北地域へ至る参勤交代道「北山道」(5市町連携の北山道保存協議会)など各地で地域をまたいだ古道を活用した活動が行われている。「佐賀越」もこのような形で活用が進めば、歴史資源としての古道を活かした地域振興や四万十町と黒潮町の地域間連携の可能性も模索できるのではないかと考えている。

## 【註】

1 調査には本山昌文を案内役に武内文治、目良裕昭、林瑞穂、田辺唯夫、楠瀬慶太ら7人が参加した。

<sup>&</sup>lt;sup>2</sup> 打井川地区については、HP「四万十町地名辞典」 (https://www.shimanto-chimei.com/ア行-あいうえ お/う/打井川/) に詳しい。2016年3月に武内・楠瀬が行った聞き取り調査の成果も反映している。概況 はHPと『大正町史 資料編』を参考にまとめた。

<sup>3</sup> 地区内の江戸期の墓に刻まれた姓は「宇津井」から「討井」に変わり、明治になって今の「打井」に なっている(多賀編 1989)。

<sup>4</sup> 検地順に見ると【奥】「助次良」「舟右衛門」「次良太良」「勘介」「小右衛門」「若右衛門」「次郎大良」「蔵介」「次良太郎」「太良三郎」「興泉庵(寺)」「源七」「与次良」「九良次郎」「四良次郎」「藤左衛門」「与五」「新次郎」「市兵衛」「衛門次郎」「助次郎」「左馬助」「蔵進」「甚衛門」「新三郎」「新衛門」「助左衛門」「鍜治藤左衛門」【中】「五十良」「権左衛門」「清左衛門」「小次良」「弥左衛門」「弥次良」「源五良」「彦七」「吉祥庵」「三良次良」「吉衛門」「次良五良」【口】「□楽寺」「彦五良」「弐衛門」「与太良」「万次良」「蔵丞」「与二良」「弥八□□」「弥七」「藤五良」となる。

<sup>5</sup> 関田英里氏の『地検帳』の解説によれば「『某分』とされているものについては旧領の由緒を示すだけであって実際は長宗我部氏の直轄地となり、作職を登録されたものか、直接支配を受けたものでないかとも想像される」としており、『大正町史通史編』もこの説を踏襲している。

<sup>6 『</sup>大正町史通史編』もこの点に注目する。田野々と宇津井川村では「抱」地が多いことから、「抱」は「公領(長宗我部直轄地)における保有地または野だのまま所有する場合で、山分の各地にこの称が多く見受けられる」との横川末吉氏の研究(横川 1961)を引き「直轄地における保有形態」だとしている。7 検地順に見ると、【奥】は「助次良」(シヤノ川新開)「若右衛門」(ヒキカクシノ北ミソノ上)「若右衛門」(大タヤシキ)「次良大良」(ひかしやしき)「勘介」(名本ヤシキ)「太良三良」(ヲモヤノ南)「与五良」(□□北ノウエ)「小衛門」(□□西上)「衛門次良」(□□にし)「甚衛門」(ナロカイチノ上)「助左衛門」(ナロ川ノをく)など 15 軒と「興泉寺」の1 寺、【中】は「助左衛門」(クロヲ北ノ下)「清左衛門」(クロヲノ北新開)「権左衛門」(ムカイクロヲノウエ)「三良次良」(中小や谷ノウエ)「弥次郎」(ハキノナロ)「小次良」(はかわらひひかしのうへ)「弥左衛門」(はかわらひノ北)「介五良」(のほりくも)「ふな右衛門」(なもとやしき)「平衛門」(吉祥庵寺中北ノウエ)「源五良」(西モト)「兵衛」(西モト西)「彦七」(□□にしのうへ)「新次郎」(井ノ谷ノ下)「吉衛門」(□□ノ下)など 13 軒と「吉祥庵」の1 寺、

【□】は「与二良」(□□□)「藤五良」(□□□)「彦五良」(□□□)「弥次良」(□□□) など6軒が確認できる。

- 8 馬ノ助神社の「馬ノ助」が遊んだ谷。ウツボを獲って食べたと伝わる。
- 9 土佐の山村屋号については楠瀬 2018 を参照。
- 10 『南路志』田野々村の「古城記」には「熊野三所権現ハ、本伊与木郷熊野に御船着岸して、右社跡有。 夫を上山郷田野々へ勧請し玉ふ由。杉の木を則神体とせよとあるよし」とある。
- 11 清浄人の2人と、潮汲みに佐賀へ行く2人が同一かは確認できていない。
- 12 『大正町誌』486頁、『大正町史資料編』39頁には、秋田繁保宅とある。

# 【参考文献】

伊与木定 1984『上山郷(昔の大正邑)のいろいろ掻き暑めの記』

楠瀬慶太 2009「限界集落化の歴史的プロセスに見る山村の未来」『政策経営研究』 2009-vol.1

楠瀬慶太 2013「地域再生の歴史学」『地方史活動の再構築』雄山閣

楠瀬慶太 2018「土佐山村の屋号研究試論」『高知大国文』 49

大正町誌編纂委員会 1970『大正町誌』

大正町史編集会議委員会 2006『大正町史通史編』

大正町史編集会議委員会 2006『大正町史資料編』

多賀一造編 1989『大正のむかし話』大正町教育委員会

服部英雄 2007 『峠の歴史学』朝日新聞社

目良裕昭 2016「『黒潮沿海文化』の視点からみた上山郷」沿海文化研究会・黒潮町報告レジュメ

横川末吉 1961『長宗我部地検帳の研究』

# 【編集後記】

現地調査 (フィールドワーク) を行う歴史研究者や愛好家にとって、調査に協力いただいた住民の方々に研究成果を公表し、還元することは重要です。しかし、学術雑誌では、調査地図や聞き取りの内容などの研究成果を全て発表するには紙幅に限界があり、研究論文であるため内容も難解になりがちです。その意味で、1997 年から九州大学比較社会文化学府地域資料情報講座が現地調査を行う大学院生らの研究成果の公表の場として発刊した地域叢書シリーズ (計 17 刊) は、歴史研究の地域還元という大きな役割を果たしました。多い物では 200 頁に及ぶ報告書形式のため、調査地図や写真、歴史史料を多く収録し、膨大な地域の人たちの言葉や記憶を記録することができました。

本書『続土佐の地名を歩く』は地域資料叢書シリーズの趣旨を受け継ぎ、高知県内で活動するフィールドワーカーの調査成果を地図や写真を使いまとめたものです。地域の歴史は、郷土史家や大学で歴史学を学んだ研究者に限らず、歴史文化に関心を持つ誰しもが調査し、研究できるものです。本書が、古文書学や歴史地理学、民俗学などの方法論を踏まえて、地域の歴史文化を楽しく幅広く学ぶ一助となれば幸いです。

また、『続土佐の地名を歩く』の全文(PDF版)は、ホームページ『四万十町地名辞典』(https://www.shimanto-chimei.com/)で無料公開しています。

なお、本書は大成建設自然歴史環境基金 2017 年度助成(「住民による歴史地名の記録と 地域資源地図づくり」)を活用して発行しました。

# 【執筆者プロフィール】



武内 文治

1954年生。幡多郡大正町出身。四万十町役場退職後、県内各地を歩き 採取した地名をHP「四万十町地名辞典」で公開。地名のデータベー ス化・見える化・坩堝化が目標。日本地名研究所会員。四万十町在住。



横山 有弐

1956年生。高知市菜園場町出身。高知高専・同志社大文学部卒。いの町などで中学校教員(社会科)を務め、仁淀中教頭で退職。2016年から高知市春野郷土資料館職員として仁淀川流域や高知市春野町の歴史を調べる。プラモ・ジオラマ製作が趣味。高知市在住。



清水 謙次郎

1939年生。香美市土佐山田町出身。愛知県や東京都でのサラリーマン生活を経て 2016年に帰高。高知市内で町歩きするうちに「浦戸湾十景」「浦戸湾七島」など近現代の史跡を探るように。趣味は旅行やウオーキング。日本野鳥の会会員。高知市在住。



目良 裕昭

1976 年生。高知市潮江地区出身。勤労学生として市村高男先生(高知大学名誉教授)から中世地域史研究の手ほどきを受けて以来、『長宗我部地検帳』を基礎史料に中世土佐の都市や流通、地域社会の在り様を探求する。高知県立歴史民俗資料館資料調査員。高知市在住。



楠瀬 慶太

1984 年生。香美市土佐山田町出身。九州大学大学院で歴史学を学び、新聞記者の傍ら集落での地名収集および民俗伝承の聞き取りにいそしむ。棚田学会評議員。高知市在住。

# 【編集後記】

現地調査 (フィールドワーク) を行う歴史研究者や愛好家にとって、調査に協力いただいた住民の方々に研究成果を公表し、還元することは重要です。しかし、学術雑誌では、調査地図や聞き取りの内容などの研究成果を全て発表するには紙幅に限界があり、研究論文であるため内容も難解になりがちです。その意味で、1997 年から九州大学比較社会文化学府地域資料情報講座が現地調査を行う大学院生らの研究成果の公表の場として発刊した地域叢書シリーズ (計 17 刊) は、歴史研究の地域還元という大きな役割を果たしました。多い物では 200 頁に及ぶ報告書形式のため、調査地図や写真、歴史史料を多く収録し、膨大な地域の人たちの言葉や記憶を記録することができました。

本書『続土佐の地名を歩く』は地域資料叢書シリーズの趣旨を受け継ぎ、高知県内で活動するフィールドワーカーの調査成果を地図や写真を使いまとめたものです。地域の歴史は、郷土史家や大学で歴史学を学んだ研究者に限らず、歴史文化に関心を持つ誰しもが調査し、研究できるものです。本書が、古文書学や歴史地理学、民俗学などの方法論を踏まえて、地域の歴史文化を楽しく幅広く学ぶ一助となれば幸いです。

また、『続土佐の地名を歩く』の全文(PDF版)は、ホームページ『四万十町地名辞典』(https://www.shimanto-chimei.com/)で無料公開しています。

なお、本書は大成建設自然歴史環境基金 2017 年度助成(「住民による歴史地名の記録と 地域資源地図づくり」)を活用して発行しました。

# 【執筆者プロフィール】



武内 文治

1954年生。幡多郡大正町出身。四万十町役場退職後、県内各地を歩き 採取した地名をHP「四万十町地名辞典」で公開。地名のデータベー ス化・見える化・坩堝化が目標。日本地名研究所会員。四万十町在住。



横山 有弐

1956年生。高知市菜園場町出身。高知高専・同志社大文学部卒。いの町などで中学校教員(社会科)を務め、仁淀中教頭で退職。2016年から高知市春野郷土資料館職員として仁淀川流域や高知市春野町の歴史を調べる。プラモ・ジオラマ製作が趣味。高知市在住。



清水 謙次郎

1939年生。香美市土佐山田町出身。愛知県や東京都でのサラリーマン生活を経て 2016年に帰高。高知市内で町歩きするうちに「浦戸湾十景」「浦戸湾七島」など近現代の史跡を探るように。趣味は旅行やウオーキング。日本野鳥の会会員。高知市在住。



目良 裕昭

1976 年生。高知市潮江地区出身。勤労学生として市村高男先生(高知大学名誉教授)から中世地域史研究の手ほどきを受けて以来、『長宗我部地検帳』を基礎史料に中世土佐の都市や流通、地域社会の在り様を探求する。高知県立歴史民俗資料館資料調査員。高知市在住。



楠瀬 慶太

1984 年生。香美市土佐山田町出身。九州大学大学院で歴史学を学び、新聞記者の傍ら集落での地名収集および民俗伝承の聞き取りにいそしむ。棚田学会評議員。高知市在住。

# 地域資料叢書 18 続土佐の地名を歩く 一高知県地域史研究論集 **【**一

シリーズ: 奥四万十山の暮らし調査団叢書 2 編集: 奥四万十山の暮らし調査団

発行者: 奥四万十山の暮らし調査団

(高知県四万十町江師 485-3)

発行日: 平成 31 年 1 月 6 日初版発行

印刷・製本: せいぶ印刷工房 (高知県四万十市荒川 1039-6)

# 地域資料叢書 18 続土佐の地名を歩く 一高知県地域史研究論集 **【**一

シリーズ: 奥四万十山の暮らし調査団叢書 2 編集: 奥四万十山の暮らし調査団

発行者: 奥四万十山の暮らし調査団

(高知県四万十町江師 485-3)

発行日: 平成 31 年 1 月 6 日初版発行

印刷・製本: せいぶ印刷工房 (高知県四万十市荒川 1039-6)